

恵庭市

# 柏木川4遺跡・柏木川13遺跡(2)

— 柏木川改修工事用地内埋蔵文化財調査報告書 —

平成16年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

恵庭市

# 柏木川4遺跡・柏木川13遺跡(2)

— 柏木川改修工事用地内埋蔵文化財調査報告書 —

平成16年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



柏木川4遺跡全景 N→S



柏木川13遺跡F2出土のガラス玉

## 例 言

1. 本書は柏木川改修工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成16年度に実施した恵庭市柏木川4遺跡、同柏木川13遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 調査は、第1調査部第2調査課が担当した。
3. 本書の執筆、編集は、立田 理が行った。第Ⅲ章5については昨年度柏木川13遺跡の調査担当者第2調査部第1調査課 鈴木 信が執筆した。
4. 現場の遺構図、土層図などの作図・整理は立田が担当し、統括した。
5. 調査写真・遺物写真・写真図版の編集は吉田 裕史洋が担当した。
6. 本書の報告に関する遺物整理は立田が担当した。
7. 遺跡の炭化種子、骨の分析は株式会社バリノ・サーヴェイに依頼し、報文をIV章に掲載した。
8. 住居炭化材の樹種同定は浅井学園大学三野紀雄氏に依頼し、報文をIV章に掲載した。
9. 調査にあたっては下記の諸機関、諸氏から御指導、御協力をいただいた。

恵庭市教育委員会、恵庭市郷土資料館

上野秀一、上屋真一、葛西智義、柏木大延、金谷文夫、兼平一志、工藤義衛、小林幸雄、  
仙庭伸久、高橋 理、高橋正勝、豊田宏良、長町章弘、松谷純一、森 秀之



## 記号等の説明

- 本文中および図、表中では以下の記号を用い、原則として確認順に番号を付した。  
H：堅穴住居跡 P：土坑 F：焼土 HP：住居跡内の土塙・柱穴 HF：住居跡内の焼土  
また柏木川4遺跡においては、堅穴住居跡から焼土までの遺構について、頭に柏木川の頭文字を意味するKを付し、たとえば住居跡はKH-とした。
- 遺構図の縮尺は原則として40分の1である。その他の縮尺を用いるものはスケールを付した。
- 遺構平面図の小数字は標高（単位m）を表している。
- 基本土層図、遺構の土層断面図に表記した数字は、標高（単位m）を表している。
- 基本土層はローマ数字、それ以外の土層はアラビア数字を用いて表した。
- 遺構の規模は、「確認面の長軸長×短軸長/床面（坑底）での長軸長×短軸長/最大の深さ」を単位cmで示してある。なお、一部破壊されているものは数値に（ ）を付した。
- 火山灰の略号は、北海道火山灰命名委員会（1982）『北海道の火山灰』による。  
以下の略号を用いている部分がある  
Ta-a：樽前a降下軽石層  
B-Tm：白頭山-苦小牧火山灰  
En-a：恵庭a降下軽石層  
Spf1：支笏カルデラ起源大規模火山砕屑堆積物
- 掲載した実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。  
遺構 1：40 遺物出土状況 1：20  
復元土器 1：3（図Ⅱ-44、土器集中1は1：4） 土器拓本 1：3  
剥片石器 1：2 礫石器 1：3  
土製品 1：2 石斧および石斧に関連する石器 1：2
- 石器・土製品・石製品の大きさは「最大長×最大幅×最大厚」で記してある。
- 遺物実測図中でたつき痕はV-V、すり痕は|—|で範囲を表した。また、自然面はドットで表現した。
- 焼土は遺構の覆土から検出された場合を含めて以下のトーンを用いて表した。



その他の使用したトーンに関しては、その都度凡例を付してある。

- 遺物出土状況図について、以下のシンボルを使用した部分がある括弧内の・前は覆土、後は床（坑底）出土の際のものである  
土器（○・●） 剥片石器（☆・★） 礫石器（△・▲）  
フレイク（□・■） 礫（◎・×）

# 目 次

口絵

例言

記号等の説明

目次

I 章 調査の概要	
1 調査要項	1
2 調査にいたる経緯	1
3 遺跡の立地	2
II 章 柏木川4遺跡	
1 調査結果の概要	7
2 発掘区の設定	7
3 層序と自然地形	13
4 遺構とその遺物	29
5 包含層出土の遺物	85
6 成果と問題点	103
III 章 柏木川13遺跡の調査	
1 調査結果の概要	109
2 調査の方法	109
3 遺構とその遺物	111
4 包含層出土の遺物	117
5 成果と問題点	121
IV 章 自然科学的分析	
1 柏木川13遺跡の自然科学的分析	125
2 柏木川13遺跡の出土焼骨	129
3 柏木川13遺跡の住居跡から出土した炭化材	132
4 柏木川13遺跡 F2出土ガラス玉の蛍光X線分析	136
引用文献	138

写真図版

報告書抄録

## 挿図目次

### I 章 調査の概要

図 I - 1	遺跡の位置	3
図 I - 2	周辺の遺跡(1)	4
図 I - 3	周辺の遺跡(2)	5

### II 章 柏木川 4 遺跡の調査

図 II - 1	調査区の設定と調査区の様子	8
図 II - 2	土層模式図・土層図凡例	13
図 II - 3	旧河道	15
図 II - 4	旧河道土層断面図(1)	17
図 II - 5	旧河道土層断面図(2)	18
図 II - 6	旧河道土層断面図(3)	19
図 II - 7	旧河道土層断面図(4)	20
図 II - 8	旧河道土層断面図(5)	21
図 II - 9	旧河道土層断面図(6)・旧河道出土の石器	22
図 II - 10	旧河道出土の石器	23
図 II - 11	地割れ・谷	25
図 II - 12	谷出土の遺物	26
図 II - 13	Ⅲ層中の暗赤褐色土	27
図 II - 14	遺構配置図(1)	30
図 II - 15	遺構配置図(2)	31
図 II - 16	住居跡	32
図 II - 17	住居跡出土の遺物	33
図 II - 18	土坑(1)	35
図 II - 19	土坑(2)	36
図 II - 20	土坑(3)	39
図 II - 21	土坑(4)	40
図 II - 22	土坑(5)	42
図 II - 23	土坑(6)	44
図 II - 24	土坑(7)	46
図 II - 25	土坑(8)	48
図 II - 26	土坑(9)	50
図 II - 27	土坑00	52
図 II - 28	土坑01	54
図 II - 29	土坑02	56
図 II - 30	土坑03	59
図 II - 31	土坑04	61
図 II - 32	土坑05	64
図 II - 33	土坑06	66
図 II - 34	土坑07	68
図 II - 35	土坑08	70

図 II - 36	土坑出土の遺物(1)	71
図 II - 37	土坑出土の遺物(2)	72
図 II - 38	土坑出土の遺物(3)	73
図 II - 39	焼土(1)	76
図 II - 40	焼土(2)	78
図 II - 41	焼土出土の遺物	80
図 II - 42	土器集中 1 ~ 3・集石 1	82
図 II - 43	土器集中 4・集石 2	83
図 II - 44	土器集中・集石出土の遺物	84
図 II - 45	包含層出土の土器(1)	86
図 II - 46	包含層出土の土器(2)	87
図 II - 47	包含層出土の土器(3)	90
図 II - 48	包含層出土の土器(4)	91
図 II - 49	包含層出土の石器(1)	93
図 II - 50	包含層出土の石器(2)	94
図 II - 51	包含層出土の石器(3)	95
図 II - 52	包含層出土の石器(4)	97
図 II - 53	各遺跡の小Tピット	104
図 II - 54	本遺跡出土のⅡ群 b - 2 類土器	106
図 II - 55	V 群土器の分布	107

### III 章 柏木川13遺跡の調査

図 III - 1	調査区・調査区設定図	110
図 III - 2	遺構配置図	111
図 III - 3	住居跡H 6(1)	112
図 III - 4	住居跡H 6(2)	114
図 III - 5	土坑	116
図 III - 6	遺構出土の遺物・平成15年度調査の遺物(未報告分)	117
図 III - 7	包含層出土の土器	118
図 III - 8	包含層出土の石器	119
図 III - 9	豊田分類	121
図 III - 10	鈴木分類	121
図 III - 11	カリンバ3・SH - 3 屋根組み②案	123

### IV 章 自然科学的分析

図 IV - 1	H 6 炭化材出土状況と樹種	134
図 IV - 2	平成15年度柏木川13遺跡 F 1・2 と試料(1)	137

## 図版目次

### II章 柏木川4遺跡の調査

- 図版II-1 旧河道の調査(1)  
図版II-2 旧河道の調査(2)  
図版II-3 旧河道の調査(3)  
図版II-4 旧河道の土層(1)  
図版II-5 旧河道の土層(2)  
図版II-6 旧河道の遺物(1)  
図版II-7 旧河道の遺物(2)  
図版II-8 谷の調査(1)  
図版II-9 谷の調査(2)・谷の遺物  
図版II-10 地割れ  
図版II-11 III層中の暗黄褐色土  
図版II-12 KH-1(1)  
図版II-13 KH-1(2)  
図版II-14 KH-1の遺物  
図版II-15 土坑(1)  
図版II-16 土坑(2)  
図版II-17 土坑(3)  
図版II-18 土坑(4)  
図版II-19 土坑(5)  
図版II-20 土坑(6)  
図版II-21 土坑(7)  
図版II-22 土坑(8)  
図版II-23 土坑(9)  
図版II-24 土坑00  
図版II-25 土坑01  
図版II-26 土坑02  
図版II-27 土坑03  
図版II-28 土坑04  
図版II-29 土坑05  
図版II-30 土坑06  
図版II-31 土坑07  
図版II-32 土坑08  
図版II-33 土坑09  
図版II-34 土坑00  
図版II-35 土坑01  
図版II-36 土坑02  
図版II-37 土坑03  
図版II-38 土坑04  
図版II-39 土坑05  
図版II-40 土坑06  
図版II-41 土坑07  
図版II-42 土坑08  
図版II-43 土坑09  
図版II-44 土坑の遺物(1)

- 図版II-45 土坑の遺物(2)  
図版II-46 土坑の遺物(3)  
図版II-47 土坑の遺物(4)  
図版II-48 土坑の遺物(5)  
図版II-49 焼土(1)  
図版II-50 焼土(2)  
図版II-51 焼土の遺物  
図版II-52 土器集中・集石(1)  
図版II-53 土器集中・集石(2)  
図版II-54 土器集中・集石(3)  
図版II-55 土器集中の遺物  
図版II-56 集石1の遺物  
図版II-57 包含層の調査  
図版II-58 調査終了状況  
図版II-59 包含層の土器(1)  
図版II-60 包含層の土器(2)  
図版II-61 包含層の土器(3)  
図版II-62 包含層の土器(4)  
図版II-63 包含層の土器(5)  
図版II-64 包含層の土器(6)  
図版II-65 包含層の土器(7)・石器(1)  
図版II-66 包含層の石器(2)  
図版II-67 包含層の石器(3)  
図版II-68 包含層の石器(4)・土製品

### III章 柏木川13遺跡の調査

- 図版III-1 調査前状況  
図版III-2 H6(1)  
図版III-3 H6(2)  
図版III-4 H6(3)  
図版III-5 H6(4)  
図版III-6 H6(5)  
図版III-7 土坑  
図版III-8 遺構の遺物  
図版III-9 調査風景(1)  
図版III-10 調査風景(2)  
図版III-11 調査風景(3)  
図版III-12 調査終了状況  
図版III-13 包含層の遺物(1)  
図版III-14 包含層の遺物(2)

### IV章 自然科学的分析

- 図版IV-1 柏木川13遺跡 種実遺体  
図版IV-2 柏木川13遺跡 H6炭化木材の  
木材組織

# 表 目 次

## II 章 柏木川 4 遺跡の調査

表 II-1	柏木川 4 遺跡出土遺物点数	7
表 II-2	旧河道出土掲載土器一覧	28
表 II-3	旧河道出土掲載石器一覧	28
表 II-4	谷出土掲載土器一覧	28
表 II-5	谷出土掲載石器一覧	28
表 II-6	遺構一覧	98
表 II-7	遺構出土土器一覧	99
表 II-8	遺構出土石器等一覧	99
表 II-9	遺構出土掲載土器一覧	100
表 II-10	遺構出土掲載石器一覧	100
表 II-11	包含層出土掲載土器一覧	101
表 II-12	包含層出土掲載石器一覧	102
表 II-13	小 T ビット一覧	103

## III 章 柏木川 1 3 遺跡の調査

表 III-1	柏木川 13 遺跡出土遺物点数	109
表 III-2	遺構一覧	120
表 III-3	遺構出土掲載土器一覧	120
表 III-4	遺構出土掲載石器一覧	120
表 III-5	包含層出土掲載土器一覧	120
表 III-6	包含層出土掲載石器一覧	120
表 III-7	外 4 本柱穴住居の検討属性	122
表 III-8	竪穴形態・鈴木分類	122
表 III-9	豊田・鈴木分類	122
表 III-10	鈴木分類・外柱穴設置角度	122
表 III-11	柱穴深土	123

## IV 章 自然科学的分析

表 IV-1	種実同定結果	127
表 IV-2	検出分類群一覧	129
表 IV-3	骨同定結果	130
表 IV-4	柏木川 13 遺跡 H 6 竪穴住居址から出土した炭化材の樹種同定	132
表 IV-5	柏木川 13 遺跡 竪穴住居址建築材の樹種構成	133
表 IV-6	試料 1	137
表 IV-7	試料 2	137

# I 調査の概要

## 1 調査要項

事業名：柏木川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査

事業委託者：北海道石狩支庁

事業受託者：財団法人 北海道埋蔵文化財センター

調査体制：第1調査部長 千葉 英一

第1調査部 第2調査課 課長 佐藤 和雄

主任 土肥 研晶

主任 立田 理

主任 吉田裕吏洋

遺跡名・登載番号	所在地	調査面積	調査期間	発掘担当者
柏木川4遺跡 (A-04-21)	恵庭市柏木町 610、612ほか	8,470㎡	平成16年5月10日～平成17年3月31日 発掘：平成16年5月10日～9月3日 整理：9月6日～平成17年3月31日	立田 理 吉田裕吏洋
柏木川13遺跡 (A-04-107)	恵庭市北柏木町1丁目 252ほか	132㎡	平成16年5月20日～平成17年3月31日 発掘：平成16年5月20日～6月10日 整理：8月2日～平成17年3月31日	立田 理

## 2 調査に至る経緯

柏木川流域の遺跡の調査にいたる経緯については、『柏木川13遺跡』（北理調報203集）においてすでに述べてあるため、ここでは遺跡ごとに今年度における事実について述べることにする。

### (1) 柏木川4遺跡

柏木川4遺跡においては、文化課文化財調査グループが柏木川4、柏木川5遺跡の範囲に当たる第1遊水地、工事面積約50,000㎡のうち、47,900㎡の調査を、平成15年7月15～17日、同年10月15日の2回に分けて行った。その結果、上記47,900㎡のうち、発掘調査が必要な範囲は34,000㎡、そのうち本発掘調査は21,000㎡というものであった。これらの範囲は地形と遺物出土状況から調査レベルを3段階に区分している。その内容を要約すると、地形において段丘上と川に向かう緩斜面の2つに分け、このうち段丘上については包含層の残存状況がよいところ①と悪いところ②がある。緩斜面部分については、全体に包含層が良好に残存しており、遺物が出土するところ③とほとんどまったく出土しないところ④がある。これらのうち本発掘調査の必要なものは①、③、遺構確認調査は②、工事立会的な調査が必要なものとして④をあげている。また④の地区については事前にトレンチ調査をして、取り扱い範囲を再検討することが望ましいとしている（図Ⅲ-1上段参照）。

平成16年4月に財団法人北海道埋蔵文化財センターに対して当遺跡の発掘調査について委託の協議があり、調査面積8,260㎡、うち遺構確認範囲、トレンチ調査範囲160㎡に対して事業を受託した。その後柏木川13遺跡の調査が急遽決定し、調査面積を減じて8,128㎡となった。

### (2) 柏木川13遺跡

平成16年4月、15年度調査において南端となっていた柏陽橋のさらに上流側において、工事方法を

変更したことにより新たに発掘調査必要範囲が生じたとの連絡が道教委よりあった。すでに年度内の事業量が決定した後であり、当センターでの対応が可能かどうか検討をする必要があった。担当課である第1調査部第2調査課は、調査予定地の試掘調査の結果から、包含層が残存していないかほとんどないと考えられること、また、昨年度調査予定範囲であり、発掘調査の準備が比較的容易にできることから同年調査の予定であった柏木川4遺跡の調査を減じることにより対応可能として、発掘調査を承諾する旨を道教委文化課に返答した。

### 3 遺跡の立地

遺跡の立地を図1-1～3に示した。図1-1は国土地理院発行、2万5千分の1地形図「恵庭」に柏木川4、13両遺跡の位置を落としたものである。両遺跡とも柏木川のの上流～中流域に位置するが、柏木川4遺跡のほうが上流、右岸に位置し、柏木川13遺跡はさらに約1.5km下流の左岸に位置する。両遺跡は地形的には、柏木川の形成した段丘上に位置する。標高は柏木川4遺跡が約45m、柏木川13遺跡が約30mである。

図1-2、3に示した地図は柏木川流域の遺跡分布図である。この地図は昭和22年に当時の米軍が撮影し、現在は国土交通省国土地理院が所有する航空写真を基に等高線を作成したものである。範囲は図1-2が柏木川4遺跡から西島松6遺跡までの範囲のもの。図1-3は柏木川4遺跡から柏木川のさらに上流部の様子、またそれより南の地域で、茂漁川流域を含めた地形図である。図1-2については現在までに行われた調査地域の範囲を示してある。

これらのことを参考に、図1-2について現在までの調査成果から、時期ごとの遺構と遺物の様子を簡単に再確認しておきたい。

#### 縄文時代早期前半（貝殻文土器期）

この時期の資料は断片的ではあるが、西島松5、9遺跡、柏木川7、11、13遺跡で出土例がある。柏木川13遺跡の2003年における当センターの調査では、住居跡が1軒検出されている。また、図の範囲外ではあるが、さらに下流の島松仲町遺跡では集石遺構が確認されている。そのほかは包含層中からの断片的な資料である。また未報告ではあるが、西島松5遺跡の今年度の調査において、同時期の廃棄場とみられる堆積を確認し、10個体を超える復元土器が出土している。

#### 縄文時代早期後半（縄文土器期）

この時期の資料は、柏木川1、8遺跡以外のすべての遺跡で出土している。このうち遺構が検出されたもののうち、時期の明確なものは西島松5遺跡で住居跡が3軒、柏木川11遺跡で土坑、同13遺跡で集石が見つかっている。

#### 縄文時代前期

前半期の静内中野式に相当する資料は西島松5遺跡、柏木川7、8、13遺跡で出土している。後半期の大麻V式、円筒土器下層式に相当する資料は柏木川7、8、11遺跡で出土している。このうち時期の明確な遺構が見ついているものは前半期においては西島松5遺跡で、現在報告済みのものは住居跡が2軒である。後半期は遺構の検出が比較的多く、明確なものでは柏木川7遺跡で7軒、柏木川11遺跡で1軒の住居跡、1基の土坑が検出されている。

#### 縄文時代中期

縄文時代中期は、図の範囲では調査が行われたすべての遺跡で出土している。前半期の円筒土器上層式のものに比較し後半期の天神山、柏木川式に相当する資料が豊富である。前半期の遺構は柏木

川13遺跡の1988年の調査において住居跡が1軒、土坑墓が1基検出されるのみである。後半期の遺構は多く、柏木川13遺跡で少なくとも3軒の住居跡、また柏木川7遺跡では柏木川式期の住居跡が2軒、西島松5遺跡では報告済みのものでは天神山式期のものが少なくとも3軒、西島松9遺跡においても1軒検出されている。また、柏木川1遺跡においては柏木川式の標識資料のほか、詳細は不明であるが住居跡が6軒検出されている。

#### 縄文時代後期

出土点数の多寡はあるものの、柏木川8遺跡以外のすべての遺跡で出土している。ほとんどが断片的な資料であり、遺構が検出されているのは西島松5遺跡があげられる。遺構数は多く、明確なもののみでも、住居跡10軒以上、土坑60基以上が確認されている。また未報告ではあるが、平成15、16年度の同遺跡の調査では副葬品を伴う多数の墓が検出されている。そのほかの遺跡においては、柏木川11遺跡A地区において後期中葉～後葉にかけての住居跡が2軒、土坑が5基検出されている。また柏木川13遺跡においては後期初頭の住居跡が1軒検出されている。

#### 縄文時代晩期

すべての遺跡で遺構が確認されている時期である。しかしながら住居跡は1軒で、柏木川11遺跡A地区の調査でその可能性のあるものが検出されるのみである。そのほか限定できないものの、この時期に属するとみられる土坑は多数検出されており、平面形が直径1m内外の円形を呈する土坑は多くの遺跡で検出されている。この種類の土坑は柏木川4遺跡、柏木川13遺跡においても検出されている。

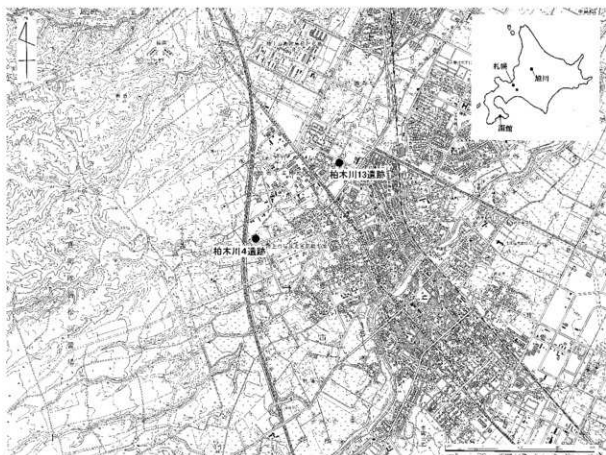


図1-1 遺跡の位置



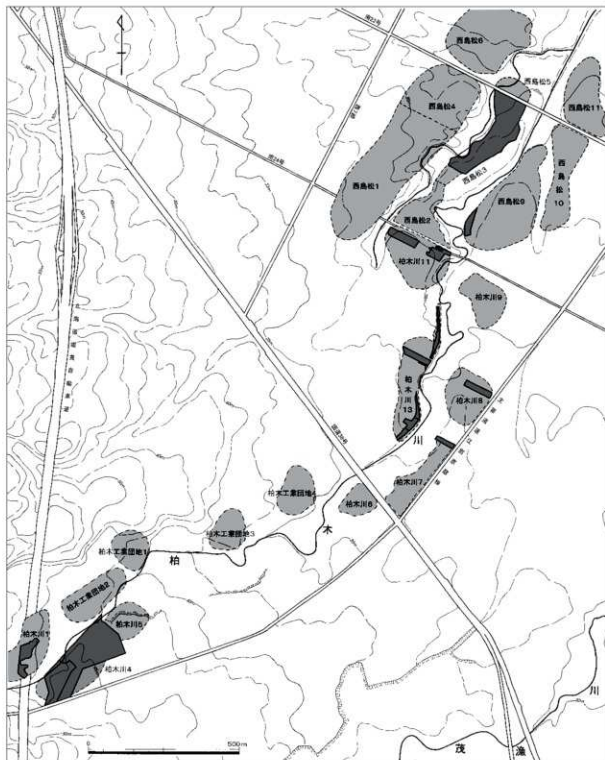


図 I - 2 周辺の遺跡(1)

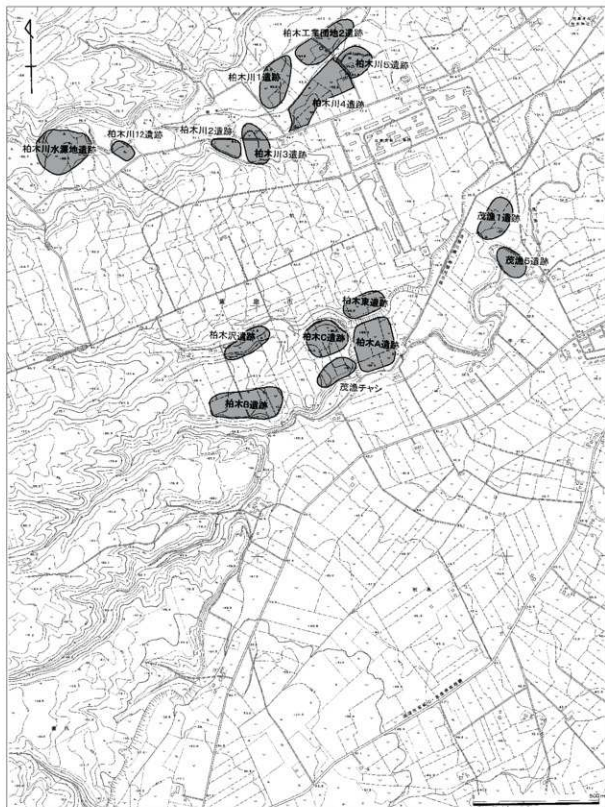


図1-3 周辺の遺跡(2)

### 縄文時代

縄文時代前半期の時期においては遺物、遺構とも未確認であるが、中葉の後北式の時期には若干の遺構も含め、柏木川11遺跡B地区、柏木川13遺跡、西島松5遺跡で出土しており、このうち遺構があるのは柏木川13遺跡の2003年、当センターの調査で、袋状土坑を持つ墓、礫の詰まった土坑が合わせて2基、焼土が検出されている。北大式の時期においては、柏木川7遺跡で明確な居住の跡が見つかっている。また土坑墓は西島松5遺跡において多数確認されている。西島松9遺跡においても焼土が確認されている。

### 縄文文化期

この区域内で検出された遺構は、詳細な場所が不明である西島松南B遺跡の2軒の竪穴住居跡を含めれば、全部で10軒の住居跡、2基の土坑墓、1基の土坑が確認されている。未報告ではあるが、西島松5遺跡の8軒のものを加えると計18軒にのぼる。

10軒の住居跡は、時期のわかるもののうち、8世紀後半から9世紀前葉にかけての縄文文化前期に相当するものがほとんどで、柏木川13遺跡の1988年の調査におけるSH-1や、同遺跡の2003年当センターの調査における、H1、2がこの時期のものとみられる。一方中期に相当するものは前述した柏木川13遺跡、H3、4があげられる。

## II 柏木川4遺跡の調査

### 1 調査結果の概要

今年度の調査において検出された遺構は住居跡が1軒、土坑78基、焼土19ヶ所、土器集中4ヶ所、集石2ヶ所である。時期の明確なものは少ないが、住居跡は縄文時代前期後半のもの。土坑は縄文時代晩期のものが多いとみられる。出土遺物の総点数は7,096点、うち土器が5,336点、石器等が1,760点である。土器は縄文時代晩期、中期の順で多く出土し、石器のうち定形的なものはスクレイパー、石鏃などが出土している。

表Ⅱ-1 柏木川4遺跡出土遺物点数

土 器										
分類	I群 b類	II群	II群 b類	III群	IV群	V群	VI群	VII群	不明	計
発掘	1	68	19	1462	9	2716	5	5	8	4293
遺構	0	154	642	48	0	187	10	0	2	1043
計	1	222	661	1510	9	2903	15	5	10	5336

石 器 等																							
分類	石鏃 ・片	石槍 ・片	ナイフ ・付片	バスク レイ	石 核	原 石	Rフ レイト	フ レイト	石 斧 ・片	石 斧 原 材	捲 切 残 片	た た き 石	す り 石	石 北 冠 海 ・ 遺 片 式	砥 石	台 石	石 皿 ・ 片	あ 加 工 石 の 片	礫 ・ 礫 片	粘 土 塊 或 石 孔	自 有 石 製 品	石 玉	計
発掘	21	3	12	29	1	7	37	1311	13	1	1	4	2	5	3	0	3	2	187	3	1	1	1648
遺構	0	1	1	1	0	0	3	17	1	0	0	4	1	5	0	2	5	0	69	1	0	1	112
計	21	4	13	30	1	7	40	1328	14	1	1	8	3	10	3	2	8	2	256	4	1	2	1760

### 2 調査の方法

#### (1) 発掘区の設定

現地調査の基本図は北海道土木現業所の石狩川水系柏木川「第1遊水地全体平面図」1,000分の1を使用した。工事計画により受託した遺跡調査範囲から、発掘区の設定は以下のように行った。

計画範囲には基準線が設けられている。これは工事範囲のほぼ中央を通る約4kmの直線であり、500mごとに8ヶ所にSP0、50、100・・・400とされる基準点が設置されている。この直線をMラインとした。さらにこの直線に直行するラインを設け、SP200と直交するラインを40ラインとした。そしてそれぞれの直線に平行な線を5m間隔で設定し、調査区内を5mの方眼で覆った。北西—南東に走る直線については数字を、北東—南西に走る直線に関してはアルファベットをつけ、西端に近づくほど数字とアルファベットが若くなるよう設定した。SP200との交点はM-40となる。各グリッドの呼称は西にある杭を基準とすることとした。

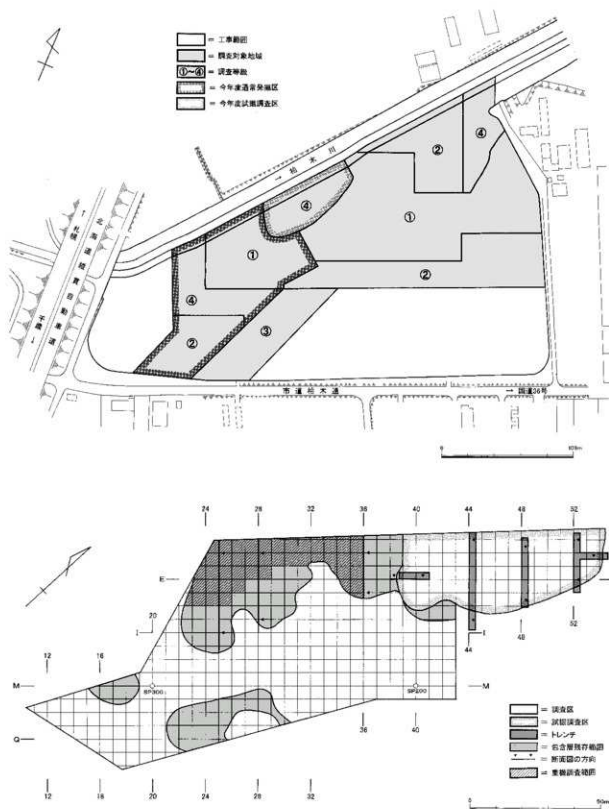
SP200とSP300のXY座標は以下のとおりである。

$$SP200 (M-40) = X = -123189.720 \quad Y = -56769.409$$

$$SP300 (M-15) = X = -123281.528 \quad Y = -56854.240$$

これらのグリッドの打設に際し、20mごとに標高数値を落とした杭を設置した。標高は恵庭市北柏木町1丁目こぼと公園の4級水準点(H=31.790m)を使用した。なおこれらの基準杭と5m方眼杭

II 柏木川4遺跡の調査



図II-1 調査区の設定と調査区の様子

の設置は株式会社シン技術コンサルに依頼した。

## (2) 調査の方法

調査は1,468㎡の通常発掘調査、6,500㎡の遺構確認調査、そして、160㎡の試掘調査の総面積8,128㎡の調査として計画された。これら調査の方法について、通常発掘および遺構確認調査と試掘調査の2つ、さらにその工程についての説明を3節に分けて説明する。

### a) 通常発掘・遺構確認調査

調査区には耕作による攪乱を受けていた部分があったため、バックフォアを用いて耕作土および表土の除去を行った。前節でも述べたが、包含層は段丘上の平坦面に於いてはほぼ全面攪乱を受けており、そこから柏木川に至る緩斜面や、調査区内に半島状に川に突出している部分近くでは良好な包含層の堆積が確認できた。

残存の状況については図Ⅱ-1下段のとおりである。このうち包含層が残存しているものの遺構確認区とされた部分は、概ね36ラインより南西に広がる部分であった。耕作土除去の際、C-33付近で一部深掘りをしてその層厚を確認したところ、1mを越える黒褐色土の堆積があった。試掘調査や表土剥ぎの際にも遺物がほぼまったく出土しなかったものの、このような土の状態、また周辺には柏木川1、柏木川5遺跡が存在している遺跡密集地区であったため、遺構確認として除去することがためられるものであった。

そのためこれらの堆積に直行する形でトレンチを設け、堆積また遺物の出土状況を確認した上で、これらの包含層についての取り扱いを決定することとした。トレンチは25ライン、28ライン、36ラインに設け、面積は約250㎡であった。結果は36ライントレンチにおいて153点の遺物が出土したものの、25、28ラインではそれぞれ、4点、5点にとどまるものであった。そのため、36ライントレンチについてはトレンチを追加して遺物の広がりを確認し、そのほかの部分については重機による調査に切り替えることとした。しかし、これまでの調査経験から、川に向かう斜面の落ち際には遺物が出土することが多いとの認識から、このうち約750㎡については手掘り調査とすることにした。範囲は図Ⅱ-1のとおりである。重機調査部分については包含層の調査をせず、最終面まで遺物を探しながらバックフォアで除去し、遺構の有無を確認することとした。

段丘上については、包含層の残存がみられる部分については掘り下げを、基盤層が露出している部分については鍬鏝を用いて人力で精査するとともに遺構確認も同時に行った。それぞれ遺構の確認、調査を終えると、最終面を測量し、残った自然攪乱とみられる染みを除去して調査の終了とした。

### b) 試掘調査

調査区のうち、最も北側に位置する低地部分は、試掘調査が行われていない部分である。この部分は今年度に試掘調査を行い、来年度以降の調査が行われることになっている。この低地部分は前述した半島部分の北西側隣接地で、付近より4mほど低く、半月状の平坦な低地となっている。このため、河川氾濫による堆積が見られることが予想された。このことから、調査は河川堆積の時期についての知見、またその堆積と遺物包含層との関連を調べるため、包含層の残存部分にかかるようトレンチを設定して行った。調査に際してはまず現代の耕作土、また洪水層とみられる礫の堆積をバックフォアで除去したのち、人力で調査を行った。この調査の結果、柏木川の旧河道を検出した。これについては第2節で述べる。

### c) 調査の日程

調査の日程は、調査区の面積が大きいことから、計画の誤差が生じる可能性があった。そのため表土剥ぎ、プレハブの設置などを早めに行った。その結果、人力による調査は計画より1週間早い5月

24日より行うことができた。その後調査は概ね計画通りに進捗したが、表土剥ぎに際して面積が約800㎡不足していたことがわかり、6月28日から調査区拡張を行った。このため盆休前の8月10日に調査を終了する計画を変更し、9月3日にすべての調査を終了した。

### (3) 整理の方法

#### a) 図面・台帳

原図は、標高数値、セクションポイントの位置・遺物取り上げ番号と台帳記入の遺物番号、必要事項の記入、訂正などの作業を行った。訂正や変更があった場合はその箇所が確認できるように原図に書き込んでいる。その後、B3版方眼紙に版下図となることを考慮した素図を作成した。素図、および原図は当センターに保管してある。

#### b) 写真

##### スタジオ撮影

安定した光量で撮影することができ、遺物の持つ本来の色を写真においても再現するため、ストロボを用いて行った。復元土器、石器の一部については立面撮影を行った。石器においては解離による無影撮影が一般的ではあるが、立面による撮影は立体感、質感など、遺物実測図では表現の難しい点について補うことができる。立面撮影の背景に白いデコラ板（無反射で蛍光塗料を使用していないもの）を使用した。撮影においては、特に立体感を表現することに留意して行った。また、実測図では表現できない、遺物の持つ色調や手触りなどの質感を感じさせるようなライティングを心がけた。立面撮影全般に、普段ものを見る時の自然な角度内での撮影を心がけ、写真を見るものに不自然感を与えない構図を目指した。現場での撮影と同様、1つの被写体に対して同一条件下で2コマ撮影した。

**機材** ストロボ機材は3200W/Sのジェネレーター（コメントC A3200）を2～3台、発光部（C A32H）を2～6灯、ディフューザーは、ライトバンク・アンブレラを使用した。

カメラは、WISTA45VXに6×7用スライド式アダプターをつけて用い、フィルムはブローニーサイズのT-MAX100とE100Gを使用した。必要に応じて同フィルムの4×5サイズも使用した。

##### 現像

**フィルム現像** カラーリバーサルフィルム・カラーネガフィルムの現像は外注により処理している。モノクロフィルムには、自動現像機（ILFORD ILFOLAB FP40）での自家処理を行っている。これは、約15分で同時に2本の現像～乾燥までの処理をすることができる。大きな利点としてフィルムがパトローネやマガジンに入っているため、全暗黒にしなくても処理できる。また、ほぼ一定の現像がなされるので品質も安定することがあげられる。

**ペーパー現像** 写真図版用のモノクロ写真の焼付け、整理用の密着焼きの現像は自動現像機（ILFORD ILFOLAB MG2950）での自家処理を行なっている。この機械は、一定の条件での現像となるため、露出時間の増減による仕上がりの予想がしやすいという利点がある。

##### 保管・管理

**写真台帳** 現場で作成した写真台帳、またスタジオ撮影した台帳はパソコンに入力し、被写体による検索が可能なデジタルデータベースとして管理している。これは画像データを別フォルダにJPEG形式で保存し、文字データファイルの画像領域をリンクさせる形式をとるものである。これによりデータ量の圧縮と作業スピードの高速化が図られる。また検索が瞬時に行え、パソコン上でカットを確認できるため、不必要にオリジナルフィルムに触れる機会が減少し、フィルムの劣化、破損などを防ぐことができる。

**フィルム** アルバムはコスモスプリントファイルを用いて整理している。フィルム1コマにつき番

号をつけ、フィルムの種類ごとに連番で管理している。

フィルムに触れるときは必ず手袋を着用し、変色、劣化、カビの発生を防いでいる。また同一条件で撮影した2コマのうち1コマはオリジナルフィルムとして使用しないようにしている。使用頻度や貸し出し依頼の多いカットに関しては、デュープを作成し対応している。

#### c) 出土品

一次整理 出土した土器・石器等は、野外作業と平行して現地で水洗、遺物カードの添付、注記作業を行った。水洗はボンダブラシ、歯ブラシなどを使用し、乾燥は屋外または作業室内で行った。

水洗、乾燥の終了した遺物は土器と石器等の2種にわけ、グリッド、取り上げ日ごとに遺物カードを添えて収納した。注記は土器について、大まかには10円玉以上の大きさの破片についてはすべて行った。仕様は以下のとおりである。

#### 遺構出土遺物

遺跡名	遺構名	層位	点取り番号
カ4	KP-20	フク2	No1

#### 包含層出土遺物

遺跡名	グリッド	層位
カ4	K-20	Ⅲ

注記できなかった遺物については袋ごと未注記袋を作成し同封した。注記は毛筆で、ポスターカラーを使用した。注記後はニスを塗り、不用意に触れることなどによる消失を防いだ。

遺物カードは土器・石器等で色分けし、土器が青色、石器が灰色とした。

二次整理 土器が分類ごとに、破片数の多いV群については胎土で大まかに分けた上で一定期間広げ、接合を試みた。その結果概ね器形が判断でき、口縁が半周以上に達したものに関して、復元して立ち上げを試みた。またその条件に達しないものについては拓本土器とした。復元土器、拓本土器はともにセルロース系接着剤を用いて接合し、株式会社 新成田総合社製 「バイサム」を用い補強、充填を行った。

復元された土器は原寸大で実測し、3分の2（もしくは2分の1）に縮小した第二原図に墨入れを行い版下図とした。土器片については拓本をとり、原寸大による断面実測をし、これらを3分の2に縮小し、実測図に墨入れをしたものに拓本を貼りこんだものを版下図とした。

石器は水洗し、乾燥させた後、再分類した。その後器種毎にカードを付し、大きさに合わせてチャック付ポリ袋に収納した。

#### (4) 測量と記録

##### a) 測量・図化

遺構出土遺物は標高を取り上げ番号とともに図面に記入した。包含層出土遺物については土器集中を除き、図化、測量を行わずグリッド単位の記録にとどめてある。微細遺物や土壌サンプルに関しては検出範囲と標高をサンプル番号とともに図面に記入した。平面測量はグリッドを基準として1ミリ目盛の箱尺、エスロンテープを用い、基準杭からの距離により作図し、任意で標高を求めた。遺構の図化は基本として1ミリ単位のB3版方眼紙を用い、主にシャープペンシル、まれにボールペンを用いて作図した。

##### b) 野外写真撮影

発掘現場での写真撮影は、6×7判カメラを使用し、デジタルカメラを整理用の補助カメラとして用いた。住居跡など重要と思われる遺構や広い範囲の撮影には4×5フィールドカメラを使用した。撮影は被写体1カットに対して同じ条件のもの（シャッタースピード、露出）を2枚ずつ撮影した。撮影に際しては撮影者が野眼に被写体の情報などのデータを記録した台帳を作成した。



撮影対象はすべての遺構、出土状況である。撮影については各被写体の情報が最大限に反映されることを考慮して、レンズの選択、レフ版の使用、絞り数値などの撮影条件を決定した。なおすべての撮影に関して、手振れ等による撮影失敗をできる限り排除するため、三脚を用いた。また、報告書作成に関するフィルムの需要、保管後の収納スペースの都合から、すべてをブローニサイズもしくは4×5サイズとし、必要に応じてスライドのための35ミリサイズ縮小チューブを作成した。

撮影機材、フィルムは以下のとおりである

カメラ=Mamiya RZ67PRO II

WISTA45VX

SONY Cyber-shot DSC-T1

フィルム=NEOPAN 100 ACROS (モノクロ)・RDPⅢ PROVIA 100F (ポジ)

#### (5) 収納・保管

非掲載土器片は、遺構、もしくはグリッド別にポリエチレン袋に入れ、非掲載石器は分類別に遺物カードを同封し、チャック付ポリ袋にいれ、コンテナ箱に入れて収納した。コンテナには調査年度、北埋調報番号、遺物名、分類、収納番号を付したラベルを貼った。掲載土器片は図版番号を付し、ダンボール、またはコンテナにいれ収納した。

#### (6) 遺物の分類

##### a) 土器

土器は、縄文時代早期に属するものをI群とし、以下、前期をII群、中期をIII群、後期をIV群、晩期をV群とした。統縄文時代のものはVI群、擦文時代のものはVII群である。

##### I群 縄文時代早期に属する土器群

- a類 貝殻腹縁圧痕文・条痕文のある土器群、虎杖浜式、アルトリ式
- b類 縄文・燃糸文・絡条体圧痕文・組紐圧痕文・貼付文のある土器
  - b 1類：東鋼路Ⅱ・Ⅲ式      b 2類：中茶路式
  - b 3類：コッタロ式      b 4類：東鋼路Ⅳ式

##### II群 縄文時代前期に属する土器群

- a類 胎土に繊維を含み厚手で縄文が施された丸底、尖底の土器群
  - a 1類：綱文・組紐回転文・羽状縄文が施された土器群、美沢3式、美々7式
  - a 2類：静内中野式
- b 1類：円筒土器下層式、
- b 2類：大麻V式、植苗式

##### III群 縄文時代中期に属する土器群

- a類 円筒土器上層式、萩ヶ岡1式、萩ヶ岡2式
- b類 萩ヶ岡2式より後出の型式
  - b 1類：天神山式      b 2類：北筒式（トコロ6類）、ノダップⅡ式、煉瓦台式
  - b 3類：柏木川式

##### IV群 縄文時代後期に属する土器群

- a類 余市式、入江式
- b類 船泊上層式、エリモB式
- c類 堂林式、御殿山式

V群 縄文時代晩期に相当するもの

- a類 大洞B・B-C式、東三川式
- b類 大洞C式、大洞C<sub>2</sub>式、美々3式
- c類 大洞A式、大洞A<sub>1</sub>式、タンネットウL式、氷川式

VI群 続縄文時代に属する土器群

VII群 縄文文化期に属する土器群

b) 石器等

石器等は、財団法人北海道埋蔵文化財センターによる千歳市、恵庭市など近隣で行った分類を踏襲し、以下のように分類した。

**剥片石器群**

石鏃、石槍、つまみ付きナイフ、スクレイパー、両面調整石器、石核、原石、Rフレイク、フレイク

**磨製石器群**

石斧、石斧原材、擦切残片

**礫石器群**

たたき石、すり石、北海道式石冠、砥石、台石・石皿、加工痕のある礫

**土・石製品類**

焼成粘土塊、垂飾、有孔自然石、石製品、玉

### 3 層序と自然地形

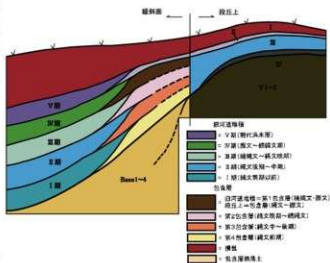
#### (1) 自然地形検出の経緯

第I章で述べた工事立会的調査範囲におけるトレンチ調査、また低地部におけるトレンチによる試掘調査の結果から、緩斜面部分の厚い包含層は柏木川の河川堆積物とそれが土壌化したものとの複雑な互層の状態を呈することがわかった。そのためこの旧河道の痕跡を出土物、土層の色調などから検討し、時期ごとの河川変動をつかむことにした。このことについて次節で土層概念図、断面図を用いて説明する。

#### (2) 基本層序との関係

これまで何度か述べたように、今年度の調査区においては段丘上でみられる堆積と、柏木川に向かって傾斜する緩斜面でみられる堆積とが異なっていた。段丘上においてはこれまで恵庭市教育委員会、および当センターで行ってきた調査とほぼ同じ堆積が観察された。内容は以下のとおりである。

- I層 耕作攪乱・および表土
- II層 Ta-火山灰
- III層 黒褐色土（遺物包含層）
- IV層 暗褐色土（漸移層）
- V層 黄褐色ローム層（En-火山灰を混じる）



図II-2 土層模式図・土層図凡例

これに対し、柏木川に向かって傾斜する緩斜面（以下緩斜面と略する）の堆積は、II章第2節に述べた遺構確認区と試掘調査部分のトレンチ調査の結果、層位は図II-2のようになった。個々の層位の特徴に関しては図II-4～9に記載したが、特に段丘上とは異なるものとして、I-1, 2層（攪乱もしくは表土）、V-1～3、Base 1～4（基盤層）について以下に説明する。

I-1層＝耕作土・整地層

I-2層＝流水の影響があるI層

V1層＝段丘上V層（En-aバミスが混じる黄褐色土）

V2層＝10YR 6/8 明黄褐色シルト質土 粘性なし しまりあり 淘汰のよい灰色土と明瞭なラミナを呈する。

V3層＝2.5Y 7/2 灰黄色シルト 5cm以下の軽石を多く混じる Spf 1

Base 1層＝流紋岩を主体とする大礫～砂礫で構成される層

Base 2層＝10YR 3/4 暗褐色土 粘性あり しまりあり クランチ状の砂質土

Base 3層＝5YR 5/6 明赤褐色砂礫層 粘性なし しまりあり 5cm以下の淘汰の悪い亜円礫で構成される。

Base 4層＝10YR 4/6 褐色砂礫層 粘性なし しまりあり 5cm以下の淘汰の悪い亜円礫で構成される。時折人頭大の板状礫が混じる。

Base 5層＝青灰色砂礫層

なお、旧河道部分における遺物の取り上げに関しては、次のように行った。縄文時代前期に属する土器集中4を検出した層位である。36ライントレンチ第12層をⅢ層相当の4番目の意味である、Ⅲ-4層とし、その上位で検出されたものをⅢ-3層出土とした。Ⅲ-4層より下位には遺物は出土しなかった。そのほか、層位を特定するに至らなかったものの中でI層以外のものはⅢ層出土のものとして扱った。また試掘調査部分においては、来年度以降の調査の円滑化のため極力土層名称の番号と取り上げることとした。

### (3) 旧河道の時期

前節で述べたトレンチ調査において、層位の観察結果と出土遺物から、柏木川の旧河道について推測を含むものではあるが、I期からV期までの変化を捕らえることができた。以下に時期の詳細、時期決定の根拠となる事項を示し、各時期の様相について説明する。

I期＝縄文時代前期以前（縄文時代前期に相当する土器集中4より下位で確認できた層位）

II期＝縄文時代前期～後期（Ⅲ期の堆積より下位に位置していること）

Ⅲ期＝縄文時代晩期～続縄文時代（遺物が出土していること、Ta-aの降下の中に黒色土の形成が見られること）

IV期＝続縄文時代～擦文文化期（Ta-aの降下直前の堆積）

V期＝現代（Ta-aの堆積を切っていること）

I期（縄文時代前期以前）

36ライントレンチ第12層は、C-36グリッドにおいて土器集中4と集石2が検出された層位である。これらは同一層内にほぼ水平に分布しているため、土器集中4の復元個体の時期である縄文時代前期の生活面であることを示すものと判断した。このことからこの層位より下位に堆積している流水の状況を示すものはすべて縄文時代前期以前とすることができるとと思われる。また、36ライントレンチの基盤層である、Base 2層の直上に黒色土の堆積（17層）があり、さらにその上には5cm以下の砂粒が混じる黒褐色土がある。この土は砂粒が黒色土中に均一に混じった特徴のあるものである。これ

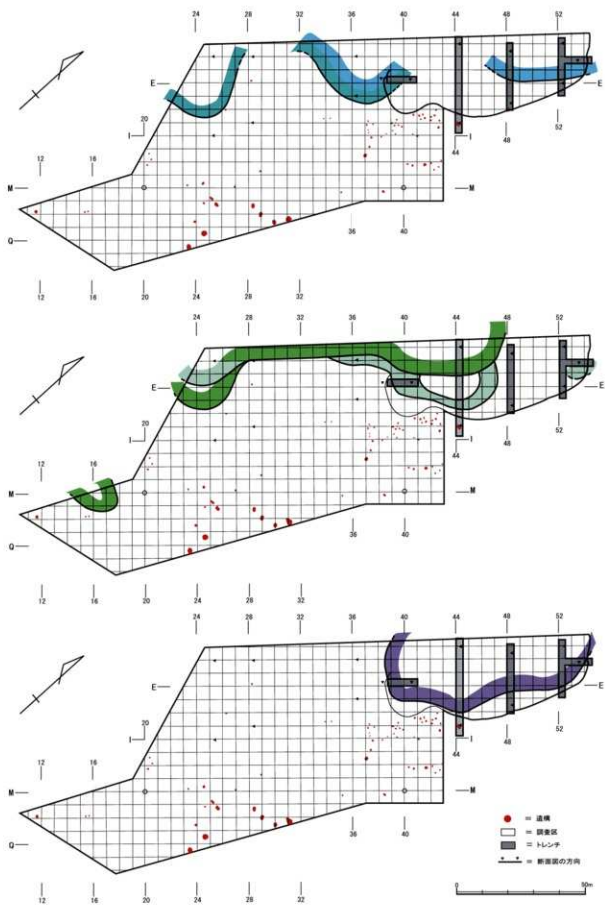


図 II - 3 旧河道

と類似する層位は25ライトレンチ12層と13層の関係にもみられ、両者は同時期に形成された可能性がある。これらのことから、I期の堆積を図II上段に示した。調査区内を約40mの半径で蛇行している様子が見て取れる。

#### II期（縄文時代前期～後期）

36ライトレンチ第10、11、19、20層、48ライトレンチ7～11層、52ライトレンチ2～4、6、9、10層、北レンチ8～13層がこの時期に相当するとみられる。これらの根拠となっているのは48ライトレンチにおいてはTa-aとみられる火山灰の下位に堆積している黒色土が厚いこと、また含有している黒色土の色調からI期よりは新しいものと判断できるものである。

しかしながら、この時期に関しては、そのようなあいまいな根拠に加え、出土遺物の時期に関して矛盾がある。7層から出土した図II-9-15、11層から出土した同図23の2点について、堆積の時期より新しいものが出土していることになる。誤差の理由としては幅2.5mのレンチ調査の性質上、層位の図化を終えてから取り上げるため、遺物をビニールにいれ、出土した高さに残置する方法を取った誤差であるかもしれない。反省も込めて解釈して修正せずそのまま掲載した。II期の流路は試掘調査部分の北側で、緩やかに蛇行しつつ流れていたものと思われる。

#### III期（縄文時代晩期～統縄文時代）

25ライトレンチ5～10層、28ライトレンチ6～11層、36ライトレンチ第5、7～8層、Eライン南レンチ第11、12、16～20層、44ライトレンチ第4.5、10、11、14層、北レンチ第3～5、7層で確認されたものである。

これらの層位の時期決定はTa-a火山灰の堆積の下位に位置しており、火山灰堆積後にわずかな黒色土の形成がみられることである。III期の流路は調査区西端において大きく蛇行し、試掘調査部分にかけての低地部では中洲状に流れていたものとおもわれる。

#### IV期（統縄文時代～擦文文化期）

25ライトレンチ第1～4層、28ライトレンチ第1～5層、36ライトレンチ第1～4、6層、Eライン南レンチ第11層である。これらの層位の時期決定は堆積の直上にTa-a火山灰の降灰があることである。IV期の流路は調査区西端において大きくカーブし、北東にかけて緩やかな曲線を描いて流れている様子がわかる。また後述する谷もこの時期の流れとみることができ、調査区の南に位置し、大きく蛇行している。

#### V期（現代洪水層）

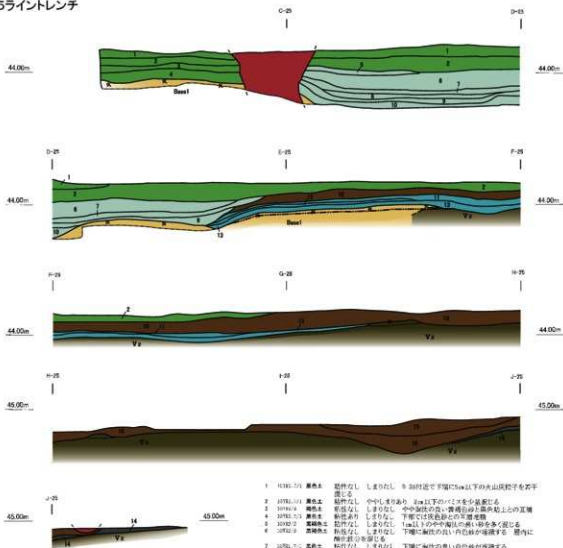
Eライン南レンチ第1～10層、44ライトレンチ第1、3、6～9、13、15、16層、48ライトレンチ第1～6、8層、52ライトレンチ第5、7層、北レンチ第1、6層である。これらの層位の時期決定はTa-a火山灰の堆積を切っていることである。V期においては調査区で最も低い部分である、試掘調査部分を大きく取り巻くように流れていることがわかる。

### (4) 旧河道出土遺物

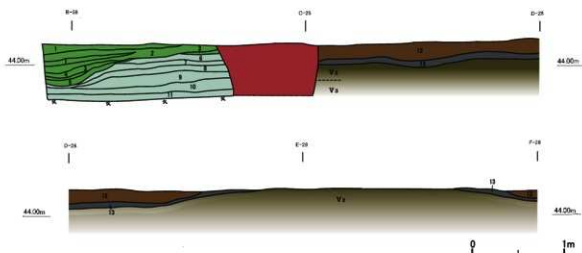
#### a) 土器（図II-9）

1はII群a類土器である。粗いRL斜行縄文が施文される胴部片。表面は摩滅し、文様は不明瞭である。2、3はIII群土器の胴部片である。2は結束第1種斜行縄文が施文される。内面は磨かれ平滑である。3は複節LRL斜行縄文が施文された後、籠状工具による沈線が横位に施される。表面は摩滅している。4はIV群a類土器。口縁は折り返して幅広の肥厚帯が作られている。肥厚帯の末端には斜め下から棒状工具による刺突文が連続して施文されている。地文はLR斜行縄文。口縁部まで施文される。5はIV群b類土器である。2条の沈線によって区画された隆帯上に、刻みが縦位に連続し

## 25ライトレンチ

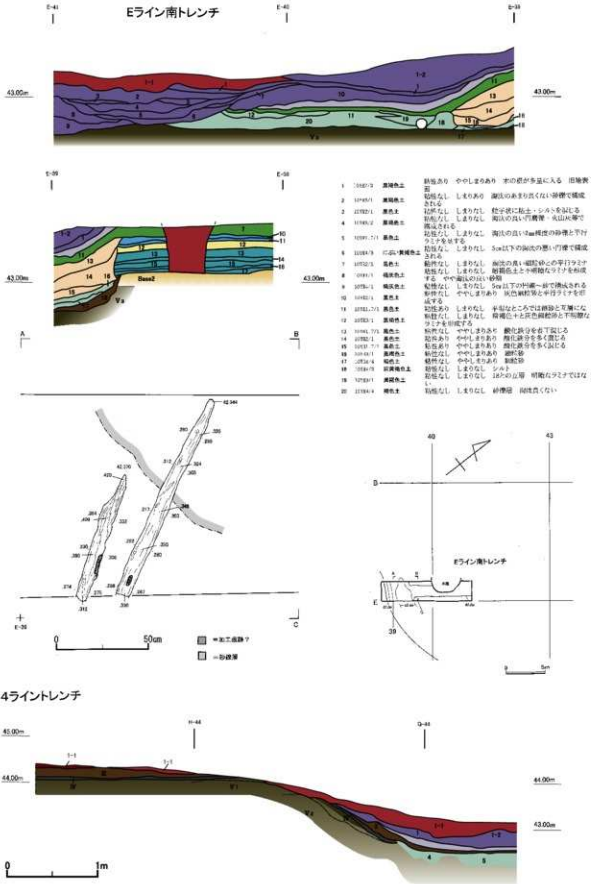


## 28ライトレンチ



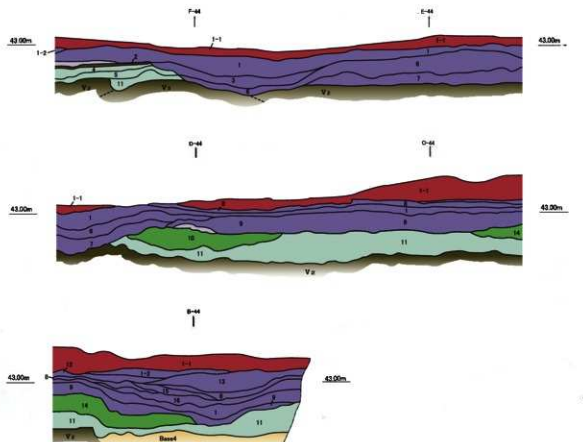
図II-4 旧河道土層断面図(1)





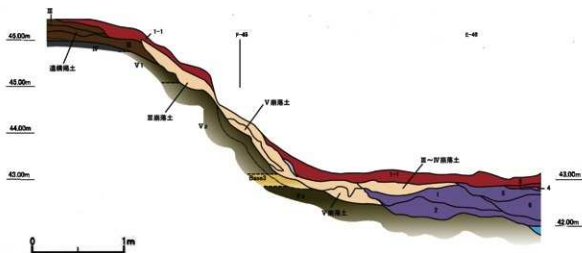
図Ⅱ-6 旧河道土層断面図(3)





- |    |           |      |                                     |
|----|-----------|------|-------------------------------------|
| 1  | 10491.1   | 黒色土  | 粘性なし、しまりなし、白色細砂との平行ラミナを呈する          |
| 2  | 10491.7/1 | 黒色土  | くさみ部分で中層状の黒い粘砂を覆う層がある               |
| 3  | 10491.7/1 | 黒色土  | やや粘りあり、しまりなし                        |
| 4  | 10491.9   | 黒褐色土 | 粘性なし、しまりなし、3g(1プック) 粘土や腐炭の多い層で構成される |
| 5  | 10491.9   | 黒褐色土 | 粘性なし、しまりなし、部分的に白色細砂との平行ラミナを呈する      |
| 6  | 10491.9   | 黒褐色土 | 粘性なし、しまりなし、2cm以下の細・砂層と粘り層を交互に示す     |
| 7  | 10491.7   | 黒褐色土 | 粘性なし、しまりなし                          |
| 8  | 10491.7   | 黒褐色土 | 粘性なし、しまりなし、30cm以下の中角の上れた重角層一部で構成される |
| 9  | 10491.7/1 | 黒褐色土 | やや粘性あり、しまりなし、8-11付帯では砂層と重なる         |
| 10 | 10491.9   | 黒褐色土 | 粘性なし、しまりなし、5cm以下の砂層一部が不明なラミナを呈する    |
| 11 | 10491.9   | 黒褐色土 | 粘性なし、しまりなし、2cm以下の砂層と粘り層との不明なラミナを呈する |
| 12 | 10491.7/1 | 黒褐色土 | 粘性なし、しまりなし、2cm以下の砂層と粘り層との不明なラミナを呈する |
| 13 | 10491.7/1 | 黒褐色土 | 粘性なし、しまりなし、2cm以下の砂層と粘り層との不明なラミナを呈する |
| 14 | 10491.7/1 | 黒褐色土 | 粘性なし、しまりなし、2cm以下の砂層と粘り層との不明なラミナを呈する |
| 15 | 10491.7/1 | 黒褐色土 | 粘性なし、しまりなし、2cm以下の砂層と粘り層との不明なラミナを呈する |
| 16 | 10491.7/1 | 黒褐色土 | 粘性なし、しまりなし、2cm以下の砂層と粘り層との不明なラミナを呈する |
| 17 | 10491.7/1 | 黒褐色土 | 粘性なし、しまりなし、2cm以下の砂層と粘り層との不明なラミナを呈する |
| 18 | 10491.7/1 | 黒褐色土 | 粘性なし、しまりなし、2cm以下の砂層と粘り層との不明なラミナを呈する |

48ライトレンチ



図II-7 旧河道土層断面図(4)

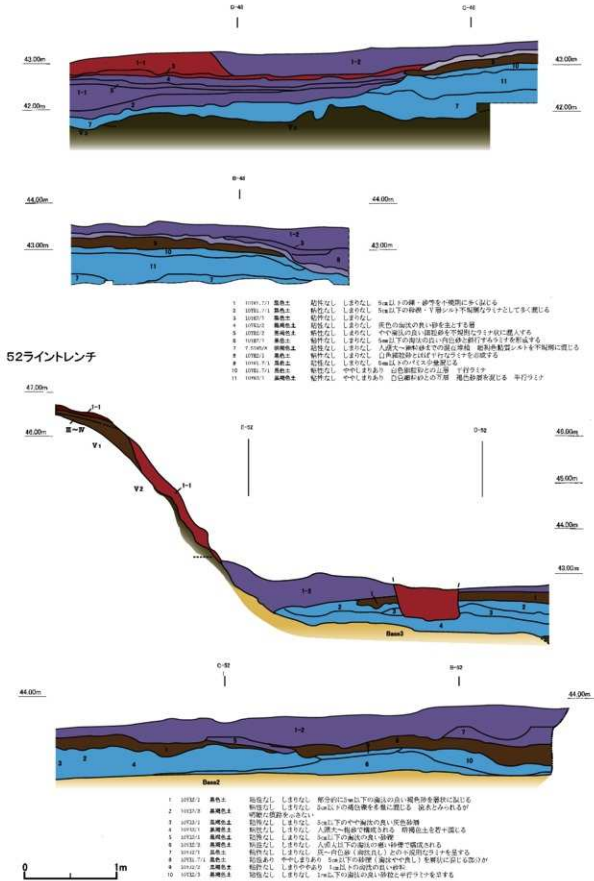
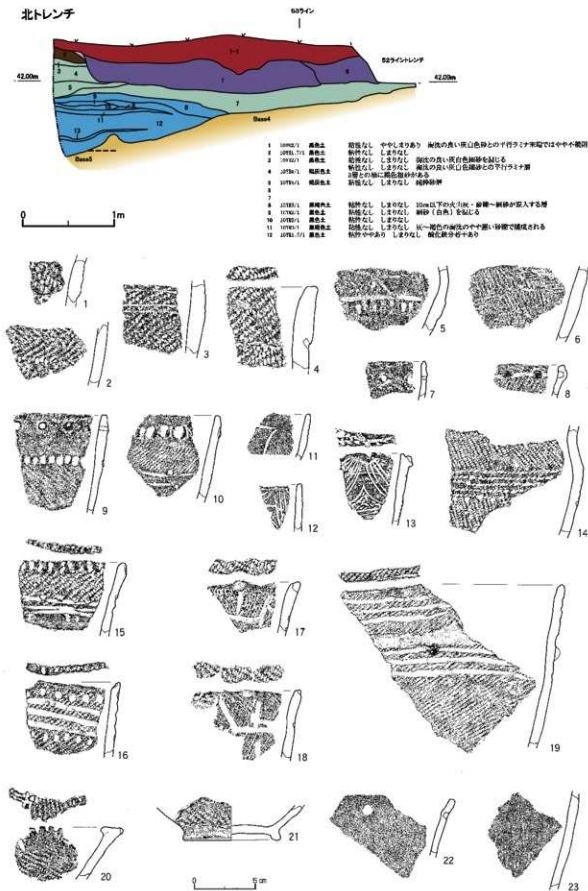
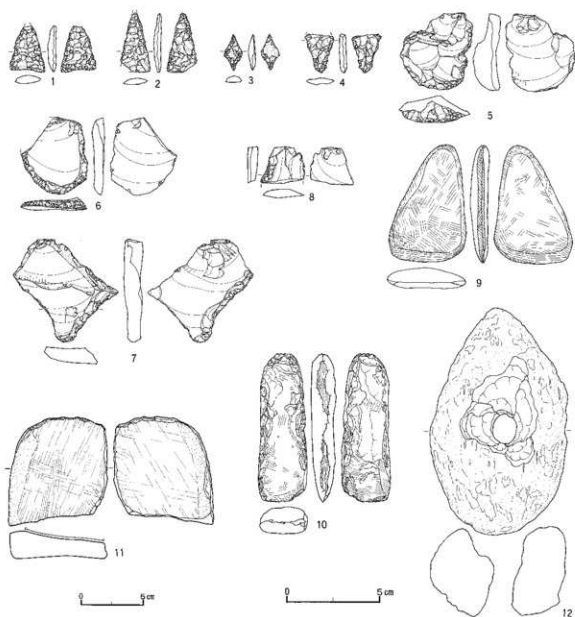


図 II - 8 旧河道土層断面図(5)



図Ⅱ-9 旧河道土層断面図(6)・旧河道出土の土器

て施文されている。摩滅が激しい。6はIV群土器の胴部片。羽状縄文風に縄文が交互に施文されている。摩滅が激しく原体は不明である。7～10はIV群c類土器である。摩滅と剥落により不明瞭ではあるが、両者とも口唇下にIOの突瘤文が連続して施文される。8の地文はLR斜行縄文。突瘤文間は沈線で結ばれている。9は口唇下にIOの突瘤文が連続施文され、口頭部の無文帯と斜行縄文が施文される胴部との境界には爪形文が連続して施文されている。10は口唇下に爪形文が連続して施文され、胴部には2条の沈線が施される。下側の沈線には、一定間隔で刺突文が施文されている。11～13はV群a類土器のうち沈線のみで文様が構成されるもの。11は菱形の文様の一部とみられるもの、地は無文である。12は口唇直下に1条、垂下する3条の沈線を中心に文様が描かれるもの。13は波状を呈する器形の頂部とみられるもの。頂部から弧状に数条の沈線が引かれ、無文帯を挟んで頂部の位置から八の字に沈線が引かれ、その下には横走る沈線が引かれている。横走沈線と八の字の間は刺突により充填されている。口唇端部にも口唇に沿って、沈線、刻みが施されている。14～20はV群土器。14



図II-10 旧河道出土の石器

は頸部に縄線が4条施文される胴部片。縄線直下には棒状工具による刺突文が斜め下から施文されている。地文はやや条の間隔の開いたRL斜行縄文が施文されている。15～19は沈線文が施文されるもの。15は口唇に縄による刻みが施される。沈線は頸部に施され、頸部の無文帯との境界となっている。16は口縁下に棒状工具による刺突列が1条施され、3条の沈線を挟んでもう1条刺突列が施文されるものである。17、18は同一個体。櫛目状の沈線が施文された後、「山」字状に太い棒状工具による沈線が施文される。19は口頸部文様帯の中央に沈線様の無文帯が描かれ、それを挟むように三条単位の沈線が施文されるもの。無文帯は突起に合わせて広がり、直下に貼付による小突起がつけられている。20は小型の浅鉢。突起部分に縄線と篋状工具による刻みが施される。地文はRL斜行縄文が施文される。21はV群土器の底部片。揚底である。22はVI群土器北大式の口縁部である。外反する口縁直下にOIの突縮文が施文される。23はVII群土器の胴部片。表面は磨かれ、無文である。

b) 石器等 (図II-10)

1～4は石鏃。3を除き黒曜石製である。1、2は三角形を呈するもの。入念に細部調整が施される。3、4は茎のあるもの。3は簡易なつくりでかえしも不明瞭なもの。頁岩製である。4は半分近くを欠損する。入念に細部調整されるが、かえしは不明瞭である。5～8はスクレイパー。すべて黒曜石製である。5はやや厚手の縦長気味の剥片を用い、端部を刃部とするものである。刃部は急角度で弧状を呈する。6は不定形な剥片を用い、急角度で弧状の刃部がつけられるものである。7は不定形な剥片を用い、やや内湾する刃部がつくものである。摩滅し剥離が不明瞭になっている。8は破片である。左側縁に直線状の刃部がつく。9、10は石斧である。9は扁平な礫の一部を研ぎ出し、刃部を作出したもの。10は未製品。両者とも泥岩製である。11は砥石。扁平な礫の両面を作業面とする。砂岩製である。12は軽石製の石製品とみられるもの。拳大の礫の中心に穿孔されている。

c) 木質遺物 (図II-6)

Eライン南トレンチの調査中、17層(褐色細粒砂)から木質遺物が出土した。遺物は太さ約20cm弱の枝を払っているとみられる丸太材2本である。材は北東-南西方向に平行に並べられ、両者とも南西端において5×15cm程度の大きさで長方形に抉れている部分がある。材の痛みが激しく、明確な加工の痕跡であるかどうかトレンチで判断するのは難しく、痛みが激しいことから全面発掘を待って取り上げることとし、今年度は出土状況の記録を作成した後、PEG200を塗布し、不織布で養生して埋め戻すことにした。

(5) 谷・地割れ

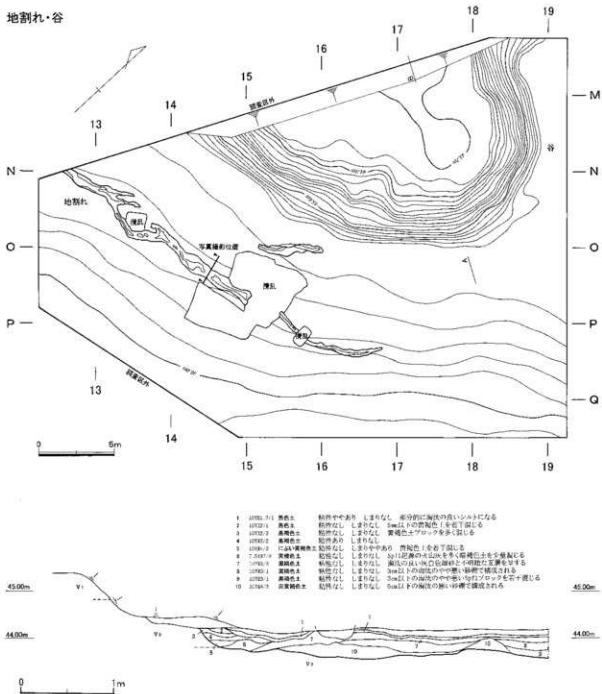
谷 (図II-11、12表II-3、4 図版II-8、10)

位置 L-16、17、M-14～17、N-15～17

調査 調査区の南端に近い、M-16付近において、表土剥ぎの調査中、現代の整地層とみられる客土を検出した。客土は半円形に広がり、調査区外に伸びていた。地形を改変している可能性があったため、客土をバックフォーで除去することにした。その結果、客土の下にTa-a火山灰の良好な堆積を確認したため、調査区内の客土をすべて除去した。火山灰は半円形で、平坦に広がり、現地表との比高差は1.5mほどであった。このことから、柏木川13遺跡において呼称した、「谷」に類似した柏木川の旧河道と判断し、同様の扱いとすることにした。なおその性格上、出土遺物の集計に際しては、包含層出土遺物として取り扱った。

谷の南側において、不定形な溝状を呈する黒褐色土の落ち込みを確認した。この溝は谷の南側を取り巻くように検出されていること、また土層断面が地割れ状を呈する(図版II-10)ことから、地震等の地殻変動に伴い、谷側に地形がずれた結果、形成されたものと判断した。

## 地割れ・谷

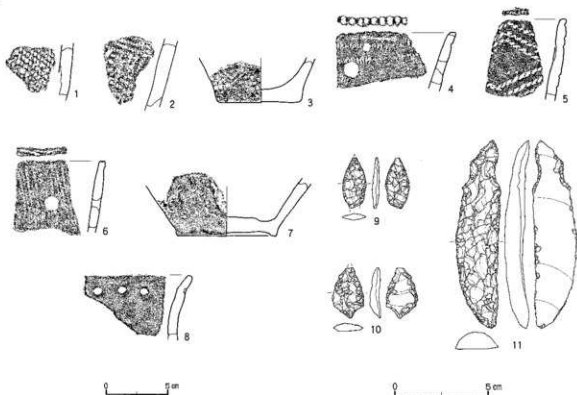


図II-11 地割れ・谷

**堆積土** Ta-a火山灰の堆積は厚い部分で、約15cmである。その下位にあたる、1、7～10層は流水の堆積であり、砂礫層、またはシルト質土である。2～6層は谷に至るがけの崩落したものと考えられる堆積である。

**遺物** 土器214点、石器等41点が出土している。1はⅢ群の胴部。RL斜行縄文が施文されている。2、3はⅣ群とみられる。2は胴部片。RLとLRの原体が交互に施文され、羽状縄文風の地文が施文されている。3は底部である。4～6はⅤ群土器。4はやや外反する口縁部。口唇端部には筒状工具による刻みが施され、口頸部には絡条体の圧痕による縄線が3条施される。5は3本一組の縄線により、菱形の文様が描かれるもの。6は摩滅により不明瞭であるが、縦走する縄文が施文されて

谷



図II-12 谷出土の遺物

いる。口唇端部に口縁に沿って縄線がつけられる。7はV群土器の底部。揚底である。8はVI群土器。北大式である。9、10は石鏃。両者とも黒曜石製である。9は木の葉型で茎のつくもの。両面にわたって入念な細部調整がなされる。10はかえしが明瞭なもの。ややつくりが粗く、腹面には素材剥片の形状をそのまま残している。11はつまみ付きナイフ。頁岩製で入念な片面細部調整で厚手の刃部が作出されている。

**時期** 出土遺物の内容、Ta-a火山灰の堆積状況からみて、縄文時代晩期から続縄文時代の旧河道であると判断される。

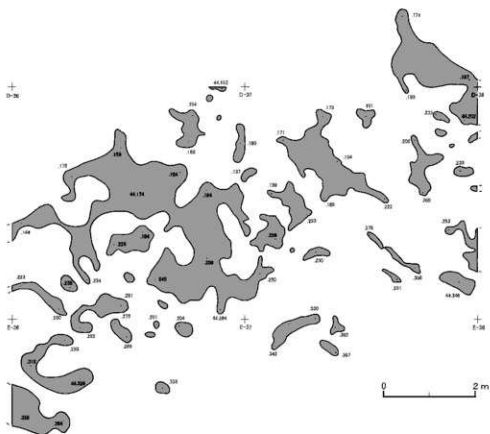
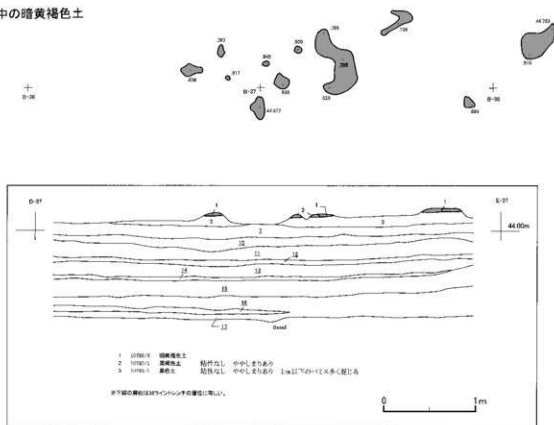
(6) III層中の暗黄褐色土

III層中の暗黄褐色土(図II-13 図版II-11)

**位置** A・B・C・D・E-36・37

**調査** III層上面を精査中、暗黄褐色土の広がりを検出した。広がり是不定形で、E-38からD-38区にかけて、またB-37杭付近の2ヶ所のまとまりがあり、概ね南北方向に途切れながらも帯状を呈していた。また広がりIII層の傾斜に合わせるように位置していた。詳細に観察すると、暗黄褐色土は炭化物を伴っておらず、しまりはIII層と変わらない状態であった。このことから、この暗黄褐色土は北埋調報203集『柏木川13遺跡』第II章2節(3)で報告された、III層中の暗赤褐色土と同様なものと思われ、なんらかの原因により堆積した自然酸化層であると判断した。そのため検出の様子と断面のみ掲載した(図II-13)。

## Ⅲ層中の暗黄褐色土



図Ⅱ-13 Ⅲ層中の暗赤褐色土



表II-2 旧河道出土掲載土器一覧

図版番号	出土地点	層位	点数	分類名	備考
II-9-1	52トレ	流路6層	1	II a	
2	E南トレ	流路14層	1	III	
3	48トレ	流路2層	1	III	
4	48トレ	流路7層	1	IV a	
5	44トレ	I層	1	IV b	
6	44トレ	I層	1	IV	
7	52トレ	流路6層	1	IV c	
8	48トレ	I層	1	IV c	
9	48トレ	流路2層	1	IV c	
10	44トレ	流路14層	1	IV c	
11	44トレ	流路11層	1	V a	
12	52トレ	流路8層	1	V a	
13	48トレ	流路7層	1	V a	
14	52トレ	流路8層	1	V	

15	48トレ	流路7層	1	V		
16	48トレ	流路2層	1	V		
17	E南トレ	流路14層	1	V		
18	E南トレ	流路14層	3	V		
		流路13層	1		同一個体未接合	
		流路13層	6			
		流路14層	7			
		D-35	III-3層	1		
		D-36	III層	3		
19	48トレ	流路1層	1	V		
		流路中	1			
20	48トレ	流路2層	1	V		
21	52トレ	流路8層	1	V		
22	52トレ	流路8層	1	VI		
23	44トレ	流路11層	1	VII		

表II-3 旧河道出土掲載石器一覧

図版番号	器種名	発掘区 通構	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備考
図II-10-1	石 鎌	E-44	流路6層	(2.5)	1.8	0.5	1.6	obs	44ライントレンチ3点(308-2)
2	石 鎌	B-44	流路14層	(3.1)	(1.6)	0.4	1.4	obs	44ライントレンチ
3	石 鎌	E-44	流路6層	1.9	1.0	0.4	0.5	obs	44ライントレンチ3点(308-3)
4	石 鎌	E-44	流路6層	(2.1)	1.6	(0.4)	1.0	obs	44ライントレンチ3点(308-1)
5	スクレイパー	E-44	流路6層	4.1	3.8	1.5	8.3	obs	44ライントレンチ2点(307-1)
6	スクレイパー	A-52	流路8層	3.1	3.5	0.7	7.7	obs	52ライントレンチ
7	スクレイパー	E-44	流路6層	5.4	5.6	1.0	20.5	obs	44ライントレンチ2点(307-2)
8	スクレイパー	C-48	流路7層	(2.0)	2.3	0.5	2.4	obs	48ライントレンチ
9	石 斧	C-44	流路11層	(6.2)	4.1	0.9	33.6	obs	44ライントレンチ2点(317)
10	石 斧	C-44	流路11層	7.8	(2.6)	1.3	39.6	肥岩	44ライントレンチ2点(317)
11	砥 石	C-52	流路6層	8.5	7.9	2.1	155.1	砂岩	Eライン北トレンチ 点取番号3
12	有孔自然石	B-44	流路11層	12.0	7.3	4.9	106.9	軽石	44ライントレンチ

表II-4 谷出土掲載土器一覧

図版番号	出土地点	層位	点数	分類名	備考
II-12-1	谷M-16	流路9	1	III	
2	谷M-17	流路9,10	1	III	
3	谷M-16	流路9	1	IV	
4	谷M-16	流路9	1	V	
5	谷M-16	流路9	1	V	
6	谷N-17	流路9	1	V	
7	谷M-16	流路9	1	V	
8	谷M-16	流路9	1	VI	

表II-5 谷出土掲載石器一覧

図版番号	器種名	発掘区 通構	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備考
図II-12-9	石 鎌	M-17	流路9層	(2.7)	1.3	0.4	1.0	obs	
10	石 鎌	N-17	III	(2.6)	1.6	0.6	1.9	obs	
11	つまがきナフ	M-18	流路9層	10	2.4	1.3	24.2	頁岩	

## 4 遺構とその遺物

### (1) 概要(図Ⅱ-14、15)

柏木川4遺跡の今年度の調査において、検出された遺構は住居跡が1軒、土坑が78基、焼土が19基である。遺構の時期はすべて縄文時代に属するものとみられるが、出土遺物などから時期の確定が行えるものは少ない。主に出土遺物や形状からの類推ではあるが、住居KH-1は縄文時代前半のものとしてみられる。土坑は縄文時代晩期に属するものが多いとみられ、平面形が円形を呈し、碗状の断面形を有するもので、直径1m内外のものが調査区の北側に集中して検出されている。そのほかTピットが2基、その小型のものかともみられる土坑が5基確認されている。これらは晩期の土坑群とは対照的に調査区中央部の河川に向かう傾斜変換点付近に点在して検出されている。焼土は集中が概ね2ヶ所に分かれている。ひとつは41~43ライン付近の段丘平坦面に、もう1ヶ所は土器集中1が検出されているG-28グリッドを中心とする柏木川に向かう緩斜面上にややまとまって検出されている。検出面、また周囲の遺物出土状況からの類推ではあるが、前者は縄文時代中期のもの、後者は土器集中1と同じ縄文時代前期後半のものと考えられる。

### (2) 竪穴住居跡

#### KH-1(図Ⅱ-16、17 表Ⅱ-7~10 図版Ⅱ-12~14)

位置 G・H-37、38 規模 3.46×2.30/3.10×1.80/0.18

調査 重機を用いた表土除去の際、V層上面で暗褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みは楕円形で暗褐色土中には人為的堆積を示すロームブロックや焼土を認めることができ、その規模から住居跡であると想定することができた。堆積の深さを確認するため中心を通るようにトレンチを設定して掘り下げると、やや凹凸の多いレンズ状のくぼみを呈する明瞭な床を検出し、同時に灰跡とみられる焼土を中心付近から検出したため、住居跡として調査を行った。覆土中からは炭化物が多く出土し、床面から浮いた焼土が2ヶ所検出されている。建築構造物などは検出されていないが、焼失家屋である可能性が高い。

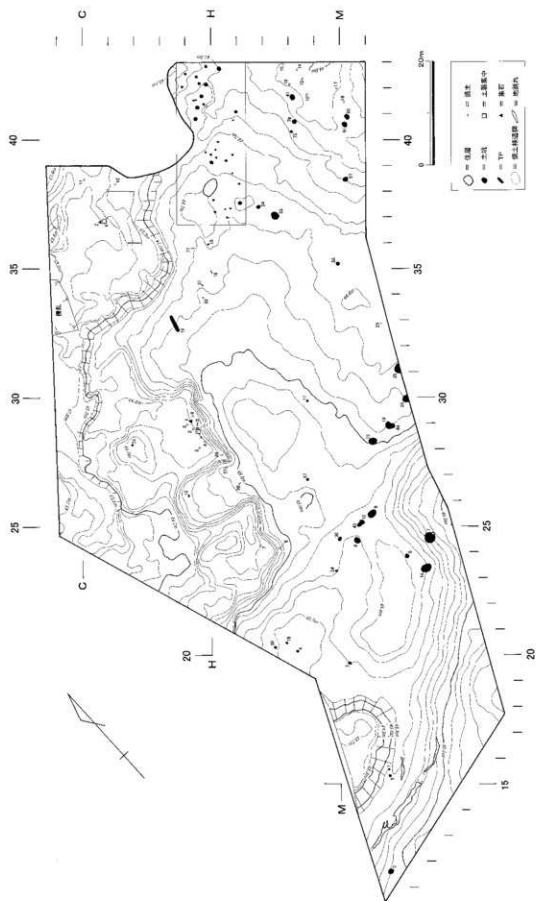
堆積土 8層に分層した。1層は自然堆積。2~7層までは炭化物、焼土、黄褐色土ブロックなどが混じる人為的堆積とみられるものである。8層はHF-4の堆積である。

形態 南北に長い楕円形を呈する。

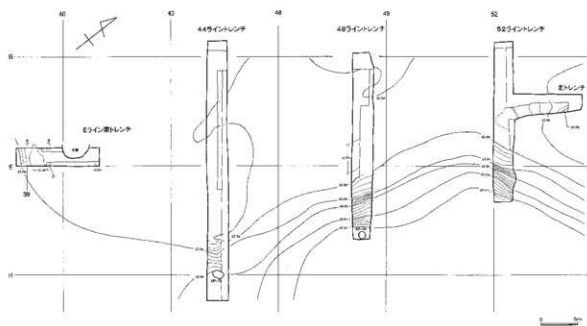
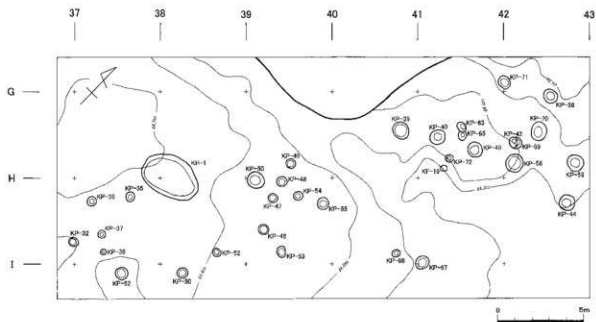
付属遺構 住居の中心より若干北東よりの床面のもっともくぼんだ地点から、くぼみを伴う焼土HF-4を検出した。直径約20cmで、小規模なものであるが、本住居の炉とみられるものである。柱穴は検出できなかった。

遺物出土状況 炭化物とバミスをよく混じる覆土2層から多くの遺物が出土している。この層位はいわゆる人為的な堆積である。土器は断片的に出土し、復元出来た個体はない。

遺物 覆土からⅡ群土器37点、礫片5点、北海道式石冠1点、頁岩製のフレイクが1点、床面からはⅡ群土器1点、礫片1点が出土している。1~5はⅡ群b-2類土器である。すべて胎土中に繊維が混じる。1~3は口縁部。1、2は口唇下に縄線がつくもの。体部には粗いLR斜行縄文が施文される。口唇は丸みを帯びている。1、2は同一個体。Ⅱ群a類の可能性もある。3は1、2に比べやや繊維は少ない。文様は不明瞭ではあるが、口縁の少し下に横走る縄線が施されている。4、5は胴部片。4はRL斜行縄文が施文されるもの。5は底部に近い破片。RL斜行縄文が擦り消されている。6は北海道式石冠。石材は閃緑岩とみられる。左右両端を一部欠損するが、作業面は比較的平滑である。掲載遺物の出土層位はすべて覆土2層中である。1がHF-1上面から出土したものと

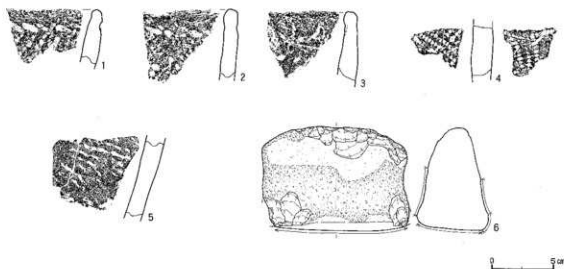


図II-14 遺構配置図(1)



図II-15 遺構配置図(2)





図Ⅱ-17 住居跡出土の遺物

接合している。6は北側の壁際付近で出土している。

時 期 出土した遺物から縄文時代前期後半のものとみられる。

### (3) 土坑

#### KP-1 (図Ⅱ-18 表Ⅱ-6 図版Ⅱ-15)

位置 N-15 規模  $0.62 \times 0.52 / 0.40 \times 0.26 / 0.15$

調 査 V層上面を精査中に確認した。にぶい黄褐色土を呈する楕円形の落ち込みである。南西側を半截して壁、坑底を確認して土坑であることがわかった。

堆 積 土 バミスが少量混じる鈍い黄褐色土で構成される1層である。

遺 物 出土していない。

時 期 縄文時代のものともみられる。詳細は不明であるが、覆土の色調、付近の遺物出土状況からすると、縄文時代中期である可能性がある。

#### KP-2 (図Ⅱ-18 表Ⅱ-6 図版Ⅱ-15)

位置 N、O-11 規模  $1.46 \times 0.97 / 1.24 \times 0.78 / 0.13$

調 査 V層上面を精査中に東西に長い楕円形を呈する黒褐色土の落ち込みを確認した。短軸方向を半截して壁、坑底を確認して土坑であることがわかった。

堆 積 土 黒褐色土、暗褐色土のレンズ状の断面を呈する自然堆積とみられる2層である。

遺 物 出土していない。

時 期 縄文時代のものともみられる。詳細は不明であるが、覆土の色調、周囲の遺物出土状況から、縄文時代晩期のものである可能性が高い。

#### KP-3 (図Ⅱ-18、36 表Ⅱ-6～9 図版Ⅱ-16、44)

位置 M-19 規模  $0.76 \times 0.56 / 0.59 \times 0.38 / 0.12$

調 査 V層上面を精査中に確認した黒褐色土の楕円形の落ち込みである。短軸に沿って南側を半截して坑底、壁を確認して土坑であることがわかった。

堆 積 土 バミスが少量混じる黒褐色土の堆積1層である。埋め戻しとみられる。

遺 物 検出面でV群土器が8点、フレイクが3点出土し、坑底から緑色泥岩製のフレイクが1

点出土している。1～3は検出面から出土した、V群b類土器。1はS字状に屈曲する口縁部。口唇端部には錠状工具による刻みが斜位に施され、口頸部はナデ調整され、無文である。体部はやや細かいRL斜行縄文が施文される。2はやや内湾する口縁部。口縁下には縄線が4条、さらに3条単位で斜位に施される。地文はRL斜行縄文。

時期 覆土から出土している土器から、縄文時代晩期のものとみられる。

KP-4 (図II-18、36 表II-6、7、9 図版II-16、44)

位置 K-20 規模 0.56×0.51/0.28×0.28/0.18

調査 IV層を掘削中、黒色土の円形の落ち込みを確認した。中心をとおるように半截して壁、坑底を確認して土坑であることがわかった。

堆積土 2層に分層した。自然堆積とみられる黒色土と埋め戻しとみられるバミスを混じる黒褐色土である。両者とも断面はレンズ状を呈する。

遺物 覆土1層からV群土器が3点出土している。1はV群土器。無文の口縁部である。

時期 土坑の形態、遺物の出土状況から、縄文時代晩期のものとみられる。

KP-5 (図II-18 表II-6、7 図版II-15)

位置 N-15 規模 0.68×0.59/0.58×0.36/0.23

調査 V層上面を精査中に確認した。褐色土の楕円形の落ち込みである。落ち込みの形状が不明瞭であったため、中心を通る南北方向のトレンチを設定してV層まで掘り下げた。その結果、明瞭ではないが、急激に立ち上がる壁とほぼ平坦な坑底を確認したため、土坑とした。

堆積土 2層に分層した。鈍い黄褐色土と褐色土の堆積である。

遺物 覆土2層からIII群土器片が1点出土している。

時期 不明であるが、覆土の色調、付近から出土している遺物から、縄文時代中期のものである可能性が高い。

KP-6 (図II-19 表II-6 図版II-16)

位置 O-23 規模 0.90×0.78/0.52×0.35/0.25

調査 IV層を掘削中に確認した。東西に長い不整な楕円形の落ち込みである。南側を半截し、壁、坑底が緩やかに連続する椀状の形態を確認したため、土坑とした。

堆積土 2層に分層した。黒色土と黒褐色土の自然堆積とみられるものである。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、付近の遺物出土状況から、縄文時代中期のものである可能性が高い。

KP-7 (図II-19 表II-6 図版II-17)

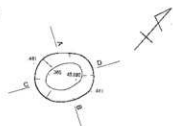
位置 P-24 規模 0.26×1.83/1.18×1.04/0.29

調査 IV層を掘削中に不整な円形を呈する黒褐色土の落ち込みを確認した。住居の可能性を考慮しトレンチを設定した。P-24グリッド付近のIV層は西に向かって傾斜していたため、傾斜に沿うものと直行する2本トレンチを設けた。それぞれのトレンチをV層まで掘り下げた結果、やや不明瞭な形ではあるが、坑底、壁を確認した。壁は東側で緩やかな他は急である。坑底はでこぼこしており、炉とみられる焼土や、柱穴も確認できなかったため、土坑として扱った。ただし、堀上土など確認できないこと、また不整な形状などを考慮すると、風倒木等による自然攪乱の可能性もある。

堆積土 2層に分層した。黒色土と黒褐色土のいずれも自然堆積とみられる。

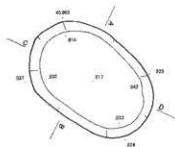
付属遺構 遺構東端の上場付近に焼土を検出した。本遺構との関連は不明瞭であるためKF-1とした。

KP-1



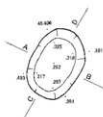
1 10784/3 土の層構造は判別なし、しまりなし、ハリス粒子少量認めらる

KP-2



1 10785/1 褐色土 粘りなし、中やしまりあり、E層以下粘土が少量認めらる  
2 10785/2 暗褐色土 粘りなし、しまりなし、Ea層以下ハリス粒子少量認めらる

KP-3



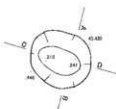
1 10786/1 黒褐色土 粘りなし、しまりなし、ハリス粒子少量認めらる

KP-4



1 10786/2 褐色土 粘りなし、しまりなし、E層以下粘土が少量認めらる  
2 10786/3 黒褐色土 粘りなし、しまりなし、Ea層以下のハリス多量に認めらる

KP-5



1 10786/4 土の層構造は判別なし、しまりなし、ハリス粒子少量認めらる  
2 10786/5 褐色土 粘りなし、しまりなし、ハリス粒子少量認めらる

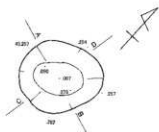
0 1m

図Ⅱ-18 土坑(1)



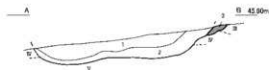
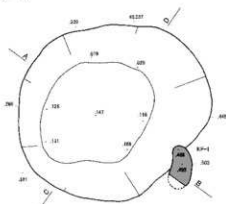
II 柏木川4遺跡の調査

KP-6



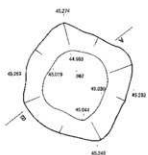
- 1 4136L7-1 黒色土 粘質なし、しまりなし、パイズ(5mm以下)が下層に  
 2 3136M7C 黒褐色土 粘質なし、しまりなし、ホームアワックが下層に

KP-7



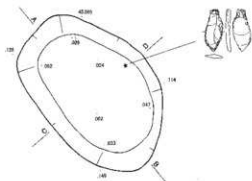
- 1 1016L7-1 黒色土 粘質なし、しまりなし  
 2 1016M7B 黒褐色土 粘質なし、しまりなし、パイズ(5mm以下)層に  
 3 7-1016M7C 褐色土 粘質なし、しまりなし、粘土

KP-8



- 1 1016L7-1.5 黒色土 粘質なし、しまりなし、パイズ少量混入  
 2 1016M7B 黒褐色土 粘質なし、しまりなし、パイズ少量混入  
 3 1016L7-1.4 黒色土 粘質なし、しまりなし、混入する層

KP-9



- 1 1016L7-1 黒褐色土 粘質なし、しまりなし、下層に混入して粘する  
 2 1016L7-2 黒褐色土 粘質なし、ややしまりあり、下層に石灰質を伴下層に



図II-19 土坑(2)

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、周囲の遺物出土状況から、縄文時代中期のものと思われる。

KP-8 (図II-19 表II-6 図版II-17)

位置 L-24 規模  $1.12 \times 1.10 / 0.63 \times 0.68 / 0.22$

調査 V層上面を精査中に確認した。不整な正方形を呈する黒褐色土の落ち込みである。南北方向を軸にし、西側を半截して坑底を確認したため、土坑とした。壁は急、坑底はでこぼこしている。両者とも不明瞭である。

堆積土 3層に分層した。自然堆積とみられる黒色土である。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、覆土の色調から縄文時代晩期以降のものと思われる。

KP-9 (図II-19 表II-6、8 図版II-18、44)

位置 N-25 規模  $1.86 \times 1.25 / 0.14 \times 0.93 / 0.12$

調査 V層上面を精査中に確認した。東西に長い不整な楕円形を呈する黒褐色土の落ち込みである。遺構の重複を想定し、長軸方向とそれに直行し、中心を通る2本のトレンチを設定してV層まで掘り下げた。その結果、浅い皿状の壁、坑底を確認し、1基の土坑であることがわかった。

堆積土 2層に分層した。いずれも黒褐色土を基調とした自然堆積とみられるものである。坑底近くには炭化物が多く混じる部分がある。

遺物 1は坑底から出土したつまみ付きナイフである。頁岩製。素材となる薄手の縦長剥片の形状をほとんど変えずに、周縁のみ細部調整されている。

時期 床面から出土した遺物、また覆土の色調から、縄文時代前期～中期のものである可能性が高い。

KP-10 (図II-20 表II-6 図版II-18)

位置 M-25 規模  $1.08 \times 0.88 / 0.74 \times 0.46 / 0.24$

調査 V層上面を精査中に黒色土の落ち込みを確認した。落ち込みの形状が不整形な形状であったため、遺構の重複を想定し、不整形の長軸方向にトレンチを設定してV層まで掘り下げた。その結果、2段の坑底、堆積土の切り合いを確認したため、2基の土坑と判断した。新しいものが本遺構である。平面形は南北に長軸のある楕円形、坑底は平坦で壁は急である。

堆積土 2層に分層した。自然堆積とみられる黒色土の堆積である。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、覆土の色調、周囲で出土する遺物から、縄文時代中期のものである可能性が高い。

KP-11 (図II-20 表II-6、8 図版II-18)

位置 K-29 規模  $0.50 \times 0.39 / 0.33 \times 0.27 / 0.08$

調査 V層を精査中、礫4点の集中を検出した。石はまとまって置かれたかのような状況を呈しており遺構の可能性があったため、付近を精査した。その結果、石の輪郭にほぼ沿う形で黒褐色土の落ち込みを検出した。半截して壁、坑底を確認したため、土坑として調査した。壁、坑底は緩やかに連続し、浅い皿状を呈する。

堆積土 黒褐色土1層である。炭化物が若干混じっている。

遺物 検出面に露出していた礫の内、1点は台石、残りの3点は礫片であった。台石を含めいずれも安山岩で、やや円磨した礫を使用している。

時期 不明であるが、縄文時代のもものとみられる。

KP-12 (図II-20 表II-6 図版II-19)

位置 G-26 規模  $0.46 \times 0.44 / 0.22 \times 0.22 / 0.14$

調査 V層上面を精査中に確認した、ほぼ円形を呈する黒褐色土の落ち込みである。南側を半截して壁、坑底を確認したため土坑であることがわかった。壁、坑底は緩やかに連続し、断面形は碗状を呈する。

堆積土 2層に分層した。上位に自然堆積とみられる黒色土、下位には埋め戻しとみられる黄褐色土のブロックが混じる暗褐色土である。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、土坑の形状から、縄文時代晩期のもものとみられる。

KP-13 (図II-20 表II-6~8 図版II-19)

位置 N-28 規模  $1.62 \times 0.14 / 0.96 \times 0.88 / 0.23$

調査 V層上面を精査中、円形を呈する黒色土の落ち込みを確認した。遺構の重複を想定し、中心を通る十字のトレンチを設定した。V層まで掘り下げると、壁、坑底を確認したため土坑であることがわかった。壁は全方向で急である。坑底は東西方向では明瞭な浅い皿状を呈するが、南北方向では北側がややえぐれ、ほかの部分より低くなっている。

堆積土 2層に分層した。いずれも黒色土で、自然堆積とみられる。

遺物 覆土からⅢ群土器が2点、黒曜石のフレイクが3点出土している。

時期 不明であるが、覆土の色調、付近から出土する遺物から、縄文時代中期のものである可能性が高い。

KP-14 (図II-21、36 表II-6~8、10 図版II-20、21)

位置 P-23 規模  $2.12 \times 1.63 / 0.13 \times 0.76 / 0.88$

調査 Ⅲ層下部を掘削中、黒褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みは東西に長い楕円形を呈し、北西側1.3mのところにはこの遺構のものと思われる堀上土の堆積があった。住居などの大きな遺構である可能性も考慮し、中心をとおるように長軸に合わせたトレンチを設定し、それに直行するトレンチを追加して掘り下げ始めた。しかし50cm以上掘り下げても底が確認できなかったが壁は明瞭に検出できたため、落ち込み以上に遺構が広がることはなく、重複する遺構がある可能性も少ないと判断し、長軸方向に半截することにした。その結果、ほぼ平坦な坑底を確認し、土坑であることがわかった。平面形は検出面、坑底ともに東西に長い小判型を呈する。壁は全方向で急激に立ち上がり、坑底はほぼ平坦である。

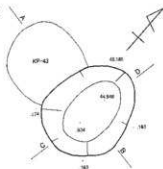
堆積土 22層に分層した。1から11層までは自然堆積の黒色土かもしくは流れ込みによる堆積と考えられる。12層、15層、17~19層、21層は壁の崩落とみられる土である。22層はこの土坑の開口時の堆積と考えられる。そのほかの層位は自然堆積かもしくは流れ込みとみられる土である。

形態 平面形は検出面で小判型。坑底では楕円形を呈する。森田・遠藤分類のD型(森田・遠藤1984)に類するTピットとみられる。

付属遺構 坑底を精査したところ、長軸方向の壁面付近に染み状の黒褐色土の落ち込みがあることがわかった。半截した結果、土坑の中心に求心的に傾斜する杭状の痕跡であることがわかった。

遺物 覆土7層からスクレイパーが出土している。また堀上土中からⅢ群土器片が2点出土している。1はスクレイパーである。泥岩製の石斧剥片を利用し、右側縁を細部調整し、直線状の刃部が作出されるものである。

KP-10



+

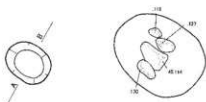
45-25



- 1 1985.7.1 調査主 砂状なし、しまりなし、5cm以下のF1を少量含む  
2 1985.7.1 調査主 砂状なし、しまりなし、5cm以下のF1を少量含む、腐葉層あり



KP-11



- 1 1985.7.1 調査主 砂状なし、しまりなし、腐化物を少量含む、腐葉腐葉

KP-12

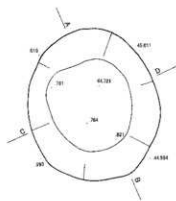
+

45-25



- 1 1985.7.1 調査主 砂状なし、しまりなし、5cm以下のF1を若干含む  
2 1985.7.1 調査主 砂状なし、しまりなし、5cm以下のF1を少量含む、F1を多く含む

KP-13



- 1 1985.7.1 調査主 砂状なし、しまりなし、5cm以下のF1を少量含む  
2 1985.7.1 調査主 砂状なし、しまりなし、腐葉腐葉に2cm以下のF1を少量含む

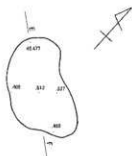


0 1m

図II-20 土坑(3)

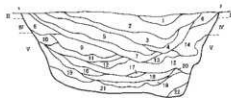
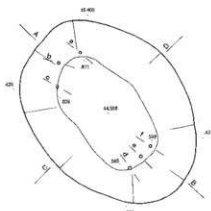
II 柏木川4遺跡の調査

KP-14

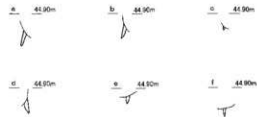


- 1 10760-7 黒褐色土 粘性なし、しまりなし、5cm以下のパリスが少量混入する
- 2 10760-8 黒褐色土 粘性なし、しまりなし、5cm以下のパリスが少量混入する
- 3 10760-9 黒褐色土 粘性なし、しまりなし、5cm以下のパリスが少量混入する
- 4 10760-10 黒褐色土 粘性なし、ややしまりあり、5cm以下のパリスが少量混入する

A B 45.60m



- 1 10760-11 黒褐色土 粘性なし、しまりなし、ごく少量のパリスが若干(1cm以下)を混入する
- 2 10760-12 黒褐色土 粘性なし、しまりなし、5cm以下のパリスが少量混入する
- 3 10760-13 黒褐色土 粘性なし、しまりなし、5cm以下のパリスが少量混入する
- 4 10760-14 黒褐色土 粘性なし、しまりなし、5cm以下のパリスが少量混入する
- 5 10760-15 黒褐色土 粘性なし、しまりなし、5cm以下のパリスが少量混入する
- 6 10760-16 黒褐色土 粘性なし、しまりなし、5cm以下のパリスが少量混入する
- 7 10760-17 黒褐色土 粘性なし、しまりなし、5cm以下のパリスが少量混入する
- 8 10760-18 黒褐色土 粘性なし、しまりなし、5cm以下のパリスが少量混入する
- 9 10760-19 黒褐色土 粘性なし、しまりなし、5cm以下のパリスが少量混入する
- 10 10760-20 黒褐色土 粘性なし、しまりなし、5cm以下のパリスが少量混入する
- 11 10760-21 黒褐色土 粘性なし、しまりなし、5cm以下のパリスが少量混入する
- 12 10760-22 黒褐色土 粘性なし、しまりなし、5cm以下のパリスが少量混入する
- 13 10760-23 黒褐色土 粘性なし、しまりなし、5cm以下のパリスが少量混入する
- 14 10760-24 黒褐色土 粘性なし、しまりなし、5cm以下のパリスが少量混入する
- 15 10760-25 黒褐色土 粘性なし、しまりなし、5cm以下のパリスが少量混入する
- 16 10760-26 黒褐色土 粘性なし、しまりなし、5cm以下のパリスが少量混入する
- 17 10760-27 黒褐色土 粘性なし、しまりなし、5cm以下のパリスが少量混入する
- 18 10760-28 黒褐色土 粘性なし、しまりなし、5cm以下のパリスが少量混入する
- 19 10760-29 黒褐色土 粘性なし、しまりなし、5cm以下のパリスが少量混入する
- 20 10760-30 黒褐色土 粘性なし、しまりなし、5cm以下のパリスが少量混入する
- 21 10760-31 黒褐色土 粘性なし、しまりなし、5cm以下のパリスが少量混入する



- 10760-32 黒褐色土 粘性なし、しまりなし、パリスが少量混入する

KP-15



- 1 10760-33 黒褐色土 粘性なし、ややしまりあり、1cm以下のパリスが少量混入する
- 2 10760-34 黒褐色土 粘性なし、しまりなし、5cm以下の層がブロックを多量に混入する



図II-21 土坑(4)

時 期 限定はできないが、検出例、掘上土の土器などから縄文時代中期後半～後期ごろまでのものではないと思われる。

**KP-15 (図Ⅱ-21 表Ⅱ-6 図版Ⅱ-22)**

位置 G-37 規模  $0.34 \times 0.28 / 0.15 \times 0.13 / 0.10$

調 査 V層上面を精査中に確認した。円形を呈する暗褐色土の落ち込みである。中心にかかるように南側を半截して坑底、壁を確認し、土坑であることがわかった。平面期は円形、坑底はやや平坦で壁は急激に立ち上がっている。

堆 積 土 2層に分層した。両者とも人為的堆積とみられる。

遺 物 出土していない。

時 期 形態から、縄文時代晩期のものである可能性が高い。

**KP-16 (図Ⅱ-22 表Ⅱ-6～8 図版Ⅱ-22)**

位置 N-28, 29 規模  $1.52 \times 1.23 / 0.88 \times 0.54 / 0.16$

調 査 V層上面を精査中、北西-南東方向に長軸のある瓢箪状を呈する黒色土の落ち込みを確認した。遺構の重複を想定して長軸に沿ってトレンチを設定してV層まで掘り下げた。その結果、浅い皿状の2段の坑底を確認できた。このことから、落ち込みは2つの切りあう土坑であることがわかった。新しいほうが本遺構である。平面形は北東-東西方向に長い楕円形、壁と坑底は緩やかに連続し、浅い皿状を呈している。

堆 積 土 黒色土と黒褐色土の2層に分層した。いずれも自然堆積とみられる。

遺 物 覆土からⅢ群土器が3点、北海道式石冠片が2点、礫・礫片が3点出土している。

時 期 不明であるが、覆土の遺物、周囲で出土する遺物から、縄文時代中期のものとみられる。

**KP-17 (図Ⅱ-22 表Ⅱ-6 図版Ⅱ-23)**

位置 K-26 規模  $0.60 \times 0.56 / 0.26 \times 0.24 / 0.20$

調 査 V層上面を精査し、遺構確認中に検出した。黒褐色土の円形の落ち込みである。西側を半截して壁、坑底を確認して土坑であることがわかった。

堆 積 土 黒色土と暗褐色土の2層に分層した。いずれも人為的堆積とみられる。

遺 物 出土していない。

時 期 不明であるが、覆土の色調から縄文時代のものと思われる。

**KP-18 (図Ⅱ-22 表Ⅱ-6 図版Ⅱ-23)**

位置 J-20 規模  $0.84 \times 0.52 / 0.57 \times 0.22 / 0.20$

調 査 V層上面を精査し、遺構確認中に検出した。南北に長い黒褐色土の楕円形の落ち込みである。中心にかかるように南側を半截して壁、坑底を確認した。

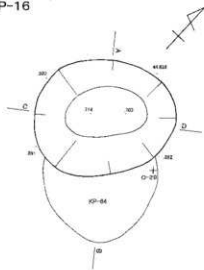
堆 積 土 3層に分層した。上位から1、2層が黒色土、3層は黒褐色土である。1層は自然堆積、2層以下は黄褐色土ブロックの混じる人為的堆積とみられる。

遺 物 出土していない。

時 期 不明であるが土坑の形態、覆土の状態から縄文時代晩期のものである可能性が高い。

II 柏木川4遺跡の調査

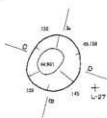
KP-16



- 1 40100:711 黒色土 粘りなし、しまりなし、5cm以下のパリスが多く混じる  
 2 40100:2 黒褐色土 粘りなし、しまりなし、層状構造に5cm以下のロームブロックを多少混入する

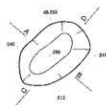


KP-17



- 1 40100:712 黒色土 粘りなし、しまりなし、2cm以下の白色パリスが多く混じる  
 2 40100:3 黒褐色土 粘りなし、しまりなし、5cm以下のパリス・ロームブロックを多く混入する

KP-18



- 1 40100:713 黒色土 粘りなし、しまりなし、パリス少量混入する  
 2 40100:13 黒色土 粘りなし、しまりなし、層状構造にブロックを少量混入する  
 3 40100:2 黒褐色土 粘りなし、しまりなし、層状構造にブロックを多く混入する

KP-20



- 1 40100:714 黒色土 粘りなし、ややしまりあり、層状構造にシルトを多少混入する  
 2 40100:4 黒褐色土 粘りなし、しまりなし、5cm以下の黄褐色「フロッグ」パリスを多少混入する  
 3 40100:4 黒褐色土 粘りなし、しまりなし、黄褐色「フロッグ」を多く混入する



図II-22 土坑(5)

## KP-19 (図Ⅱ-23、36 表Ⅱ-6、8、10 図版Ⅱ-23、24、44)

位置 F-32、33 規模 3.54×0.60/3.30×0.20/0.67

調査 表土剥ぎの最中、ほぼ南北方向に沿って細長い黒褐色土の落ち込みがあることを確認した。Tビットであることを想定し、中央にベルトを設定し、落ち込みを掘り下げた。その結果、検出面と変わらない形状の坑底、急激に立ち上がる壁を確認し、Tビットであることがわかった。

堆積土 7層に区分した。1、3層は自然堆積、6層は開口時の堆積、7層は杭の痕跡とみられる土である。このほかの土は壁面の崩落と思われる汚れた土である。

形態 検出面、坑底ともに、細長の楕円形を呈する。坑底に杭があることから、前出の森田・遠藤分類のB2類に相当するTビットである。

付属遺構 床面を精査したところ、5基の杭跡を確認した。杭は中心に1基、中心から長軸端までの中心付近に2基並んで見つかっている。すべての杭は短軸方向にも中心に位置しており、坑底から先端までの距離は約40cmとなっている。

遺物 1は覆土3層から出土した北海道式石冠である。閃緑岩製。上端を欠損するが、作業面は平滑に擦られている。

時期 明確にはできないが、出土遺物、類例から縄文時代中期から後期のものとみられる。

## KP-20 (図Ⅱ-22 表Ⅱ-6 図版Ⅱ-25)

位置 J-20 規模 0.72×0.52/0.42×0.22/0.18

調査 V層上面を遺構確認中に検出した。黒褐色土の楕円形の落ち込みである。柏木川に向かう緩斜面上に位置していたため、斜面に直行する方向で南側を半載して坑底、壁を確認した。記録を作成した後、北側においても壁、坑底を確認したため、土坑であることがわかった。

堆積土 3層に区分した。すべて埋め戻しとみられる土である。

遺物 出土していない。

時期 土坑の形状から類推すると、縄文時代晩期のものである可能性がある。

## KP-21 (図Ⅱ-23 表Ⅱ-6 図版Ⅱ-25)

位置 G-34 規模 0.46×0.44/0.18×0.22/0.17

調査 V層上面を遺構確認中に確認した。黒色土の円形の落ち込みである。中心にかかるよう、西側を半載して壁、坑底を確認した。記録を作成した後、東半分を調査した結果、坑底から壁に緩やかに連続し、碗状を呈する断面を確認し、土坑であることがわかった。

堆積土 2層に分層した。埋め戻しとみられる堆積である。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、形状から、縄文時代晩期のもものとみられる。

## KP-22 (図Ⅱ-23 表Ⅱ-6 図版Ⅱ-25)

位置 G-33 規模 0.38×0.38/0.18×0.15/0.09

調査 V層上面を遺構確認中に確認した。黒色土の円形の落ち込みである。中心にかかるよう、北西側を半載して壁、坑底を確認した。記録を作成した後、南東半分を調査した結果、坑底から壁に緩やかに連続し、碗状を呈する断面を確認し、土坑であることがわかった。

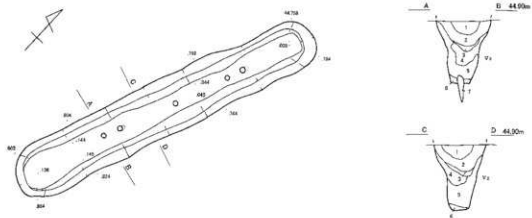
堆積土 2層に分層した。埋め戻しとみられる堆積である。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、形状から、縄文時代晩期のもものとみられる。



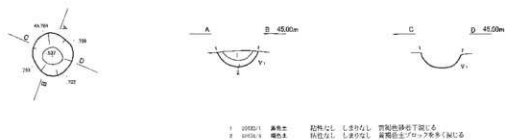
II 柏木川4遺跡の調査



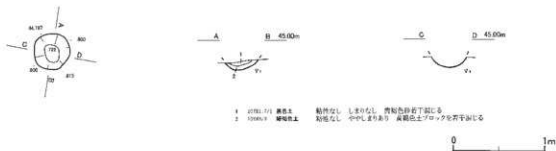
- |   |         |      |      |       |                     |
|---|---------|------|------|-------|---------------------|
| 1 | 30791.0 | 黄褐色土 | 粘付なし | しまりなし | 5a以下白色ハケ本層に属する      |
| 2 | 30791.8 | 黄褐色土 | 粘付なし | しまりなし | 5a以下黄褐色土ブロックの土を少量含む |
| 3 | 30793.7 | 黄褐色土 | 粘付なし | しまりなし | 5a以下黄褐色土ブロックを少量含む   |
| 4 | 30794.9 | 黄褐色土 | 粘付なし | しまりなし | 5a以下シロト土層に属する       |
| 5 | 30795.2 | 黄褐色土 | 粘付なし | しまりなし | 5a以下1層厚、黄褐色土層に属する   |
| 6 | 30797.0 | 黄褐色土 | 粘付なし | しまりなし | 5a以下黄褐色土ブロックを少量含む   |
| 7 | 30798.0 | 黄褐色土 | 粘付なし | しまりなし | 5a以下黄褐色土層を少量含む      |



KP-21



KP-22



図II-23 土坑(6)

## KP-23 (図II-24 表II-6 図版II-25)

位置 N-32 規模  $0.27 \times 0.25 / 0.18 \times 0.16 / 0.12$ 

調査 V層上面において、精査を行っていたところ、柱状の落ち込みを検出した。堆積している土を観察すると、黄褐色土ブロックが混じる埋め戻しによるとみられるものであったため、遺構であることを想定し、すでに若干掘り進んではいたが半截することにした。記録を作成し、完掘して遺構とした。柱穴の可能性があるため、付近を精査したが、同様な遺構はみつからなかった。

堆積土 埋め戻しの可能性のある鈍い黄褐色土1層である。

遺物 出土していない。

時期 縄文時代のものとみられるが、詳細は不明である。

## KP-24 (図II-24、37 表II-6、8、10 図II-26、45)

位置 L-23 規模  $0.54 \times 0.46 / 0.30 \times 0.20 / 0.30$ 

調査 V層上面を精査中、黒色土の落ち込みを検出した。中心を通るように南側を半截したところ、明瞭な壁を検出し、坑底から焼成した痕跡のある礫が出土したため、土坑であることがわかった。壁は急で坑底は出土している石にあわせ、2段になっている。

堆積土 3層に分層した。

遺物 石皿、台石が坑底に接して出土している。出土状況は石皿が下、台石が上になっており、両方ともほぼ長軸が水平になるようにおかれている。1は石皿。作業面を下にした状態で出土している。被熱時と遺構作成時の加撃により割れているとみられる。使用痕は不明瞭で、黒色物が斑状に付着している。2は台石。使用痕は顕著なものではなく、本遺構に入れる際の衝撃によるもの可能性もある。

時期 詳細は不明であるが、覆土の色調から縄文時代中期から後期にかけてのものと思われる。

## KP-25 (図II-24 表II-6、8 図版II-26)

位置 O-30、31 規模  $2.10 \times (1.20) / 1.24 \times (0.98) / 0.18$ 

調査 V層上面を精査中、黒褐色土の落ち込みを検出した。調査区の境界にそってトレンチを設定し、V層まで掘り進めたところ、緩やかに立ち上がる壁を検出し、土坑であることがわかった。検出できた部分は想定で約半分であるが、壁は全方位で緩やかで、坑底は平坦である。調査区外にある自然攪乱に伴う落ち込みの可能性もある。

堆積土 3層に分層した。

遺物 床面、覆土からそれぞれ安山岩の礫が1点ずつ出土している。

時期 詳細は不明であるが、覆土の色調から縄文時代中期から後期のものとみられる。

## KP-26 (図II-24 表II-6、8、10 図版II-26、45)

位置 O-29、30 規模  $1.34 \times (1.03) / 1.12 \times (0.77) / 0.57$ 

調査 IV層上面を精査中、黒褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みは調査区外に伸びていたため、調査区境界に沿ってトレンチを設定し、V層まで掘り下げた。その結果、浅い皿状の断面を確認し、土坑であることがわかった。概ね全体の4分の3を確認したものとみられるが、調査区外にある自然攪乱に伴う落ち込みの可能性もある。壁床は全方向で緩やかに連続し、皿状を呈している。

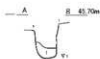
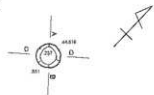
堆積土 自然堆積とみられる黒褐色土1層である。

遺物 床面から礫片1点、覆土から石楡片1点が出土している。1は石楡片。やや薄手で両面に細部調整が施されている。やや球果の多い黒曜石製である。

時期 検出層位から縄文時代中期から後期ごろのものとみられる。

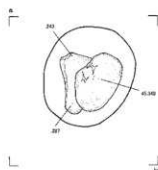
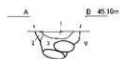
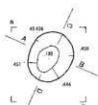
II 柏木川4遺跡の調査

KP-23



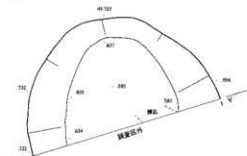
1 321m<sup>2</sup> 硬質土 粘りなし、しまりなし、灰褐色シブロックを若干含む

KP-24



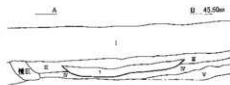
- 1 321m<sup>2</sup> 硬質土 粘りなし、しまりなし、灰褐色、微細なブロックを多く含む  
 2 321m<sup>2</sup> 硬質土 粘りなし、しまりなし、灰褐色、微細なブロックを多く含む  
 3 321m<sup>2</sup> 硬質土 粘りなし、しまりなし、灰褐色、微細なブロックを多く含む

KP-25



- 1 321m<sup>2</sup> 硬質土 粘りなし、しまりなし、1m以上の粒径の砂を多く含む  
 2 321m<sup>2</sup> 硬質土 粘りなし、しまりなし、2m以下の実質的ブロックを若干含む  
 3 321m<sup>2</sup> 硬質土 粘りなし、やわしきあり、2m以下の粒径、灰褐色、を若干含む

KP-26



- 1 321m<sup>2</sup> 硬質土 粘りなし、しまりなし、2m以下の実質的ブロックを少量含む

0 1m

図II-24 土坑(7)

## KP-27 (図II-27 表II-6 図版II-27)

位置 H-27 規模  $0.73 \times 0.14 / 0.62 \times 0.10 / 0.73$ 

調査 V層上面で遺構確認を終了し、染み抜きを行っている際、溝状となるものがあつた。遺構となる可能性を考慮し、溝の4分の1を断ち割って層位を確認することにした。その結果、小規模なTビット状の断面を確認したため、遺構として調査することにした。短軸方向の壁は急で坑底に近づくほど細くなっている。長軸方向ではやや長いU字状を呈している。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、類型からすると、縄文時代中期から後期にかけてのものとみられる。

## KP-28 (図II-25 表II-6 図版II-27)

位置 I-26 規模  $0.73 \times 0.19 / 0.66 \times 0.06 / 0.34$ 

調査 KP-27の調査終了後、付近に同様な遺構がないか探したところ、南に約6mはなれて本遺構を検出した。すでに染み抜きを完了したグリッドであり、遺構の堆積土はほとんど残っていない。そのため、精査して遺構の形態のみ記録した。短軸の断面は針状に先細になっており、平坦な面はない。長軸断面の壁は垂直に立ち上がり、坑底はほぼ平坦である。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、類型からすると、縄文時代中期から後期にかけてのものとみられる。

## KP-29 (図II-25 表II-6 図版II-27)

位置 H-27 規模  $0.67 \times 0.10 / 0.62 \times 0.07 / 0.05$ 

調査 KP-28の調査中、さらに範囲を広げて精査したところ、KP-28から約5mはなれて黒色土の溝状のしみを検出した。南西側を半截したところ、約4cmの浅い堆積であったが、明瞭な坑底を確認したため、KP-27、28と同様な遺構と考え、土坑とした。ただし、坑底は地形に沿って緩やかに傾斜しているため、自然攪乱の可能性も残っている。

堆積土 自然堆積とみられる黒色土1層である。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、類型からすると、縄文時代中期から後期にかけてのものとみられる。

## KP-30 (図II-25 表II-6 図版II-28)

位置 M-24 規模  $0.66 \times 0.47 / 0.40 \times 0.29 / 0.32$ 

調査 V層上面を精査中に検出した黒褐色土の落ち込みである。中心にかかるよう、南側を半截した。その結果壁、坑底を確認したため、土坑であると判断した。壁はやや急で、坑底は南東側がやや深い、歪な碗状を呈する。

堆積土 3層に分層した。すべて埋め戻しとみられるバミスの混じる堆積である。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、覆土の色調、遺構の形態から縄文時代晩期のものである可能性が高い。

## KP-31 (図II-25 表II-6 図版II-28)

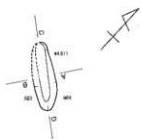
位置 D-28 規模  $0.53 \times 0.50 / 0.30 \times 0.29 / 0.16$ 

調査 V層上面を精査中、黒色土の落ち込みを確認した。中心を通るよう、南側を半截したところ、明瞭な壁を検出したため、土坑であると判断した。南北方向においては概ね碗状を呈しており、東西方向では坑底に明瞭な平坦面があり、壁は急である。

堆積土 2層に分層した。1層は自然堆積とみられる黒色土、2層は流れ込みとみられるロームブロックが若干混入した土である。

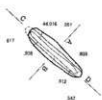
II 柏木川4遺跡の調査

KP-27



- 1 307914 黒砂土 粘りなし、しまりなし  
2 307915 黒砂土 粘りなし、ややしまりあり

KP-28

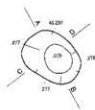


KP-29



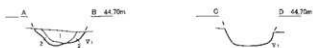
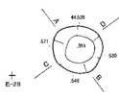
- 1 304013 黒砂土 粘りなし、しまりなし、実相色土ブロックを多く含む

KP-30



- 1 304012 黒砂土 粘りなし、しまりなし、パリス少混入する  
2 304014 黒砂土 粘りなし、しまりなし、粘質土を多く含む  
3 304015 黒砂土 粘りなし、しまりなし、パリス多混入する

KP-31



- 1 304017 黒砂土 粘りなし、しまりなし、5cm以下のローム状子を多く含む  
2 304018 黒砂土 粘りなし、しまりなし、5cm以上のローム状子を多く含む

0 1m

図II-25 土坑(8)

遺物 出土していない。

時期 付近に遺物がまったく出土していないため、不明である。

KP-32 (図Ⅱ-26 表Ⅱ-6 図版Ⅱ-28)

位置 H-36、37 規模 0.57×0.52/0.38×0.45/0.10

調査 V層上面を精査中に確認した。暗褐色土の円形の落ち込みである。中心にかかるように南西方向を半截し、壁、坑底を確認して土坑であることがわかった。壁は緩やか、坑底は概ね平坦で、全体として浅い皿状を呈している。

堆積土 黄褐色土のブロックが少量混じる、暗褐色土の堆積のみである。

遺物 出土していない。

時期 周囲で検出されている遺構から、縄文時代晩期のものである可能性が高い。

KP-33 (図Ⅱ-26 表Ⅱ-6~10 図版Ⅱ-29、45、46)

位置 J-36、37 規模 1.76×0.16/1.26×1.35/0.18

調査 IV層上面で遺構確認中、黒色土の落ち込みを検出した。中心にかかるよう西側を半截したところ、壁、床と、遺構に伴う遺物を確認したため、遺構として調査した。平面形はほぼ正しい円形を呈し、壁は急で坑底は平坦である。

堆積土 3層に分層した。1層とした黒色土は自然堆積、その下位の2、3層は埋め戻しによるとみられる炭化物の混じる堆積である。

遺物 覆土からⅢ群土器が1点、覆土1層からRフレイクが2点、覆土からたたき石1点、礫、礫片が3点出土している。1~3は覆土から出土したⅢ群土器。1は口縁部。口縁下に横位の貼付帯がつき、貼付帯上と口縁端部に半截竹管状工具による刺突文がつけられている。同一工具によるとみられる沈線が胴部に施文されている。2、3は胴部片。2はR斜行縄文が施文される。3はやや粗いR斜行縄文。半截竹管状工具によるとみられる沈線が斜位につけられている。4は覆土1層から出土したRフレイク。やや厚手の割片に粗い調整が施されている。5は覆土から出土したたたき石。棒状礫の1端に敲打痕があるものである。砂岩製。

時期 覆土から出土した遺物から、縄文時代中期のものである可能性が高い。

KP-34 (図Ⅱ-26 表Ⅱ-6、7 図版Ⅱ-29)

位置 I-37 規模 0.94×0.80/0.49×0.43/0.40

調査 IV層上面を遺構確認中、黒色土の落ち込みを検出した。中心にかかるよう、南西側を半截した。その結果、壁、坑底を明瞭に検出し、土坑であると判断した。平面形は北東-南西方向に長軸のある隅丸方形を呈し、壁は急激に立ち上がり、坑底は平坦である。

堆積土 4層に区分した。もっとも上位に位置する1層はレンズ状を呈する自然堆積、2層は黒色土であるがバミス、ロームを多く混入する。3層以下はそれぞれ黒褐色、暗褐色の土を主体とし、ロームブロックが多量に混じる、埋め戻しとみられる土である。

遺物 土器の小片が出土している。縄文時代とみられるが詳細は不明である。

時期 土坑の形状、覆土の状態から、縄文晩期の可能性も残るが、形状を重視すると縄文時代中期である可能性が高い。

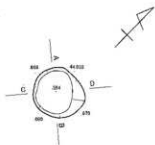
KP-35 (図Ⅱ-26 表Ⅱ-6、8、10 図版Ⅱ-30、44)

位置 H-37 規模 0.56×0.52/0.28×0.26/0.14

調査 V層上面を精査中、暗褐色土の落ち込みを確認した。中心を通るよう南側を半截した結果、明瞭な壁、坑底を確認したため、土坑と判断した。平面形はほぼ円形。壁はやや急で坑底はほぼ

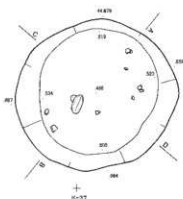
II 柏木川4遺跡の調査

KP-32



1 3073-0 粘褐色土 粘質なし、しまりなし、3m以下の黄褐色土ブロックを少量含む。

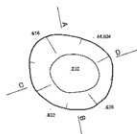
KP-33



1 3078-1 7/1 黄褐色土 粘質なし、しまりなし、6m以下のハイス層が連続する。  
 2 3078-2 黄褐色土 粘質なし、ややしまりあり、黄褐色土ブロックが数層に、炭化物が少量に。  
 3 3078-3 粘褐色土 粘質なし、ややしまりあり、粘褐色土ブロック、同じ位置に3層に。



KP-34



1 3078-1 7/1 黄褐色土 粘質なし、しまりなし、1m以下のハイス層が連続する。  
 2 3078-2 黄褐色土 粘質なし、しまりなし、1m以下のローム・ハイス層が連続する。  
 3 3078-3 粘褐色土 粘質なし、しまりなし、1m以下のローム・ハイス層が連続する。  
 4 3078-4 粘褐色土 粘質なし、ややしまりあり、5m以下のロームブロック・ハイス層を多く含む。

KP-35



1 3078-1 粘褐色土 粘質なし、しまりなし、黄褐色土ブロックが少量に。  
 2 3078-2 褐色土 粘質なし、しまりなし、黄褐色土ブロックが少量に。



図II-26 土坑(9)

平坦である。

**堆積土** 2層に分層した。暗褐色土と褐色土の堆積である。いずれも黄褐色土ブロックの混じる埋め戻しとみられる堆積である。

**遺物** 1は坑底から出土した石製品の可能性のある軽石製の遺物である。扁平な軽石を用い、一端に擦り痕とみられるゆるい傾斜部分がみられる。

**時期** 土坑の形態から、縄文時代晩期のもともみられる。

**KP-36 (図II-27 表II-6 図版II-30)**

**位置** H-37 **規模** 0.66×0.56/0.28×0.27/0.14

**調査** V層上面を精査中に確認した。黒色土の落ち込みである。中心にかかるように北西側を半截したところ、明瞭な壁、坑底を確認したため、土坑であると判断した。平面形はやや南北に長いいびつな円形。壁と坑底は緩やかに連続し、浅い椀状を呈する。

**堆積土** 2層に分層した。上位の1層が黒色土、下位が褐色土である。両者とも黄褐色土ブロックが混じっており、埋め戻しによる堆積とみられる。

**遺物** 出土していない。

**時期** 土坑の形態から、縄文時代晩期のもともみられる。

**KP-37 (図II-27 表II-6 図版II-28)**

**位置** H-37 **規模** 0.44×0.44/0.22×0.23/0.14

**調査** V層上面を精査中、黒褐色土の落ち込みを確認した。南側を半截したところ明瞭な壁、坑底を確認したため、土坑であると判断した。平面形はほぼ円形。壁はやや急で坑底はでこぼこが多い。

**堆積土** 2層に分層した。両者とも黒褐色土であるが、黄褐色土ブロックが混じる埋め戻しとみられる堆積である。

**遺物** 出土していない。

**時期** 土坑の形態から、縄文時代晩期のもともみられる。

**KP-38 (図II-27 表II-6 図版II-28)**

**位置** H-37 **規模** 0.36×0.32/0.15×0.14/0.09

**調査** V層上面を精査中、黒褐色土の落ち込みを確認した。南側を半截したところ明瞭な壁、坑底を確認したため、土坑と判断した。平面形はほぼ円形。壁はやや急であるが、坑底はでこぼこしている。

**堆積土** 黒褐色土1層である。黄褐色土ブロックが多く混じる、埋め戻しとみられる堆積である。

**遺物** 出土していない。

**時期** 土坑の形態から、縄文時代晩期のもともみられる。

**KP-39 (図II-27 表II-6～9 図版II-32、44)**

**位置** G-40 **規模** 1.03×0.90/0.73×0.68/0.30

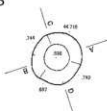
**調査** III層を調査中、黒色土の落ち込みがあるのを確認した。落ち込みの形状が不明瞭であったため、IV層付近まで掘り下げたところ、落ち込みの輪郭が比較的是っきりした。落ち込みの形状の短軸にあわせ、西側を半截すると明瞭な壁、坑底を検出した。平面形は検出面がややいびつであるが坑底とともに円形を呈し、壁は斜面下にあたる西側でややゆるいほかはほとんど急である。おそらく崩落によるものであろう。坑底はきわめて平坦である。

**堆積土** 3層に分層した。1層は自然堆積とみられる黒色土。レンズ状に堆積している。その下



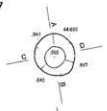
II 柏木川4遺跡の調査

KP-36



- 1 10192/1 黒褐色土 粘質なし、しまりなし、赤褐色セロブロックを若干含む  
 2 10194/1 黒褐色土 粘質なし、しまりなし、黄褐色セロブロックを多く含む

KP-37



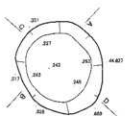
- 1 10192/2 黒褐色土 粘質なし、しまりなし、2cm以下の黄褐色セロブロックを少量含む  
 2 10192/3 黒褐色土 粘質なし、しまりなし、3cm以下の黄褐色セロブロックを若干含む

KP-38



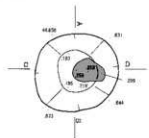
- 1 10192/2 黒褐色土 粘質なし、しまりなし、2cm以下の黄褐色セロブロックを若干含む

KP-39



- 1 10191/3 黒褐色土 粘質やや多い、しまりなし、2cm以下のパズルを少量含む  
 2 10192/1 黒褐色土 粘質なし、しまりなし、2cm以下の黄褐色セロブロックを若干含む  
 3 10194/2 黄褐色土 粘質なし、しまりなし、黒色封・Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>を若干含む

KP-40



- 1 10191/3 黒褐色土 粘質やや多い、しまりなし、2cm以下のパズルを少量含む  
 2 10191/7 黒褐色土 粘質なし、しまりなし、2cm以下の黄褐色セロブロックを若干含む  
 3 10191/5 黒褐色土 粘質なし、しまりなし、  
 4 10191/9 灰色・黒褐色土 粘質なし、しまりなし、2cm以下のセロブロックを多量に含む



図II-27 土坑⑩

位にあたる2、3層はそれぞれ暗褐色土、灰黄褐色土で、両方とも黄褐色土ブロックが多く混じる埋め戻しとみられる土である。

**遺物** 覆土1層から、Ⅲ群土器が6点、安山岩の礫片1点、3層からⅢ群土器3点が出土している。1は覆土3層から出土したⅢ群a類土器の口縁部である。口縁に沿って貼付帯がつけられ、縦位に縄線により刻みが施される。地文は結束第1種羽状縄文である。

**時期** 土坑の検出状態から、縄文時代晩期のもものとみられる。

**KP-40 (図Ⅱ-27 表Ⅱ-6～8 図版Ⅱ-32)**

**位置** G-41 **規模** 0.88×0.83/0.42×0.45/0.49

**調査** Ⅲ層下部を調査中、黒色土の落ち込みを検出した。落ち込みの形状が明瞭ではなかったため、ベルトを残してⅣ層上面まで掘り下げた。そのまま南西部分を掘り下げて壁坑底を確認したため、土坑と判断した。平面形は検出面、坑底ともに不整な円形を呈する。壁は急で坑底は小さな平坦面がある。

**堆積土** 4層に区分した。1、3層は自然堆積とみられる黒色土である。これらの中間に位置する2層は他遺構の掘上土とみられる流れ込みの土である。Ⅳ層はⅤ層をブロック状に混じる鈍い黄褐色土で、埋め戻しとみられる。

**遺物** 覆土1層からⅢ群土器が1点、フレイクが2点出土し、覆土3層からフレイクが1点、覆土4層からⅢ群土器が2点、出土している。いずれも混入したものとみられる。

**時期** 土坑の形態から縄文時代晩期のもものとみられる。

**KP-41 (図Ⅱ-28 表Ⅱ-6 図版Ⅱ-33)**

**位置** K-41 **規模** 1.14×0.91/0.68×0.54/0.17

**調査** Ⅳ層上面を精査中、黒褐色土の不明瞭な落ち込みを確認した。短軸方向に南側を半截すると、比較的明瞭な壁、坑底を確認したため、土坑とすることにした。平面形は検出面、坑底ともに南北に長い楕円形を呈する。壁は短軸方向でやや急であるが、そのほかでは緩やかである。坑底は概ね平坦である。

**堆積土** 3層に分層した。すべて埋め戻した結果とみられる、黄褐色土ブロックが混じる堆積である。

**遺物** 出土していない。

**時期** 不明であるが、覆土の色調から類推すると、縄文時代中期である可能性が高い。

**KP-42 (図Ⅱ-28 表Ⅱ-6 図版Ⅱ-33)**

**位置** G-42 **規模** 0.62×0.48/0.20×0.21/0.42

**調査** Ⅳ層を調査中、垂な円形を呈する黒褐色土の落ち込みを確認した。単独の遺構と考え、南西側を半截し、記録を作成したのち、西側半分を調査したが、坑底を2段確認したため、2遺構が切り合っているものと判断した。そのうち新しいものが本遺構である。

**堆積土** 5層に分層した。1層は自然堆積とみられる黒色土。2～4層は黄褐色土ブロックの混じる埋め戻しとみられる堆積である。

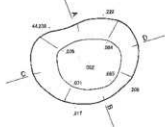
**形態** 平面形は北西-南東方向に長い垂な楕円形を呈する。坑底は緩やかな碗状を呈し、壁は急激に立ち上がっている。

**遺物** 出土していない。

**時期** 土坑の形態から、縄文時代晩期のものである可能性が高い。

II 柏木川4遺跡の調査

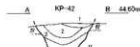
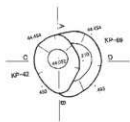
KP-41



- 1 10785-3 黒褐色土 粘質なし、ややしじりあり、砂利粒(ヤ)・骨殖出土がブロックを多く含む。
- 2 10785-4 赤褐色土 粘質なし、しじりなし、V層・Sp111を多く含む。
- 3 10785-5 黄褐色土 粘質なし、しじりなし、V層・Sp111を多く含む。

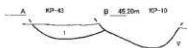
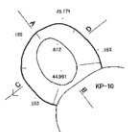
KP-42

KP-69



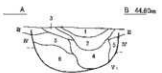
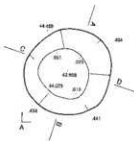
- KP-42
  - 1 10785-3 黒褐色土 粘質なし、しじりなし、1cm以下の黒褐色土ブロックを少量含む。
  - 2 10785-4 黒褐色土 粘質なし、しじりなし、腐植土・骨殖土を多く含む。
  - 3 10785-5 赤褐色土 粘質なし、しじりなし、5cm以下の土を多く含む。
- KP-69
  - 1 10785-3 黒褐色土 粘質あり、ややしじりあり、5cm以下の土を多く含む。
  - 2 10785-4 赤褐色土 粘質なし、しじりなし、1cm以下の黒褐色土ブロックを少量含む。

KP-43

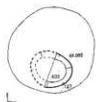


- 1 10785-3 黒褐色土 粘質なし、しじりなし、5cm以下の土を少量含む。

KP-44



- 1 KP44-1 赤褐色土 粘質なし、しじりなし、5cm以下の土を多く含む。
- 2 KP44-2 赤褐色土 粘質なし、しじりなし、5cm以下の土を多く含む。
- 3 KP44-3 赤褐色土 粘質なし、ややしじりあり、V層ブロックを少量含む。
- 4 KP44-4 赤褐色土 粘質なし、しじりなし、骨殖ブロック(5cm以下)を少量含む。
- 5 KP44-5 赤褐色土 粘質なし、しじりなし、5cm以下のV層ブロック、腐植土を多く含む。



KP-44掘土1層からの切り込み



図II-28 土坑①

## KP-43 (図Ⅱ-28 表Ⅱ-6 図版Ⅱ-18)

位置 M-24、25 規模 0.69×0.80/0.51×0.38/0.24

調査 V層上面を精査中に黒色土の落ち込みを確認した。落ち込みの形状が不整形な形状であったため、遺構の重複を想定し、不整形の長軸方向にトレンチを設定してV層まで掘り下げた。その結果、2段の坑底、堆積土の切り合いを確認したため、2基の土坑と判断した。古いほうが本遺構である。平面形はほぼ円形、坑底と壁が緩やかに連続し、椀状の断面形を呈する。

堆積土 自然堆積とみられる黒色土1層である。

遺物 出土していない。

時期 付近で出土している遺物、覆土の状態から、縄文時代晩期のものとみられる。

## KP-44 (図Ⅱ-28 表Ⅱ-6、7 図版Ⅱ-33)

位置 H-42 規模 0.92×0.92/0.54×0.52/0.47

調査 III層下部を調査中、黒色土の落ち込みを検出した。落ち込みの長軸にあわせてトレンチを設定し、V層が露出するまで掘り下げると、明瞭な壁、坑底を確認したため、土坑であると判断した。覆土を掘削中、覆土6層中に円形の落ち込みを確認した。土層断面を改めて確認すると、III層下部付近から掘り下げた痕跡があるのを確認した。すでに覆土をほとんど除去した時点で確認したため、6層上面における輪郭のみ記録した。KP-44を切る何らかの遺構があった可能性が高い。平面形は検出面、坑底ともにほぼ円形を呈する。坑底の平坦面は小さく、壁は境目なく連続し坑口付近では垂直に立ち上がる。

堆積土 6層に分層した。1から4層までは新しい遺構の可能性のある土である。1から3層は遺構埋没後の自然堆積とみられる。4層は埋め戻しの可能性がある。5、6層はKP-44本来の堆積である。5層は褐色土、6層は黒色土で両方とも黄褐色土ブロックが混じる人為的堆積である。6層には炭化物が混じっている。

遺物 覆土2層から、V群土器が2点出土している。

時期 遺構の形態から、重複する遺構も含めて縄文時代晩期に属するものとみられる。

## KP-45 (図Ⅱ-29 表Ⅱ-6、7、9 図版Ⅱ-34、46)

位置 G-41 規模 0.90×0.53/0.54×0.52/0.39

調査 IV層の調査中、黒色土の落ち込みを検出した。南西側を半截したところ、明瞭な壁、坑底を確認したため、土坑であると判断した。平面形は検出面、坑底ともにほぼ円形、壁は急で坑底はほぼ平坦である。

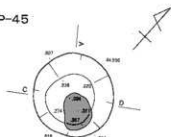
堆積土 5層に分層した。もっとも上位の1、2層は自然堆積とみられる。3層は流れ込みの土、4、5層はV層のブロックが混じる埋め戻しとみられる土である。4層には炭化物、5層上面には焼土粒子の集積がある。

遺物 覆土1層中からV群土器片14点が出土している。1～3は覆土1層中のV群c類土器。1、2は同一個体。口縁下に4条の平行沈線が施され、口唇端部には篋状工具による刻みが施される。体部は縞縄文風のRL斜行縄文が、縦走気味に施文されている。3の地文はRL斜行縄文である。

時期 土坑の形態、覆土の出土遺物から縄文時代晩期のものとみられる。

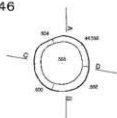
II 柏木川4遺跡の調査

KP-45



- 1 30711-7/2 黄褐色土 粘質なし、しまりなし、1m以下の内部に少量の土器
- 2 30711-7/1 黄褐色土 粘質なし、しまりなし、1m以下の内部に少量の土器
- 3 30712-1 黄褐色土 粘質なし、ややしまりあり、2m以下のV層に少量の土器
- 4 30713 黄褐色土 粘質なし、しまりなし、段状物・V層ブロック（フライト）を多く含む
- 5 30714-2 濃い黄褐色土 粘質なし、しまりなし、2m以下のV層ブロックを多く含む

KP-46



- 1 30712-2 黄褐色土 粘質なし、ややしまりあり、2m以下のV層に少量の土器

KP-47



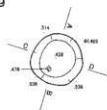
- 1 30712-1 黄褐色土 粘質なし、しまりなし、2m以下のV層に少量の土器
- 2 30712-2 黄褐色土 粘質なし、ややしまりあり、2m以下のV層ブロック・段状物を多く含む
- 3 30713-1 黄褐色土 粘質なし、しまりなし、2m以下のV層ブロック・段状物を多く含む
- 4 30713-2 黄褐色土 粘質なし、しまりなし、2m以下のV層ブロック・段状物を多く含む

KP-48



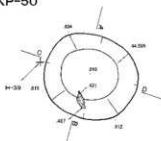
- 1 30713-3 黄褐色土 粘質なし、しまりなし、2m以下のV層ブロックを多く含む
- 2 30714-1 黄褐色土 粘質なし、しまりなし、2m以下のV層ブロックを多く含む

KP-49



- 1 30714-2 黄褐色土 粘質なし、しまりなし、2m以下のV層ブロックを多く含む
- 2 30714-1 黄褐色土 粘質なし、ややしまりあり、2m以下のV層ブロックを多く含む

KP-50



- 1 30713-1 黄褐色土 粘質なし、しまりなし、2m以下のV層に少量の土器
- 2 30713-2 黄褐色土 粘質なし、しまりなし、2m以下のV層に少量の土器
- 3 30713-3 黄褐色土 粘質なし、しまりなし、2m以下のV層に少量の土器
- 4 30714-1 黄褐色土 粘質なし、しまりなし、2m以下のV層に少量の土器
- 5 30714-2 黄褐色土 粘質なし、ややしまりあり、2m以下のV層に少量の土器
- 6 30714-3 濃い黄褐色土 粘質なし、ややしまりあり、2m以下のV層ブロックを多く含む

図II-29 土坑⑫

0 1m

## KP-46 (図Ⅱ-29 表Ⅱ-6 図版Ⅱ-34)

位置 H-39 規模  $0.62 \times 0.60 / 0.44 \times 0.46 / 0.10$ 

調査 V層上面を精査中、黒褐色土の落ち込みを検出した。中心にかかるように南西方向を半截した結果、明瞭な壁、坑底を確認することができた。このことから落ち込みは土坑であると判断した。

堆積土 黒褐色土1層の堆積である。V層のブロックが混じる埋め戻しとみられる土である。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、形態や付近の遺構検出状況から、縄文時代晩期のものとみられる。

## KP-47 (図Ⅱ-29 表Ⅱ-6、7 図版Ⅱ-34)

位置 H-39 規模  $0.58 \times 0.54 / 0.36 \times 0.44 / 0.18$ 

調査 V層上面を精査中、暗褐色土の落ち込みを検出した。中心にかかるように西側を半截した。その結果明瞭な壁、坑底を確認し、土坑であると判断した。平面形は検出面、坑底ともに円形を呈し、壁は急で坑底は平坦である。

堆積土 4層に分層した。すべてV層、もしくは基盤層のブロック、炭化物が混入する埋め戻しとみられる堆積である。

遺物 覆土4層から土器片が1点出土している。縄文時代のものとみられるが、詳細は不明である。

時期 不明であるが、形態や付近の遺構検出状況から、縄文時代晩期のものとみられる。

## KP-48 (図Ⅱ-29、38 表Ⅱ-6 図版Ⅱ-34)

位置 H-39 規模  $0.62 \times 0.60 / 0.38 \times 0.38 / 0.14$ 

調査 V層上面を精査中、褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みの南西側を中心にかかるよう半截したところ、明瞭な壁、坑底を確認した。そのため、この落ち込みを土坑として判断することにした。平面形は検出面、坑底ともに円形である。壁は急で坑底は平坦である。

堆積土 2層に分層した。暗褐色土と褐色土は両方とも埋め戻しとみられる堆積である。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、形態、付近で検出されている遺構から、縄文時代晩期のものである可能性が高い。

## KP-49 (図Ⅱ-29 表Ⅱ-6、7、9 図版Ⅱ-34、47)

位置 G-39 規模  $0.56 \times 0.56 / 0.39 \times 0.39 / 0.10$ 

調査 V層上面を精査中、褐色土の落ち込みを検出した。南西部分を中心にかかるように半截した結果、明瞭な壁、坑底を確認して土坑であることがわかった。

堆積土 黒褐色土と褐色土の2層に分層した。両者とも黄褐色土ブロックが混じる、埋め戻しによる堆積であると思われる。

遺物 1は覆土2層から出土したV群c類土器。無文面上にU字状などを呈する沈線による文様が描かれている。出土遺物はこの1点のみである。

時期 土坑の形状、周囲で検出される土坑の時期から、縄文時代晩期のものとみられる。

## KP-50 (図Ⅱ-29 表Ⅱ-6、8 図版Ⅱ-35)

位置 G、H-39 規模  $1.00 \times 0.96 / 0.60 \times 0.60 / 0.36$ 

調査 V層上面を精査中、黒色土の落ち込みを検出した。短軸を軸とし、南西側を半截したところ、明瞭な壁、坑底を確認したため、土坑であると判断した。平面形は検出面、坑底ともに北東一

南西方向に長軸のある隅丸方形を呈する。坑底は平坦で、壁と緩やかに連続している。壁は坑口に近づくほど角度が急になり、坑口付近ではほぼ直立する。

**堆積土** 6層に分層した。1～3層は黄褐色ブロックなどが混じっているが、黒褐色土などを基調としており、レンズ状に堆積していることなどから、流れ込みによる自然堆積であると考えられる。4～6層が土坑本来の堆積とみられ、黄褐色土ブロックのほか、4、5層には炭化物も混じっている。人為的に埋め戻した結果の堆積と考えられる。

**遺物** 覆土1層から、安山岩の礫片が1点出土している。

**時期** 土層堆積状態の類似から、縄文時代晩期のものである可能性が高い。

**KP-51 (図II-30 表II-6 図版II-35)**

**位置** I-38 **規模** 0.62×0.66/0.40×0.36/0.12

**調査** V層上面を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。西側を半截したところ、明瞭な壁、坑底を確認したため、土坑と判断した。平面形は検出面、坑底ともにほぼ円形、壁は急、坑底は細かい起伏が多く、平坦ではない。

**堆積土** 2層に分層した。上位の1層は自然堆積の可能性のある黒褐色土。下位の2層は埋め戻しなどの原因による人為的堆積とみられる灰黄褐色土である。

**遺物** 出土していない。

**時期** 土坑の形態、周囲で検出される遺構の時期から、縄文時代晩期のものとみられる。

**KP-52 (図II-30 表II-6 図版II-35)**

**位置** H-38 **規模** 0.50×0.44/0.31×0.26/0.08

**調査** V層上面を精査中、暗褐色土の落ち込みを確認した。中心にかかるように南西部分を半截して明瞭な壁、坑底を確認したため、土坑であると判断した。平面形は検出面では卵形、坑底はほぼ円形である。壁は緩やかで坑底は起伏が多く、でこぼこしている。

**堆積土** 2層に分層した。上位の1層はV層の粒子が混じる暗褐色土である。2層は1層が漸変している層である。

**遺物** 出土していない。

**時期** 土坑の形態、周囲で検出される遺構の時期から、縄文時代晩期のものとみられる。

**KP-53 (図II-30 表II-6 図版II-36)**

**位置** H-39 **規模** 0.66×0.52/0.42×0.36/0.08

**調査** V層上面を精査中に確認した、黒褐色土の落ち込みである。南西側を半截したところ明瞭な坑底を確認したため、土坑であると判断した。平面形は不整な楕円形、坑底は細かな起伏が多く、でこぼこしている。壁は確認できた部分ではきわめて緩やかである。

**堆積土** 2層に分層した。上位の1層は自然堆積、下位の2層は炭化物が混じっているため、人為的な堆積の可能性が高い。

**遺物** 出土していない。

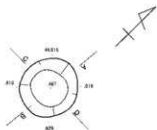
**時期** 土坑の形態、周囲で検出される類似の遺構から、縄文時代晩期のものである可能性が高い。

**KP-54 (図II-30 表II-6 図版II-36)**

**位置** H-39 **規模** 0.58×0.54/0.32×0.32/0.12

**調査** V層上面を精査中、鈍い黄褐色土の落ち込みを確認した。中心にかかるように西側を半截したところ、明瞭な壁、坑底を確認したため、土坑であると判断した。平面形はほぼ円形、坑底は

KP-51



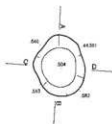
- 1 3070-3 遺構色土 粘質なし、しまりなし、Sp11-14 土少量混じる  
 2 3074-2 遺構色土 粘質なし、しまりなし、黒褐色+ブロック層下部に在る

KP-52



- 1 3070-3 遺構色土 粘質なし、しまりなし、V層部下方に在る  
 2 3070-4 遺構色土 粘質なし、土文のみ、黒褐色

KP-53



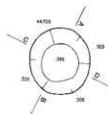
- 1 3070-1 黒色土 粘質なし、しまりなし、5cm以下のV土少量混じる、層序不明  
 2 3070-2 遺構色土 粘質なし、しまりなし、灰化層下部に在る

KP-54



- 1 3070-3 60cm層構造 粘質なし、しまりなし、3cm以下の黒ブロック、灰化層を多く混じる

KP-55



- 1 3070-3 遺構色土 粘質なし、しまりなし、2cm以下の黒褐色土、3cm以下の灰化層を若干混じる

0 1m

図II-30 土坑⑬



小さな平坦面があり、坑底から壁は緩やかに連続し、急激に立ち上がっている。

**堆積土** 炭化物、黄褐色土ブロックが多く混じる、にぶい黄褐色土1層の堆積である。

**遺物** 出土していない。

**時期** 土坑の形態、周囲で検出される類似の遺構から、縄文時代晩期のものである可能性が高い。

**KP-55 (図II-30 表II-6 図版II-36)**

**位置** H-39 **規模** 0.71×0.66/0.40×0.41/0.13

**調査** V層上面を精査中、黒褐色土の落ち込みを検出した。中心にかかるように西側を半截したところ、明瞭な坑底、壁を確認したため、土坑であると判断した。平面形はほぼ円形、坑底は緩やかに起伏し凸凹がある。壁は坑底と緩やかに連続し、やや急である。

**堆積土** 炭化物の混じる黒褐色土1層の堆積である。

**遺物** 出土していない。

**時期** 周囲で検出される遺構群から、縄文時代晩期のものである可能性が高い。

**KP-56 (図II-31、38 表II-6、7、9 図版II-37、47)**

**位置** G-42 **規模** 1.08×1.06/0.74×0.70/0.50

**調査** III層下部を調査中、黒色土の落ち込みを確認した。落ち込みの中心を通るように南西側を半截したところ、明瞭な坑底を確認したため、土坑であると判断した。平面形は円形、坑底は平坦である。壁は坑底と緩やかに連続し、坑口に近づくほど急激に立ち上がっている。

**堆積土** 6層に分層した。1、2層はレンズ状を呈する自然堆積。3、5、6層はV層ブロックを多く混じる、埋め戻しとみられる堆積である。4層は崩落、あるいは他遺構からの流れ込みの堆積とみられる。

**遺物** 覆土6層からV群土器が2点出土している。1はV群c類土器の口縁部。口縁下に2条の連続山形沈線文が施文され、口唇は棒状工具により縦位に刻まれている。

**時期** 土坑の形状、土層の堆積の状態から、縄文時代晩期のものとみられる。

**KP-57 (図II-31、38 表II-6、7、9 図版II-37、47)**

**位置** M-38 **規模** 1.14×0.94/1.00×0.78/0.12

**調査** V層上面を精査中に黒色土の落ち込みを確認した。中心にかかるように西側を半截し他ところ、明瞭な坑底、壁を確認したため、土坑であると判断した。平面形は不整な楕円形。壁は急で、坑底はほぼ平坦である。

**遺物** 覆土からIII群土器が10点出土している。1は突起部分。口縁に沿って、さらに突起から垂下する貼付帯が付けられている。垂下するものには縄線が横位に付けられ、沿うものには半截竹管状工具による押し引き文が施文されている。地文は結束のある縄文がつけられている。2、3は胴部片。2は結束第1種羽状縄文。3は結束第1種斜行縄文。3の原体は撚り戻されている。すべてIII群a類土器とみられる。

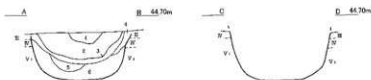
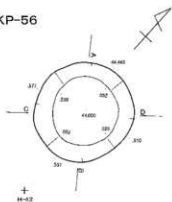
**時期** 出土した遺物から、縄文時代中期のものとみられる。

**KP-58 (図II-31、36 II-6、7、9 図版II-37、47)**

**位置** G-42 **規模** 0.83×0.78/0.50×0.48/0.48

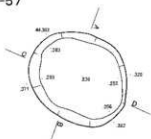
**調査** IV層上面で遺構確認中、黒色土の落ち込みを確認した。落ち込みはGラインに沿ってF-42グリッドにも伸びており、伸びた部分にかかるようにトレンチを設定して、V層まで掘り下げた。その結果、明瞭な壁、坑底を確認することができた。そのためこの落ち込みを土坑と判断した。平面

KP-56



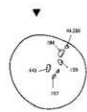
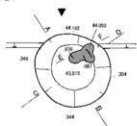
- 1 20782-2/1 礫層土 粘質なし、しまりなし、5cm以下のハリス粒多量混入  
 2 20782-2/2 礫層土 粘質なし、しまりなし、5cm以下のハリス粒少量混入  
 3 20782-2/3 礫層土 粘質なし、しまりなし、縦割面上ブロック(5cm以下)を多く含む  
 4 20782-2/4 礫層土 粘質なし、しまりなし、5cm以下のハリス(3g以下)を少量含む  
 5 20782-2/5 礫層土 粘質なし、しまりなし、5cm以下のハリス・1層ブロックを多量に含む  
 6 20782-2/6 礫層土 粘質なし、しまりなし、5cm以下のハリス・1層ブロック・縦割面を多く含む

KP-57



- 1 20782-2/1 礫層土 粘質なし、しまりなし、5cm以下の黄褐色土ブロックを少量含む、層分不明  
 2 20782-2/2 礫層土 粘質なし、しまりなし、5cm以下の黄褐色土ブロックを少量含む、層分不明

KP-58

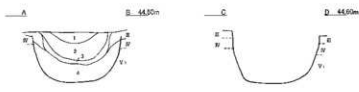
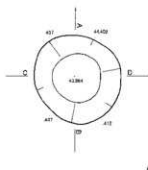


遺構 2 築造跡出土状況(1/40)



- 1 20782-2/1 礫層土 粘質なし、しまりなし、縦割面を若干含む、層分不明  
 2 20782-2/2 礫層土 粘質なし、しまりなし、5cm以下のハリス多量混入  
 3 20782-2/3 礫層土 粘質なし、しまりなし、5cm以下のハリス少量混入  
 4 20782-2/4 礫層土 粘質なし、しまりなし、縦割面上ブロック(5cm以下)を少量含む  
 5 20782-2/5 礫層土 粘質なし、しまりなし、5cm以下のハリス・1層ブロックを多量に含む  
 6 20782-2/6 礫層土 粘質なし、しまりなし、縦割面上ブロック・縦割面を多く含む

KP-59



- 1 20782-2/1 礫層土 粘質なし、しまりなし、5cm以下のハリス粒少量混入  
 2 20782-2/2 礫層土 粘質なし、しまりなし、5cm以下のハリス少量混入  
 3 20782-2/3 礫層土 粘質なし、しまりなし、縦割面上ブロック(5cm以下)を少量含む  
 4 20782-2/4 礫層土 粘質なし、しまりなし、5cm以下のハリス・1層ブロックを多量に含む  
 5 20782-2/5 礫層土 粘質なし、しまりなし、5cm以下のハリス・1層ブロック・縦割面を多く含む

図 II-31 土坑④



形は概ね円形、坑底は平坦で、壁は急激に立ち上がっている。

**堆積土** 6層に区分した。最上位の1層は成因不明の褐色土である。他遺構の掘土土の可能性もある。2、3層は自然堆積とみられる土である。4、5層はこの土坑の本来の堆積である。両方とも黄褐色土ブロックが混じる土である。6層は5層中にみられた堆積で焼土粒子、炭化物が混じっている。

**遺物** 覆土2層下部付近で土器片の集中が検出された。1はV群の浅鉢。底部を欠損している。口縁は緩やかな4波状を呈し、波頂部は低いM字状を呈する。口唇はやや尖り、内側には地文と同一原体によるとみられる刻みが縦に施されている。刻みの直下には1条の沈線が口縁、突起に沿ってつけられる。地文はLR斜行縄文。底部から口縁に向かって横に施文されている。

**時期** この土坑に伴うとみられる土器から、縄文時代晩期のものとみられる。

KP-59 (図II-31 表II-6、7 図版II-38)

**位置** G-42 **規模** 1.00×0.90/0.52×0.52/0.53

**調査** III層下部を掘削中、黒色土の落ち込みを確認した。落ち込みの中心にかかるようにトレンチを設定し、V層まで掘り進んだところ、明瞭な壁、坑底を確認したため、土坑であると判断した。平面形は検出面、坑底ともほぼ円形を呈する。坑底は平坦であり、壁とゆるやかに連続している。壁は坑口に近づくほど角度が急になり、坑口ではほぼ直立している。

**堆積土** 4層に分層した。上位に位置する1、2層は土坑のくぼみに堆積した自然堆積土であると思われる。3層は成因がよくわからないが、他遺構あるいは本遺構の堀土土が流れ込んだ堆積である可能性がある。4層は本遺構の覆土である。地山のブロックが多く混じる黒褐色土である。

**遺物** V群土器が覆土2層から1点、覆土4層から3点出土している。

**時期** 土坑の形状、堆積状態の類似から、縄文時代晩期のものとみられる。

KP-60 (図II-32 表II-6 図版II-38)

**位置** M-40 **規模** 1.26×0.94/0.85×0.54/0.22

**調査** IV層上面を遺構確認中、汚れた暗褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みが不明瞭であったため、落ち込みの短軸を基準としてトレンチを設定してV層まで掘り下げた。その結果、比較的明瞭な壁、坑底を確認することができたため、土坑であると判断した。平面形は楕円形、坑底は短軸方向では平坦面ではなく、断面は碗状を呈する。長軸方向にはやや小さな平坦面があるが、壁と境目なく連続し、きわめて緩やかである。

**堆積土** 2層に分層した。1層はにぶい黄褐色土、2層は褐色土、両方とも暗褐色土が混じる埋め戻しとみられる土である。

**遺物** 出土していない。

**時期** 不明であるが、周囲の遺物出土状況から、縄文時代中期の可能性が高い。

KP-61 (図II-32 表II-6 図版II-38)

**位置** M-40 **規模** 1.26×0.98/0.68×0.60/0.20

**調査** KP-60の土層断面の記録をとる際、周囲を清掃したところ、同様な土の落ち込みを検出した。KP-60と同一の方向になるよう、トレンチを設定し、V層まで掘り下げたところ、明瞭な壁、坑底を確認することができたため、土坑であると判断した。平面形はほぼ南北に長軸のある楕円形を呈する。坑底に平坦面はほとんどなく、壁と緩やかに連続して断面は浅鉢状を呈する。

**堆積土** 黄褐色土ブロックが混じる、褐色土の堆積である。

**遺物** 出土していない。

**時期** 不明であるが、周囲の遺物出土状態から、縄文時代中期のものである可能性が高い。

## KP-62 (図Ⅱ-32 表Ⅱ-6 図版Ⅱ-39)

位置 I-37 規模  $0.72 \times 0.72 / 0.46 \times 0.44 / 0.20$

調査 V層上面を精査中に、汚れた褐色土の落ち込みを確認した。中心を通るように西側を半截したところ、明瞭な壁、坑底を確認したため、土坑であると判断した。平面形は円形、坑底に平坦面はほとんどなく、ボール状の断面を呈する。

堆積土 2層に分層した。いずれも黄褐色土のブロックが混じる、埋め戻しとみられる堆積である。

遺物 出土していない。

時期 周囲で検出される遺構から、縄文時代晩期のもものとみられる。

## KP-63 (図Ⅱ-32 表Ⅱ-6 図版Ⅱ-39)

位置 G-41 規模  $0.60 \times 0.49 / 0.26 \times 0.21 / 0.14$

調査 III層調査中、黒色土の落ち込みを検出した。落ち込みは瓢箪型を呈していたため、遺構の切り合いを想定して長軸にあわせたトレンチを設定してV層まで掘り下げた。その結果、高さの異なる2段の坑底を確認したため、落ち込みを2基の土坑の切り合いと判断した。そのうち新しいほうが本遺構である。平面形は不整な楕円形、坑底に平坦面はなく、西側が深くえぐれ柱穴状を呈している。

堆積土 3層に分層した。上位の1層は自然堆積、下位の2、3層は埋め戻しの可能性のある土である。

遺物 出土していない。

時期 付近で検出されている遺構、土層堆積状態の類似から、縄文時代晩期のもものとみられる。

## KP-64 (図Ⅱ-32 表Ⅱ-6、7 図版Ⅱ-22)

位置 N、O-28 規模  $1.22 \times (0.86) / 0.90 \times (0.70) / 0.16$

調査 V層上面を精査中、北西-南東方向に長軸のある瓢箪状を呈する黒色土の落ち込みを確認した。遺構の重複を想定して長軸に沿ってトレンチを設定してV層まで掘り下げた。その結果、浅い皿状の2段の坑底を確認できた。このことから、落ち込みは2つの切りあう土坑であることがわかった。古いほうが本遺構、新しいほうはKP-16である。平面形は残存する部分においては概ね円形を呈している。坑底はほぼ平坦で、壁と緩やかに連続し、断面形は浅い皿状を呈する。

堆積土 若干のバミスが混じる黒褐色土1層である。自然堆積かもしれない。

遺物 覆土1層から、III群土器が2点出土している。

時期 周囲の遺物出土状況から縄文時代中期のものである可能性が高い。

## KP-65 (図Ⅱ-33 表Ⅱ-6、7、9 図版Ⅱ-39、47)

位置 G-41 規模  $(0.47) \times 0.44 / 0.24 \times 0.24 / 0.15$

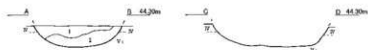
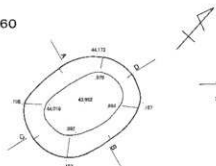
調査 III層調査中、黒色土の落ち込みを検出した。落ち込みは瓢箪型を呈していたため、遺構の切り合いを想定して長軸にあわせたトレンチを設定してV層まで掘り下げた。その結果、高さの異なる2段の坑底を確認したため、落ち込みを2基の土坑の切り合いと判断した。そのうち古いほうが本遺構、新しいほうはKP-63である。平面形は楕円形、坑底に平坦面がなく、断面形は半球状を呈する。

堆積土 2層に分層した。両者とも自然堆積の可能性がある。

遺物 覆土2層からIII群土器が2点出土している。1はIII群土器の胴部片。結束第2種斜行縄文が施文されている。

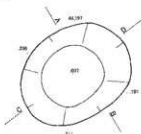
II 柏木川4遺跡の調査

KP-60



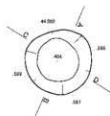
1 1019A/B 粘り質褐色土 粘性なし、ややしまりあり 3m以下の層褐色土を少しみかけに若干混じる  
 2 10141/2 褐色土 粘性なし、しまりなし、3m以下の層はV層とA層褐色土を少許混じる

KP-61



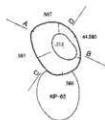
1 1019A/B 褐色土 粘性なし、しまりなし、3m以下の層褐色土ブロック、3gHを若干混じる

KP-62



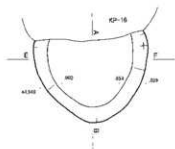
1 1019A/B 褐色土 粘性なし、しまりなし、3gH (3m以下) を多く混じる  
 2 1019A/B 黄褐色土 粘性なし、ややしまりあり 3m以下のV層ブロックを若干混じる

KP-63



1 1019A/B 褐色土 粘性なし、しまりなし、3m以下のV層を十層混じる  
 2 1019A/B 褐色土 粘性なし、しまりなし、3m以下の層はA層とブロックを少許混じる  
 3 1019B 粘り質褐色土 粘性なし、ややしまりあり 3m以下の黄褐色土ブロックを多く混じる

KP-64



1 1019A/B 黄褐色土 粘性なし、ややしまりあり 1m以下のV層を若干混じる



図II-32 土坑19



**時 期** 不明であるが、周囲で検出されている遺構から、縄文時代晩期のものである可能性が高い。

**KP-66 (図Ⅱ-33 表Ⅱ-6 図版Ⅱ-40)**

**位置** M、N-35 **規模** 0.86×0.75/0.44×0.42/0.18

**調 査** V層上面を精査中に、汚れた褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みの中心を通るように南西部分を半截すると、明瞭な壁、坑底を確認することができた。このことから、この落ち込みを土坑と判断した。平面形は歪な円形を呈し、坑底は細かな起伏があり平坦ではない。壁は概ね緩やかである。

**堆 積 土** 2層に分層した。上位から褐色土と暗褐色土のレンズ状の堆積であるが、両者との黄褐色土ブロック、焼土粒子、炭化物が多く混じっており、埋め戻しの状況を呈している。覆土2層中には焼土が検出されている。

**遺 物** 出土していない。

**時 期** 不明であるが、周囲の遺物出土状況から、縄文時代中期の可能性はある。

**KP-67 (図Ⅱ-33 表Ⅱ-6 図版Ⅱ-40)**

**位置** H、I-41 **規模** 0.84×0.76/0.55×0.50/0.22

**調 査** V層上面を精査中に、黒色土の落ち込みを確認した。中心を通るように西側を半截したところ、明瞭な壁、坑底を確認したため、土坑であると判断した。平面形は円形、坑底は細かい起伏があるが概ね平坦である。坑底と壁は緩やかにつながり、壁は坑口に近づくに従い角度が急になっている。

**堆 積 土** 4層に分層した。1層は自然堆積。2層以下は暗褐色土、黄褐色土ブロックが混じる人為的埋め戻しの堆積とみられる。

**遺 物** 出土していない。

**時 期** 不明であるが、付近の遺物出土状況から縄文時代中期あるいは晩期のいずれかとみられる。

**KP-68 (図Ⅱ-33 表Ⅱ-6 図版Ⅱ-40)**

**位置** H-40 **規模** 0.48×0.42/0.24×0.24/0.07

**調 査** V層上面を精査中に、黒褐色土の落ち込みを確認した。西側を半截した結果、明瞭な坑底を確認できたため、土坑と判断した。平面形は不整な楕円形。壁は緩やかであるが、坑底は起伏がありでこぼこである。

**堆 積 土** 黄褐色土のブロック、炭化物が混じる黒褐色土1層である。

**遺 物** 出土していない。

**時 期** 不明であるが、土坑の形態、周囲の遺物出土状況から、縄文時代晩期のものである可能性が高い。

**KP-69 (図Ⅱ-28 表Ⅱ-6 図版Ⅱ-40)**

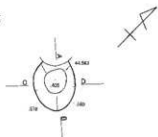
**位置** G-42 **規模** 0.70×(0.22)/0.40×(0.12)/0.16

**調 査** IV層を調査中、歪な円形を呈する黒褐色土の落ち込みを確認した。単独の遺構と考え、南西側を半截し、記録を作成した。その後、西側半分を調査したが、坑底を2段確認したため、2遺構が切り合っているものと判断した。そのうち古いものが本遺構である。

**堆 積 土** 残存している部分を2層に分層した。1、2層ともに黄褐色土ブロックが混じる埋め戻しとみられる堆積である。

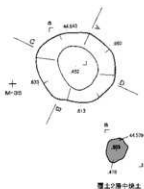
II 柏木川4遺跡の調査

KP-65



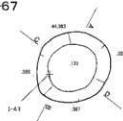
- 1 10761-1 黒褐色土 粘りなし、しまりなし  
 2 10761-2 緑褐色土 粘りなし、しまりなし 5cm以下の黄褐色土ブロックを多数含む

KP-66



- 1 10734-1 褐色土 粘りなし、しまりなし 5cm以下の黄褐色土ブロックを多く含む。焼土片を少量含む  
 2 10734-2 緑褐色土 粘りなし、しまりなし 5cm以下の黄褐色土ブロックを多く含む。焼土片を少量含む

KP-67



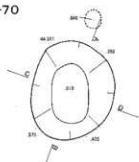
- 1 10762-1 黒褐色土 粘りなし、しまりなし 5cm以下のV層ブロックを多く含む  
 2 10762-2 黒褐色土 粘りなし、しまりなし 5cm以下のV層ブロックを多く含む  
 3 10762-3 緑褐色土 粘りなし、しまりあり 5cm以下の緑褐色土を多く含む  
 4 10762-4 黒褐色土 粘りなし、しまりあり 5cm以下の緑褐色土を多く含む

KP-68



- 1 10762-2 黒褐色土 粘りなし、しまりなし 5cm以下の褐色土・V層ブロックを多数含む

KP-70



- 1 10762-1 黒褐色土 粘りなし、しまりなし 5cm以下のV層ブロックを多く含む  
 2 10762-2 黒褐色土 粘りなし、しまりなし 5cm以下のV層ブロックを多く含む  
 3 10762-3 黒褐色土 粘りなし、しまりなし 5cm以下のV層ブロックを多く含む  
 4 10762-4 黒褐色土 粘りなし、しまりなし 5cm以下のV層ブロックを多く含む  
 5 10762-5 黒褐色土 粘りなし、しまりあり 5cm以下のV層ブロックを多く含む

○ = 遺土の層中出土



図II-33 土坑⑩

**形態** 残存している部分は楕円形を呈する。  
**遺物** 出土していない。  
**時期** 不明であるが、土坑の形態、周囲の遺物出土状況から、縄文時代晩期のものである可能性が高い。

**KP-70 (図Ⅱ-33 表Ⅱ-6、7 図版Ⅱ-41)**

**位置** G-42 **規模** 1.06×0.88/0.63×0.40/0.34

**調査** Ⅲ層を調査中、黒色土の落ち込みを確認した。長軸にあわせてトレンチを設定し、V層まで掘り下げたところ、明瞭な壁を確認した。このため落ち込みを土坑と判断することにした。平面形は楕円形、坑底は小さな平坦面があり、壁は緩やかに連続し、断面形は碗状を呈している。

**堆積土** 5層に分層した。1から3層は自然堆積とみられる土。4、5層は地山のブロックが混じる埋め戻しとみられる堆積である。

**遺物** 覆土1層と4層から、V群土器が1点ずつ出土している。

**時期** 付近で検出される遺構、土層堆積状態の類似から、縄文時代晩期のもものとみられる。

**KP-71 (図Ⅱ-34 表Ⅱ-6、8 図版Ⅱ-41)**

**位置** F-41、42 **規模** 0.79×0.68/0.48×0.52/0.36

**調査** IV層上面で遺構確認中、黒褐色土の落ち込みを確認した。南側を半截したところ、明瞭な壁、坑底を確認したため、土坑であると判断した。平面形は角のある卵形を呈している。坑底は概ね平坦で壁は急である。

**堆積土** 4層に区分した。1、3層は自然堆積。2層は付近の遺構の掘上土とみられるもの。4層は本来の覆土で、炭化物の混じる暗褐色土である。埋め戻しとみられる。

**遺物** 覆土1層から礫が1点出土している。

**時期** 周囲で検出される遺構から、縄文時代晩期のもものとみられる。

**KP-72 (図Ⅱ-34、38 表Ⅱ-6～10 図版41、48)**

**位置** G-41 **規模** 0.44×0.42/0.46×0.24/0.18

**調査** IV層上面で遺構確認中、黒色土の落ち込みを検出した。中心にかかるように南西側を半截したところ、明瞭な壁、坑底を確認したため、土坑であると判断した。平面形は円形。坑底は平坦で壁は急である。

**堆積土** 3層に分層した。1層は自然堆積。2、3層は黄褐色土ブロックが混じる、黒褐色土、暗褐色土で、埋め戻しとみられるものである。

**遺物** 検出面で落ち込みのほぼ中央付近で遺物の小規模なまとまりがあった。VI群土器7点、V群土器29点、たたき石1点である。このほか覆土中からは覆土2層からV群土器が1点、フレイクが1点、覆土3層から、Ⅲ群土器が1点出土している。1は検出面出土のVI群の鉢である。口縁下には縄線が2条その下に棒状工具による刺突列がつく。地文は条が横走気味になるLR斜行縄文である。2はたたき石。棒状の礫を用いたもの。敲打痕は中心からずれた平坦な2面にわたっており、明瞭ではあるが範囲は狭い。

**時期** 周囲の遺構検出状況、上面で出土した遺物から、縄文時代晩期のもものとみられる。

**KP-73 (図Ⅱ-34 表Ⅱ-6 図版Ⅱ-42)**

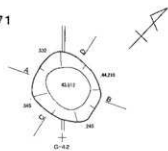
**位置** 44ライントレンチ **規模** 1.56×1.24/1.14×0.77/0.20

**調査** IV層上面で遺構確認中、黒褐色土の落ち込みを検出した。短軸を軸として南西側を半截したところ、明瞭な坑底を確認することができた。このため、この落ち込みを遺構と判断することに



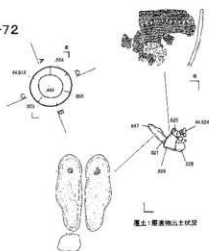
II 柏木川4遺跡の調査

KP-71



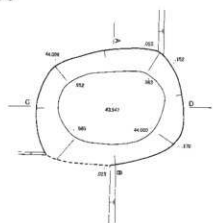
- |   |         |     |      |         |                         |
|---|---------|-----|------|---------|-------------------------|
| 1 | 10181-1 | 黄砂土 | 粘質なし | しまりなし   | 1m以下の $\mu$ 2ス軟弱土層に     |
| 2 | 10181-2 | 黄砂土 | 粘質なし | しまりなし   | 3m以下の黄褐色土ブロック・灰色物を含まない  |
| 3 | 10181-3 | 黄砂土 | 粘質なし | しまりなし   | 1m以下の $\mu$ 2ス軟弱土層に     |
| 4 | 10181-4 | 黄砂土 | 粘質なし | ややしまりあり | 5m以下の $\mu$ 2ス・灰色物を含まない |

KP-72



- |   |         |     |      |       |                        |
|---|---------|-----|------|-------|------------------------|
| 1 | 10181-1 | 黄砂土 | 粘質なし | しまりなし | 1m以下の $\mu$ 2ス軟弱土層に    |
| 2 | 10181-2 | 黄砂土 | 粘質なし | しまりなし | 3m以下の黄褐色土ブロック・灰色物を含まない |
| 3 | 10181-3 | 黄砂土 | 粘質なし | しまりなし | 3m以下の黄褐色土ブロック・灰色物を含まない |

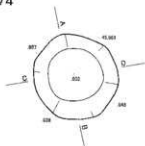
KP-73



- |   |         |     |      |         |                     |
|---|---------|-----|------|---------|---------------------|
| 1 | 10181-1 | 黄砂土 | 粘質なし | しまりなし   | 5m以下の $\mu$ 2ス軟弱土層に |
| 2 | 10181-2 | 黄砂土 | 粘質なし | ややしまりあり | 5m以下の $\mu$ 2ス軟弱土層に |



KP-74



- |   |         |     |      |       |                     |
|---|---------|-----|------|-------|---------------------|
| 1 | 10181-1 | 黄砂土 | 粘質なし | しまりなし | 1m以下の $\mu$ 2ス軟弱土層に |
| 2 | 10181-2 | 黄砂土 | 粘質なし | しまりなし | 3m以下の $\mu$ 2ス軟弱土層に |
| 3 | 10181-3 | 黄砂土 | 粘質なし | しまりなし | 5m以下の $\mu$ 2ス軟弱土層に |



図II-34 土坑07

した。平面形は北東—南西方向に長軸のある隅丸方形を呈する。壁はきわめて緩やかで、断面は浅い皿状を呈する。

**堆積土** 2層に分層した。自然堆積の可能性が高い。

**遺物** 出土していない。

**時期** 覆土の色調、また検出面から、縄文時代中期のものである可能性が高い。

**KP-74 (図II-34 表II-6~10 図版II-42、48)**

**位置** 48ライトレンヂ **規模** 0.94×0.89/0.57×0.58/0.37

**調査** III層下部を調査中、黒色土の落ち込みを確認した。南西側を半截した結果、明瞭な壁、坑底を確認したため、土坑と判断した。平面形は円形。坑底は小さな平坦面があり、壁は緩やかにつながり坑口に近づくに従い急になっている。

**堆積土** 3層に分層した。1層は自然堆積とみられるもの。2、3層は埋め戻した結果とみられる黄褐色土ブロックが混じる土である。

**遺物** 検出面でV群土器43点、Rフレイク1点、フレイク3点、たたき石1点、礫1点が出土し、覆土1層からV群土器7点、軽石の礫が1点出土している。1は覆土から出土したV群c類土器の口縁部である。口縁下に3条の横走沈線が施されている。口唇が内傾する部分にR L斜行縄文が施文されている。2はたたき石。円礫の中央、周縁の一部に敲打痕がみられるもの。安山岩製である。

**時期** 検出面で出土した土器から、縄文時代晩期のもものとみられる。

**KP-75 (図II-35 表II-6 図版II-43)**

**位置** K-40 **規模** 0.63×0.60/0.32×0.32/0.23

**調査** V層上面を精査中、黒色土の落ち込みを確認した。南側を半截したところ、明瞭な壁、坑底が確認できたため、土坑であると判断した。平面形はほぼ円形を呈し、坑底と壁は緩やかに連続し、断面形は碗状を呈する。

**堆積土** 3層に区分した。すべて自然堆積の可能性のある土である。

**遺物** 出土していない。

**時期** 不明であるが、周囲の状況から縄文時代中期あるいは晩期のもものとみられる。

**KP-76 (図II-35 表II-6 図版II-43)**

**位置** K-40 **規模** 0.84×0.77/0.54×0.42/0.28

**調査** V層上面を精査中、黒褐色土の落ち込みを検出した。長軸にあわせて南側を半截したところ、明瞭な坑底、壁を確認したため、この落ち込みを土坑であると判断した。坑底は小さな平坦面があり、壁は緩やかに連続し、坑口に近づくに従いやや急になっている。

**堆積土** 5層に分層した。1、3層は自然堆積。2、4層は成因不明であるが、流れ込みとみられる堆積である。5層は黄褐色土ブロックが混じる暗褐色土の堆積で、埋め戻しとみられるものである。

**遺物** 出土していない。

**時期** 土層堆積状態の類似から、縄文時代晩期のものである可能性が高い。

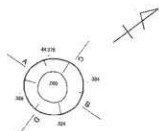
**KP-77 (図II-35 表II-6 図版II-43)**

**位置** G-35 **規模** 0.82×0.06/0.78×0.05/0.22

**調査** V層上面において、染み抜き作業中、不自然な溝状の落ち込みを確認した。形状の類似からKP-27、28と同様の遺構と考え、土坑と認識し、完掘状態の記録をとることにした。平面形は角のある細長い溝状を呈し、坑底はややでこぼこしているが概ね平坦である。壁は坑底から直立している。

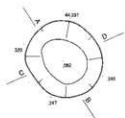
II 柏木川4遺跡の調査

KP-75



- |                 |      |       |                |
|-----------------|------|-------|----------------|
| 1 100E.1.1 黒色土  | 粘質なし | しまりなし | 1m以上のV字状で中心部平坦 |
| 2 100E.1.2 黒褐色土 | 粘質なし | しまりなし | 1m以下のV字状で中心部平坦 |
| 3 100E.1.4 黒色土  | 粘質なし | しまりなし | 3m以下の緩斜面で底平直   |

KP-76



- |                 |      |       |                       |
|-----------------|------|-------|-----------------------|
| 1 100E.1.1 黒色土  | 粘質なし | しまりなし | 1m以下のV字状で中心部平坦        |
| 2 100E.1.2 黒褐色土 | 粘質なし | しまりなし | 緩斜面でトップ (1m以下) で平直    |
| 3 100E.1.3 黒色土  | 粘質なし | しまりなし | 1m以上のV字状で中心部平坦        |
| 4 100E.1.4 黒褐色土 | 粘質なし | しまりなし | 緩斜面でトップ (1m以下) で平直    |
| 5 100E.1.5 黒褐色土 | 粘質なし | しまりなし | V字状でトップ (1m以下) を平直にする |

KP-77



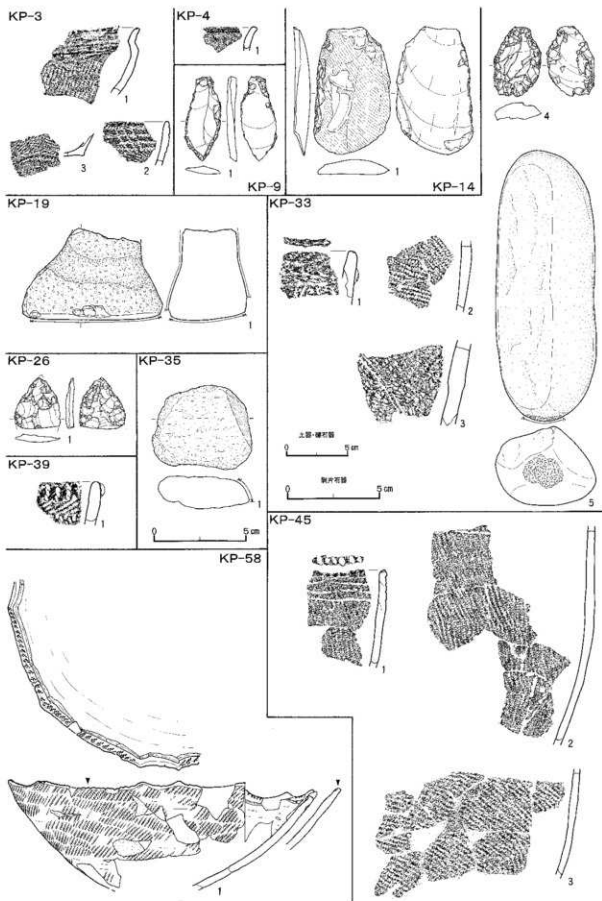
KP-78



- |                |      |         |              |
|----------------|------|---------|--------------|
| 1 100E.1.4 黒色土 | 粘質なし | ややしまりあり | 1m以下のV字状で底平坦 |
|----------------|------|---------|--------------|

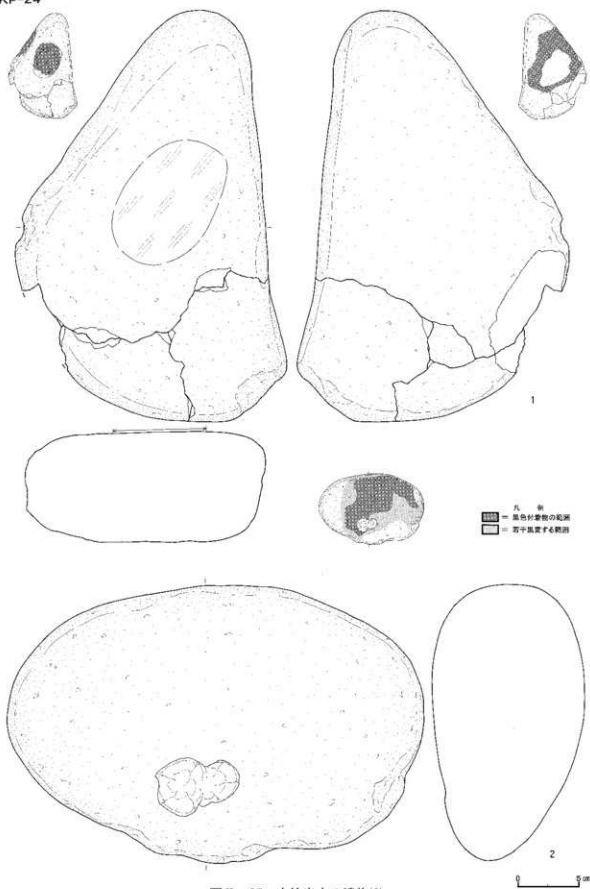


図II-35 土坑(節)

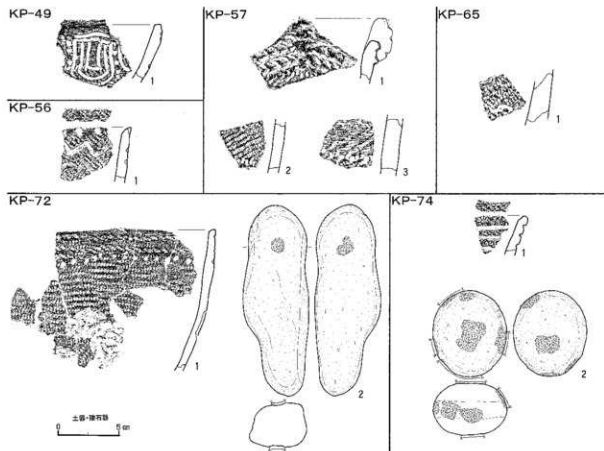


図II-36 土坑出土の遺物(1)

KP-24



図II-37 土坑出土の遺物(2)



図Ⅱ-38 土坑出土の遺物(3)

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、類例から縄文時代中期から後期にかけてのものである可能性が高い。

KP-78 (図Ⅱ-35 表Ⅱ-6 図版Ⅱ-43)

位置 G、H-34 規模  $0.90 \times 0.08 / 0.87 \times 0.02 / 0.16$

調査 KP-77の検出を契機とし、付近のV層上面を精査していたところ、KP-77の南方約6mの地点において、同様な落ち込みを確認した。すでに染み抜きを終えた地区であったが、覆土が幾分残っていたため、記録を作成し、完掘状態を作図した。平面形は溝状を呈する。横断面は先細の針状であり、断面は南側がくぼむが北側に向かって傾斜がゆるくなっている。この形状から、掘りかけて放棄されたものかもしれない。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、類例から縄文時代中期から後期にかけてのものである可能性が高い。

(4) 焼土

K F-1 (図II-19、41 表II-6、8、10 図版II-51)

位置 P-24 規模 0.40×0.20/0.08

調査 KP-7の調査中、東肩の付近で焼土を確認した。土層断面の観察から、KP-7に切られ、Ⅲ層下部で形成された焼土であることがわかった。平面形は歪な楕円形。

堆積土 1層に分層した。橙色土の比較的良く焼けた焼土である。

遺物出土状況 上面でたたき石が1点出土している。

遺物 1は上部を欠損するが、棒状の礫の一端に敲打痕のあるものである。泥岩製。

時期 不明であるが、検出面、付近の遺物出土状況から考えると、縄文時代中期のものである可能性が高い。

K F-2 (図II-39 表II-6)

位置 G-28 規模 0.28×0.22/0.42

調査 Ⅲ層を掘削中に検出した。焼土下の遺構の有無を確認するため、トレンチを設定し、V層まで掘り下げたが、遺構と思われる層位の変化は確認できなかった。平面形は概ね円形を呈している。色調ははっきりしているが、層界は不明瞭である。

堆積土 1層に分層した。炭化物の混じる明黄褐色土である。

遺物出土状況 出土していない。

時期 付近で出土する遺物から、縄文時代前期後半の時期である可能性が高い。

K F-3 (図II-39 表II-6、8 図版II-49)

位置 G-28 規模 0.48×0.40/0.52

調査 Ⅲ層の調査中に確認した。焼土下に遺構の有無を確認するため、トレンチを設定し、V層まで掘り下げたが、遺構と思われる層位の変化は確認できなかった。色調は明瞭であるが、層界は不明瞭である。

堆積土 1層に分層した。炭化物が若干混じる、明黄褐色土である。

遺物出土状況 上面で安山岩の礫片が2点出土している。

時期 付近で出土する遺物から、縄文時代前期後半の時期である可能性が高い。

K F-4 (図II-39 表II-6 図版II-49)

位置 G-28 規模 0.60×0.50/0.38

調査 Ⅲ層下部を調査中に確認した。焼土下に遺構の有無を確認するため、トレンチを設定してV層まで掘り下げた。しかし遺構と思われる層位の変化は確認できなかった。色調は明瞭であるが、層界は不明瞭である。

堆積土 1層に分層した。炭化物が若干混じる明黄褐色土である。

遺物出土状況 上面で、安山岩の礫片が1点出土している。

時期 付近で出土する遺物から、縄文時代前期後半の時期である可能性が高い。

K F-5 (図II-39 表II-6 図版V-49)

位置 G-28 規模 0.26×0.23/0.21

調査 Ⅲ層調査中に確認した。焼土下に遺構の有無を確認するため、トレンチを設定してV層まで掘り下げた。しかし遺構と思われる層位の変化は確認できなかった。平面形はほぼ円形を呈する。

堆積土 1層に分層した。焼土粒子がモザイク状に混じり、層界が明瞭であることから、形成された場所から動いた焼土とみられる。

遺物出土状況 出土していない。

時期 付近で出土する遺物から、縄文時代前期後半の時期である可能性が高い。

K F-6 (図Ⅱ-39 表Ⅱ-6 図版Ⅱ-49)

位置 G-28 規模 0.52×0.18/0.43

調査 Ⅲ層を調査中に確認した。色調がやや不明瞭であったことから、トレンチを設定し、V層まで掘り下げたところ、断面に明瞭な層位の変化を確認したことから、焼土であると判断した。

堆積土 1層に分層した。層界はやや明瞭で、炭化物、赤色顔料らしき粒子が混じっている。

遺物出土状況 出土していない。

時期 付近で出土する遺物から、縄文時代前期後半の時期である可能性が高い。

K F-7 (図Ⅱ-39 表Ⅱ-6)

位置 I-24 規模 0.15×0.11/0.32

調査 Ⅲ層を掘削中に確認した。焼土下に遺構の有無を確認するため、トレンチを設定してV層まで掘り下げた。しかし遺構と思われる層位の変化は確認できなかった。平面形は概ね円形を呈し、色調は明瞭であるが、層界は不明瞭である。

堆積土 1層に分層した。炭化物が極少量混じる、黄橙色土の堆積である。

遺物出土状況 出土していない。

時期 不明であるが、検出層位から縄文時代晩期ごろのものである可能性が高い。

K F-8 (図Ⅱ-39 表Ⅱ-6)

位置 J-24 規模 0.13×0.16/0.34

調査 Ⅲ層を掘削中に確認した。焼土下に遺構の有無を確認するため、トレンチを設定してV層まで掘り下げた。しかし遺構と思われる層位の変化は確認できなかった。平面形は円形を呈する。色調は明瞭ではあるが、層界は不明瞭である。

堆積土 1層に分層した。炭化物が少量混じる、黄橙色土の堆積である。

遺物出土状況 出土していない。

時期 不明であるが、検出層位から縄文時代晩期ごろのものである可能性が高い。

K F-9 (図Ⅱ-39 表Ⅱ-6、8 図版Ⅱ-49)

位置 G-29 規模 0.20×0.16

調査 Ⅲ層下部を調査中に、炭化物と礫片が集中している場所を検出した。中心を通るようにトレンチを設定して、層位を確認したが、焼土とみられる堆積は確認できなかった。炭化物を伴っているため、広義に焼土と解釈し、K F-9の番号を付し、記録をとることにした。遺構の外形線は炭化物の広がりを示している。

遺物出土状況 砂岩の礫片が2点、検出面から出土している。

時期 不明であるが、検出層位から縄文時代前期後半以前の時期である可能性が高い。

K F-10 (図Ⅱ-39 表Ⅱ-6)

位置 K-41 規模 0.34×0.32/0.06

調査 IV層上面を精査中に検出した。焼土下の遺構の有無を確認するため、トレンチを設定してV層まで掘り下げた。しかし遺構らしき層位の変化を確認できなかった。平面形は概ね円形を呈する。色調、層界ともにやや明瞭である。

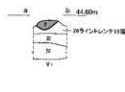
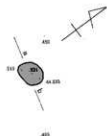
堆積土 1層に分層した。パミスの若干混じる橙色土の堆積である。

遺物出土状況 出土していない。

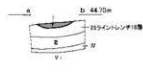
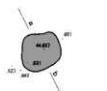


II 柏木川4遺跡の調査

KF-2

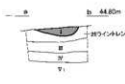
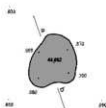


KF-3

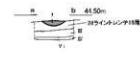


KF-2 | 1979/9 調査発掘土 粘質なし、しまりなし、炭化物を若干含む、磁器・中硬質、地味  
 KF-3 | 1976/9 調査発掘土 粘質なし、しまりなし、炭化物を若干含む、磁器・中硬質、地味

KF-4

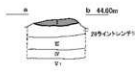


KF-5

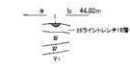


KF-4 | 1976/9 調査発掘土 粘質なし、しまりなし、炭化物を若干含む、磁器・中硬質、地味  
 KF-5 | 1975/9 調査土 粘質なし、しまりなし、炭化物・褐色炭粉を若干含む、軟い焼土

KF-6

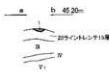


KF-7

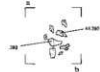
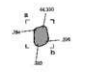


KF-6 | 1976/9 調査発掘土 粘質なし、しまりなし、炭化物・褐色炭粉を少量含む、砂質を多く含む  
 KF-7 | 1977/9 調査発掘土 粘質なし、しまりなし、炭化物をごく少量含む

KF-8



KF-9

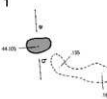


KF-8 | 1980/9 調査発掘土 粘質なし、しまりなし、炭化物を少量含む

KF-10



KF-11



KF-10 | 1977/9 調査土 粘質なし、ややしまりあり、1m以下の1/1.5倍に広がる、磁器・中硬質  
 KF-11 | 1980/9 調査発掘土 粘質なし、しまりなし、磁器・不明



図II-39 焼土(1)

時期 検出層位、周囲における遺物出土状況から、縄文時代中期のものとみられる。

K F-11 (図Ⅱ-39、41 表Ⅱ-6、7、9 図版Ⅱ-50、51)

位置 C-38 規模 0.25×0.15/0.06

調査 Ⅲ層を調査中に検出した。西側に隣接して土器の集中域が検出されている。図中に点線で表現した。平面形は楕円形を呈する。色調は明瞭ではあるが、層界は不明瞭である。

堆積土 明黄褐色土1層の堆積である。

遺物出土状況 焼土の西側に隣接してV群土器が41点出土している。

遺物 1、2はV群c類土器。1はRL斜行縄文上に櫛歯状の2～4本単位の沈線を縦位、斜位に施文することにより文様が描かれるもの。口唇は指頭状の工具による刻みが施され、小刻みな波状を呈する。2は口縁下の無文面上に3条の横走沈線がめぐらされているもの。地文はRL斜行縄文が縦位気味に施文されている。口縁は波状を呈し、端部には篋状工具による刻みが施されている。

時期 検出面で出土した土器から、縄文時代晩期後半のものとみられる。

K F-12 (図Ⅱ-40 表Ⅱ-6 図版Ⅱ-49、50)

位置 D-38 規模 0.22×0.20/0.07

調査 Ⅲ層を掘削中に確認した。平面形は円形、色調は明瞭であるが、層界は不明瞭である。

堆積土 明黄褐色土1層の堆積である。

遺物出土状況 出土していない

時期 不明であるが、検出層位、周辺の遺物出土状況から、縄文時代晩期のものである可能性が高い。

K F-13 (図Ⅱ-40 表Ⅱ-6)

位置 K-42 規模 0.34×0.24/0.20

調査 V層上面を精査中に確認した。焼土は黒褐色土を混じていたが、広がりか明瞭であったため、遺構として半載して記録を作成した。V層で形成されているにもかかわらず、覆土にⅢ層相当とみられる黒褐色土が含まれていることなど、不自然な点があるため、覆土により壊された焼土である可能性が高い。

堆積土 1層に分層した。黒褐色土が混じる明黄褐色土である。

遺物出土状況 出土していない。

時期 不明であるが、周囲で出土する遺物、土層の状態から考えると、縄文時代中期に作られたものである可能性がある。

K F-14 (図Ⅱ-40 表Ⅱ-6)

位置 K-42 規模 0.38×0.36/0.13

調査 IV層上面で遺構確認中に検出した。焼土下の遺構の有無を確認するためトレンチを設定し、V層まで掘り下げたが、遺構らしき層位の変化は認められなかった。色調、層界とも明瞭である。

堆積土 1層に分層した。バミスが若干混じる明褐色土である。

遺物出土状況 出土していない。

時期 検出面、周囲の遺物出土状況から、縄文時代中期のものとみられる。

K F-15 (図Ⅱ-40 表Ⅱ-6)

位置 J-42 規模 0.40×0.32/0.04

調査 IV層上面において遺構確認中に検出した。平面形はやや歪な円形、色調、層界とも明瞭

II 柏木川4遺跡の調査

KF-12



KF-12 1 30787.0 焼土質土 粘性なし、しまりなし、磁器片少量  
 KF-13 1 30788.0 焼土質土 粘性なし、しまりなし、灰層土を混じる

KF-13



KF-14

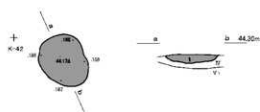


KF-15



KF-14 1 30789.0 焼土質土 粘性なし、ややしまりあり、パイス石多量、磁器片少量  
 KF-15 1 30790.0 焼土質土 粘性なし、ややしまりあり、5cm以下の1.5A粒多量、磁器片少量

KF-16

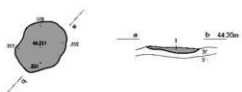


KF-17



KF-16 1 7 30791.0 焼土質土 粘性なし、しまりなし、磁器片を少量含む、磁器片少量  
 KF-17 1 30792.0 焼土質土 粘性なし、しまりなし、磁器片を多く含む、磁器片を中量含む

KF-18



KF-19



KF-18 1 7 30793.0 焼土質土 粘性なし、ややしまりあり、1cm以下のパイスを多量含む  
 KF-19 1 7 30794.0 焼土質土 粘性なし、しまりなし、磁器片(ブロック10cm以下)を多量含む、磁器片少量



図II-40 焼土(2)

である。

**堆積土** 1層に分層した。バミスの若干混じる褐色土である。

**遺物出土状況** 出土していない。

**時期** 検出面、周囲の遺物出土状況から、縄文時代中期のものとみられる。

**K F-16 (図Ⅱ-40 表Ⅱ-6 図版Ⅱ-50)**

**位置** J、K-42 **規模** 0.60×0.50/0.14

**調査** IV層上面を遺構確認中に検出した。焼土下の遺構の有無を確認するため、トレンチを設定してV層まで掘り下げた。しかし、遺構とみられる層位の変化は確認できなかった。平面形は歪な楕円形を呈する。色調は明瞭だが、層界は不明瞭である。

**堆積土** 1層に分層した。暗褐色土が若干混じる褐色土である。

**遺物出土状況** 出土していない。

**時期** 検出面、周囲の遺物出土状況から、縄文時代中期のものとみられる。

**K F-17 (図Ⅱ-40 表Ⅱ-6)**

**位置** L-41、42 **規模** 0.50×0.46/0.10

**調査** IV層上面で遺構確認中に検出した。焼土下の遺構の有無を確認するため、半截の後V層まで掘り下げたが、遺構らしき層位の変化は認められなかった。色調は明瞭だが、層界はやや不明瞭である。

**堆積土** 1層に分層した。暗褐色土が多く混じる、明黄褐色土である。

**遺物出土状況** 出土していない。

**時期** 検出面、周囲の遺物出土状況から、縄文時代中期のものとみられる。

**K F-18 (図Ⅱ-40 表Ⅱ-6)**

**位置** M-41 **規模** 0.59×0.46/0.60

**調査** IV層上面を遺構確認中に検出した。焼土下の遺構の有無を確認するため、半截した後V層まで掘り下げたが、遺構らしき層位の変化は確認できなかった。平面形は歪な楕円形、色調は明瞭で層界はやや不明瞭である。

**堆積土** 1層に分層した。バミスが若干混じる褐色土である。

**遺物出土状況** 出土していない。

**時期** 検出面、周囲の遺物出土状況から、縄文時代中期のものとみられる。

**K F-19 (図Ⅱ-40 表Ⅱ-6 図版Ⅱ-50)**

**位置** G-41 **規模** 0.38×0.32/0.10

**調査** III層下部を調査中に確認した。焼土下の遺構の有無を確認するため、半截した後IV層下部まで掘り下げたが、遺構らしき層位の変化は認められなかった。平面形は歪な楕円形、色調はやや明瞭、層界は不明瞭である。

**堆積土** 1層に分層した。暗褐色土ブロックの混じる明褐色土の堆積である。

**遺物出土状況** 出土していない。

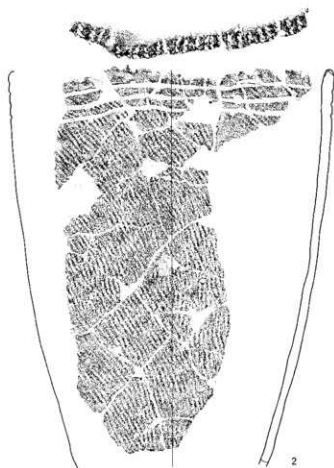
**時期** 検出した層位、周囲で出土している遺物から、縄文時代晩期のものとみられる。

KF-1



0 5 cm

KF-11



0 5 cm

図II-41 焼土出土の遺物

## (5) 土器集中・集石

## 土器集中1 (図Ⅱ-42、44 表Ⅱ-6、7、9 図版Ⅱ-52、55)

位置 G-28

**調査** Ⅲ層上面を調査中土器片のまとまりを検出した。付近を精査すると、土器片は約50cm四方に広がっており、状態から1個体分の土器であることが予想された。焼土KF-2が隣接していたが、包含層中の土器集中と考え、調査することにした。

**遺物出土状況** 破片は中心ほど大きく、周辺に行くほど細かい破片になっている。おそらく地表に長く露出していた結果、破片が散らばったものと推察される。

**遺物** 1はⅡ群b-2類土器である。ほぼ口縁から底部まで復元できた。やや筒型の器形で、口縁部に近づくに従いやすばまる。口縁端部に平坦面が作られるが、こまかい起伏があり平縁をなしていない。縄文はやや条の間隔の開くRL斜行縄文が表面は底部まで、内面は口縁内側のみ施文されている。胎土に繊維を多く含み、器壁は厚い。

**時期** 復元された土器から、縄文時代前期後半と考えられる。

## 土器集中2・3 (図Ⅱ-42、44 表Ⅱ-6、7、9 図版Ⅱ-55)

位置 G-28

**調査** 土器集中1から南に約1.5mのところ、Ⅲ層調査中に検出した。土器片の色調から、土器集中1と同一個体とみられたが、距離がやや離れていたため、2、3の番号を付し、記録した。2ヶ所とも、小片の小規模な集中である。

**遺物** 土器集中3は剥落が激しく不明瞭ではあるが、口縁部付近の破片とみられるものである。胎土の類似、また内面の縄文からⅡ群b-2類土器とみられる。表面の文様は不明であるが、内面にはLR斜行縄文が施文されている。胎土には繊維が帯状に混じり、焼成は良好である。

**時期** 出土した土器から、縄文時代前期後半のものとみられる。

## 集石1 (図Ⅱ-42、44 表Ⅱ-6、8、10 図版Ⅱ-52、53、56)

位置 G-29

**調査** Ⅲ層上面を調査中、円形を呈する礫の集中を検出した。礫は全部で26点あり、円錐上にまとまっている。集中の中心をとるようにトレンチを設け、V層まで掘り下げたが、掘り込みの痕跡は確認できなかった。

**遺物出土状況** 26点の安山岩の礫のうち、石器としたものは北海道式石冠が1点、その2分の1以下の破片が2点、礫の一部に擦痕のあるすり石が2点あった。集中から30cmほど北側に石斧が同一層から出土している。集石との関係は不明であるが、図化してある。

**遺物** 1は石斧。泥岩製。先端がわずかに欠損している。2はすり石。扁平な礫の表面に擦痕があるもの。3は石皿片。破片であるが、礫の平坦面に弱い擦痕が認められる。4～6は北海道式石冠。4は背面を、5は右側半分を、6は下半分をそれぞれ欠損する。2～6はすべて安山岩製である。

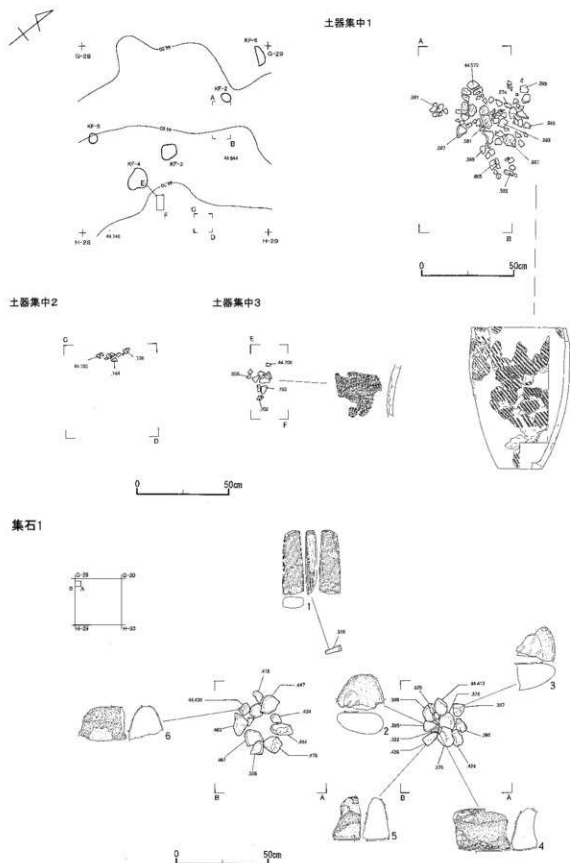
**時期** 北海道式石冠の存在と検出層位を考慮すると、縄文時代前期から中期後半にかけてのものとみられる。

## 土器集中4・集石2 (図Ⅱ-43、44 表Ⅱ-6、7、10 図版Ⅱ-54、55)

位置 C-38

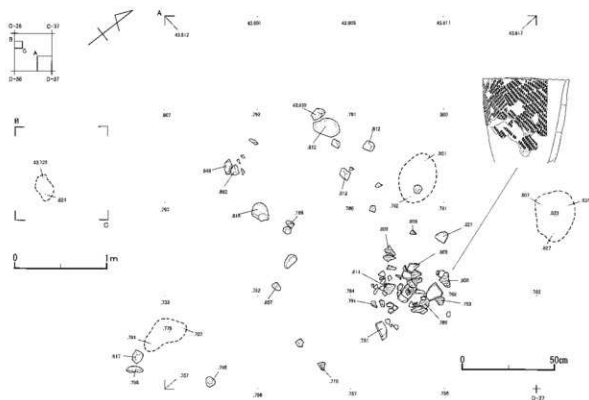
**調査** Ⅲ-4層とした、Ⅲ層下部を調査中、C-38区の西端約2㎡の範囲において、遺物の比較的散漫な集中を確認した。集中は土器の碎片と見られる土の集中が3ヶ所、D-37杭付近に土器の集中が1ヶ所、また周囲に安山岩の破片とみられる礫の広がりからなっていた。このうち、土器の集

II 柏木川4遺跡の調査



図II-42 土器集中1~3・集石1

## 土器集中4・集石2



図Ⅱ-43 土器集中4・集石2

中を土器集中4、礫の広がりを集石2として調査することにした。

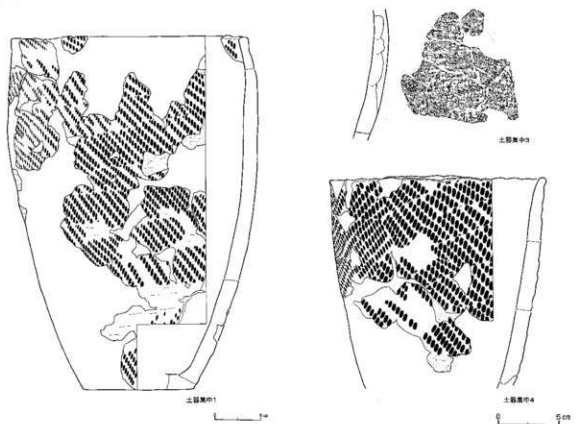
**遺物出土状況** 土器集中4においては土器片が比較的大きく、1ヶ所にまとまってつぶれた様相を呈している。集石2はすべて安山岩の礫片であった。打ち欠いている痕跡があるものはなく、被熱しているものもあるが、行為の意図は不明である。

**遺物** 1はⅡ群a類土器である。底部に欠損する。口縁はほぼ平縁でやや外反する。地文はR、L、LR原体による斜行縄文が半分ずつ深く施文されている。胎土には繊維が多く、砂粒が若干混じっている。

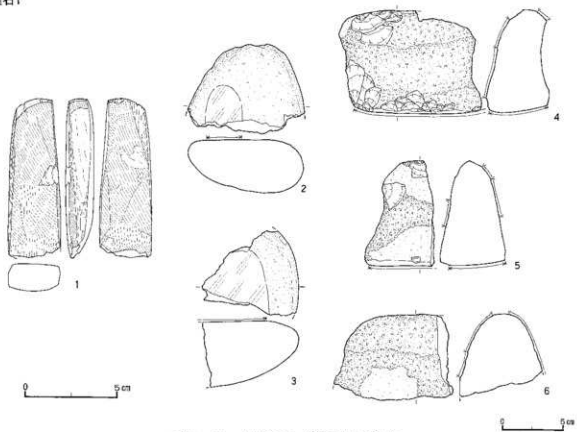
**時期** 出土している土器から、縄文時代前期前半のものと思われる。



土器集中1~4



集石1



図II-44 土器集中・集石出土の遺物

## 5 包含層出土の遺物

### Ⅰ 土器 (図Ⅱ-45~48・表Ⅱ-11、図版Ⅱ-59~65)

包含層から出土した土器は合計4,293点である。詳細は表Ⅱ-1のとおりであるが、縄文時代晩期の土器が2,716点と最も多く、ついで縄文時代中期の1,462点、前期87点と続いている。

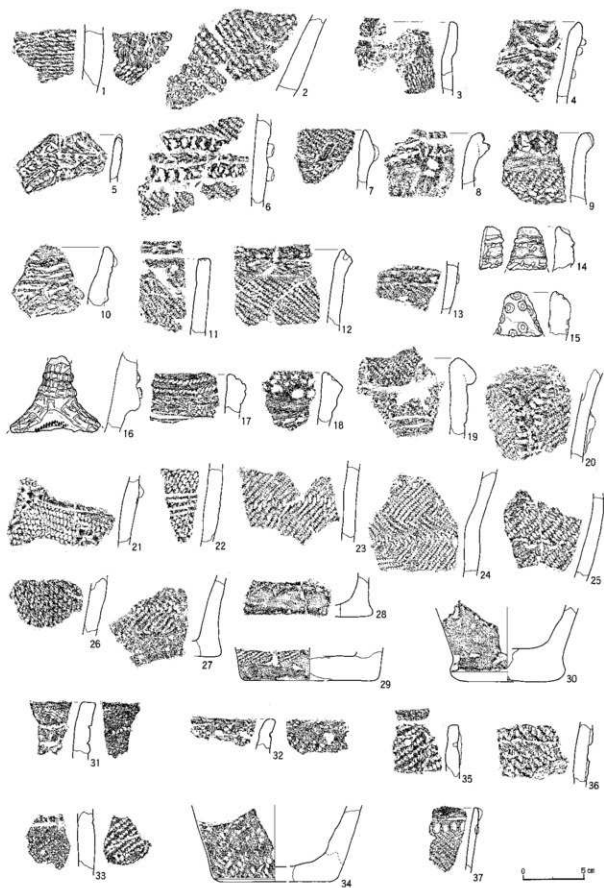
**Ⅱ群 a類 (1、2)** 1は無節の燃糸文が横位に裏面には斜位に施文される。2はやや粗いLR斜行縄文が施文される。両者とも胎土に多くの繊維が混じり、砂粒の混入はない。

**Ⅱ群 b類 (3)** 3は口縁部である。剥落が多く不明瞭ではあるが、口縁直下に段があり、口縁部は肥厚しやや外反している。体部には多軸絡条体が回転施文されている。

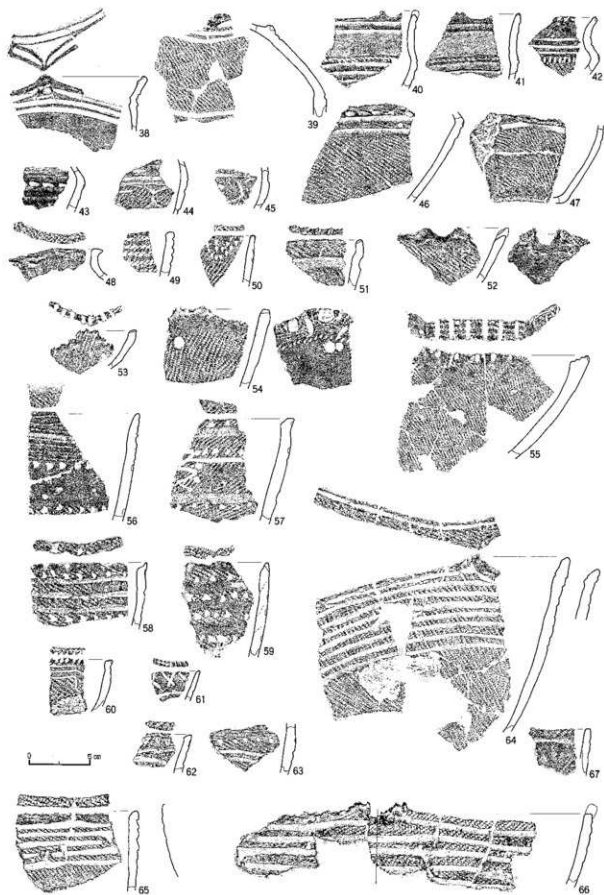
**Ⅱ群 b-2類 (31~34)** 胎土の類似により一括した。胎土には砂礫は含まれておらず、細い繊維状のものが混じり、加えて鉱物の小粒が少量混じっている。柏木川11遺跡などの類例から本群に含めた。類例の詳細、根拠などは後述する(Ⅱ章6 成果と問題点)。31、32は口縁部である。31はやや外反し、端部は平坦である。地文のLR斜行縄文が表裏両面に施文され、口縁下には2条の縄線がつけられている。32は外反する口縁端部のみである。口縁直下に縄線が1条つけられている。裏面にLR斜行縄文がつけられている。33は胴部片、表面はLR、裏面はRLの斜行縄文がつけられる。表面は地文施文後、器面調整され沈線が1条つけられている。34は底部である。LR斜行縄文が施文される。

**Ⅲ群 a類 (4~15)** 4~7は縄線のつく貼付帯による装飾がつけられるものである。4はやや大型の深鉢とみられ、貼付帯のほか、半截竹管状工具による刺突文がつけられ文様帯を構成している。5は小型の鉢。M字状の突起部分である。口縁に沿って2条、突起下には逆8の字に貼付帯がつけられ、各貼付帯間には半截竹管状工具による刺突が連続施文される。貼付帯上、口縁下の文様帯部には、3本一組の縄線により、刻み、押捺文が施されている。6は胴部片。2条のやや太い貼付帯が横走する。貼付帯上には体部に回転施文されるものと同じとみられるRL原体による刻みが施されている。7は切り出し状の断面を呈する口縁部。表面にはLR斜行縄文が施文され、口縁直下にはほとんど残っていないが、鋸歯状を呈するとみられる細い貼付帯がつけられている。貼付帯にはそれと平行に縄線がつけられている。8は突起付近とみられる破片である。口縁直下と突起下から垂下するよう貼付帯がつけられ、貼付帯上には縄線による刻み、垂下するものには半截竹管による刺突がつけられる。口縁下に9は端部が外反し、やや丸みを帯びる口縁部。口縁端部には縄線の押捺による刻みが施される。体部には結束第2種の縄文が施されている。10は突起部分、半截竹管状工具による沈線が横位に施文されている。11~13は半截竹管状工具による刺突文が連続して施文されているもの。11は口縁端部の平坦面に、12は外傾する口縁端部に、13は貼付帯上になされている。14、15は突起部分。14は貼付帯と篋状工具による刺突で装飾される。現存部分で2条の貼付帯が横位につけられ、そのふちは半截竹管状工具でなでつけられている。突起の頂部は指頭により押さえつけられたようなくぼみがある。15は円形の刺突文が無作為につけられるものである。

**Ⅲ群 b類 (16~21)** Ⅲ群土器のうち、文様、口縁部の形状が明らかなものを抽出した。16は棒状突起のつく口縁部。口縁は粘土紐により肥厚させている。突起部には2条の貼付帯が横位につけられ、突起から口縁部にかけて、半截竹管状工具による連続刺突文がつけられている。17、18は粘土紐貼付により肥厚させ、断面三角形に作られる口縁部。17は端部に縄線が平行に3条施されているもの。18は半截竹管状工具による刺突文が施文されるものである。19は突起付近の口縁部である。厚く肥厚させた口縁部には、斜行縄文が回転施文され、口縁下には横走する沈線が描かれている。20は突起下部とみられる。Y字状に貼付帯がつけられ、その貼付帯にそって篋状工具による刺突文が施文される。



図II-45 包含層出土の土器(1)



図II-46 包含層出土の土器(2)

体部にはL R斜行縄文が施文されるが、Y字の開いた部分には施文されていない。21は文様帯部分。半截竹管状工具を押し引いて文様がつけられている。地文はR L斜行縄文である。

III群 (22~30) 胴部片、底部片を一括した。22は半截竹管状工具による沈線が2条施文される。地文はR L斜行縄文である。23~26は胴部片、地文は23が結束第1種斜行縄文、24が結束第1種羽状縄文、25が結束第2種斜行縄文、26がR L R複節の原体を用いた斜行縄文である。27~30は底部片。27、28はやや外に張り出すもの。29はほぼ直立しているもの。30は円盤状の厚い底部に器壁がつけられるものである。地文がわかるものは27が結束第1種羽状縄文。29がL Rの斜行縄文である。いずれも底部付近は擦り消されている。

IV群 a類 (35、36) 35は口縁部。口唇に沿って、口唇に垂下する貼付体がつき、口唇直下には円形の刺突文がつけられている。貼付体上から地文であるL R斜行縄文が施文されている。36は横走する2条の貼付体をつけられる胴部片。貼付体上から粗いR L斜行縄文が施文されている。35、36ともに胎土に多量の砂粒が混入している。

V群 (38~93) V群土器は本遺跡で最も出土点数の多かった土器である。しかし断片的な資料が多く、時期もV群 a類~c類までの各時期のものがあるとみられる。しかし、各群のまとまりや細分すべき論拠を見出すことができなかったため、大洞系に類するとみられる土器群、また在地の土器の中では文様要素から明らかなものをV群 a類、b類として抽出し、それ以外のものを施文具の種類によって分けることにした。

V群 a類 (37) 37は口縁直下に1条の沈線がめぐり、その下に連続する爪形文が施文されるもの。口縁には一部粘土貼付の上肥厚させた部分がある。

大洞系・類大洞系土器群 (38~47) 大洞系もしくはそれに類するものとみられるものを一括した。これらの土器は胎土の上で斉性があるものである。その胎土は精製した粘土を使用しているとみられ、砂粒を混入せず、輝石あるいは角閃石の微細な粒子を若干含んでいる。この点において、砂粒や岩片を含む在地の土器とは異なっている。38は壺の頸部から口縁にかけての破片である。突起はA状を呈し、口縁は大きく外反している。頸部から口縁直下にかけて、横走する沈線が3条描かれ、突起下の部分には、小ぶりの突起が2ヶ所ついている。沈線は内面にも施され、頸部と口縁部の境に1条、突起に沿わせる形で1条つけられている。39は壺の胴部上半付近の破片である。棒状工具によるとみられる沈線が胴部と平行に1条、頸部直下とみられる場所に3条施されている。頸部直下の沈線のうち、最上部のものには沈線間に突起が作られる部分がある。58、59は接合していないが、同一個体と見られるもの。直立する頸部のある鉢とみられるものである。頸部は無文であるが、口唇、胴部には段差のある沈線状の文様が施されている。頸部と胴部の境にはL R原体が押捺される。突起はB状のような2対のものが口縁端部につけられている。42は鉢の頸部から口縁にかけての破片である。外反する口縁部の端部には篋状工具による刻みが斜位につけられている。頸部から胴部の境は「く」の字に屈曲し、頸部にかけては3条の平行沈線が、体部にかけてはR Lの斜行縄文が施文され、屈曲の頂部には篋状工具による刻みが施されている。43は胴部片、頸部との屈曲部にあるとみられる部分である。3条の沈線が横位に施され、屈曲の頂部直下に列点文が施文される。44も同様の文様が施文される。同一個体かもしれない。地文はR L斜行縄文が整然と施文される。45は底部付近。地文はやや細かいR L斜行縄文。平行沈線が1条めぐらされている。46は胴部片、雲形状の文様の一部とみられる文様がつけられている。区画された部分は磨消縄文となっている。47も同様な文様がつけられる。地文はR L斜行縄文である。

V群 b類 (49~51) 49は口縁部。縄線が5条つけられている。50は刺突文が円弧状に施文されるも

の。口唇端部には篋状工具による刻みが交互に施されている。51は口唇直下に指頭によるとみられる太い沈線が横走している。地文はR L斜行縄文が施文され、口唇端部は縄線による刻みが施される。

上記以外のV群(48、52~93) 48は壺の口縁部とみられるもの。壺はこの1点のみの出土である、大きく外反する口縁端部に平坦面が作られ、平坦面上にR L斜行縄文が施文されている。

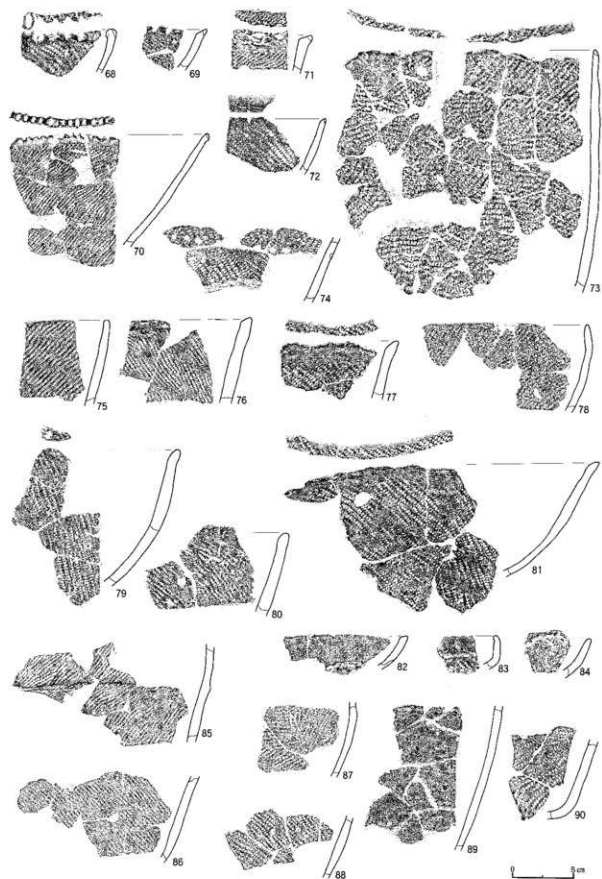
52~56、61は縄線、篋状工具による刺突、刻みで施文されるものである。

52、53は浅鉢の突起部分。52はM字状の突起部分である。裏面には突起の頂部から垂下する縄線が1条ずつつけられ、突起間以外の口唇端部にはR L斜行縄文が施文されている。53の突起は台形状で、突起部分を含めた口唇端部には縄線による刻みが施される。54は3本一組の縄線、縄端の圧痕、棒状工具による短い沈線を用い、口縁部内面に装飾が施されるものである。55は低い台形様の突起部分である。突起部分の平坦面には突起に平行な縄線が3条施され、それに直交する棒状工具による短い沈線が上書きされる。外面はR L斜行縄文が施文され、口縁部には突起部分の沈線間に対応するよう、棒状工具による刻みが施される。56は縄線、半截竹管状工具による刺突文が施文されるものである。口縁下には6条の横走縄線がつけられ、縄線の中央には棒状工具による沈線が1条めぐらせている。縄線の下位は幅広の無文帯であるが、その両端には半截竹管状工具による刺突文が等間隔で連続施文される。61は口縁直下に沈線によりX字状の文様が連続して描かれるもの。口唇端部の内面側には細い縄線による刻みが施されている。

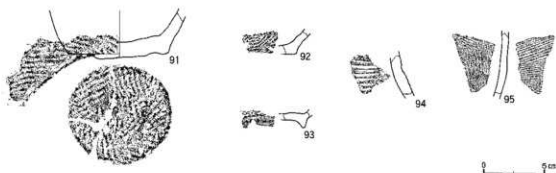
57~60、62、63は棒状工具による沈線。半截竹管状工具、円形工具による刺突文、または篋状工具による刻みが施文されるもの。57は幅広の沈線と棒状工具による沈線、半截竹管状工具による刺突文が平行に施文され、それらを分断する蛇行線文とそれに沿わせるように刺突文が施文されている。58は3条の平行沈線が半截竹管状工具による刺突文ではさまれているものである。口縁端部は内外面から交互に抑えられ、上面観は波状を呈している。口縁端部内面には地文であるR L斜行縄文が施文されている。59は地文であるR L斜行縄文に、沈線と刺突文の連続施文を交互に行っている。口縁端部は内外面から交互に押さえられ、上面観は波状を呈している。口唇部内面にも地文が施文されている。60、62小型の鉢。60は口唇端部を逆L字状に外反させ、外面から篋状工具による刻みが施される。口縁平坦面の頂部には縄線が平行につけられている。口唇直下から胴部上半にかけて、細い沈線により、直線を基調とした沈線が描かれる。62は口縁直下には浅い円形の刺突文が施文され、その下位には平行沈線が施文されている。端部には不明瞭であるがR L斜行縄文が施文されている。63は篋状工具による連続する刺突文がつけられるものである。

64~67は沈線により文様帯が描かれるものである。64は口縁直下から6条の平行沈線がつけられ、最も口縁に近い沈線は山形の突起にあわせて途切れ、突起の頂部に刺突がつけられている。口唇直下の内面にも沈線が1条めぐらされている。地文は縄の間隔のあいた縄縄文風のR L斜行縄文が全面にわたって縦向気味に施文されている。65、66は文様帯に沈線により工字文風の文様が描かれるもの。65は口縁端部にも、地文のR L斜行縄文が施文される。66は小ぶりな1対の突起がつくもの。突起間の外面には貼り付けによる小さな突起が付けられている。67は地文であるL R斜行縄文の上から、浅く平行沈線が施文されている。

68~74は篋状工具による刻み、あるいは刺突のみで施文されるもの。68は浅鉢。粘土を内面に巻き込むように整形された口縁部には棒状工具による刻みが施される。地文はR L斜行縄文である。69、70はR L斜行縄文を地文とし、口縁部内面にも施文される。69は口唇端部には篋状工具による斜位の刻みが施され、70は棒状工具による刻みが施されている。71は深鉢である。地文のL R斜行縄文が口縁部内面まで施文され、口縁は内外面から交互に押され、口唇の上面観は波状を呈している。72は



図II-47 包含層出土の土器(3)



図II-48 包含層出土の土器(4)

L R斜行縄文が施文される。口縁部直下は沈線状に擦り消され、端部には篋状工具による刻みが施されている。73の地文はR L斜行縄文。篋状工具による刻みが外面から施され、口縁部内面には不明瞭ではあるが、横位の縄線圧痕がみられる。74は鉢の胴部。棒状の工具による連続する刺突文が施文されている。

75～89は縄文のみ、もしくは無文のものである。

75～77は深鉢。75は地文がL R斜行縄文。口唇端部は平坦に整形される。76、77は口唇が切り出し状を呈する鉢。両者とも口縁部付近がなでられ、無文帯がつくられる。地文はR L斜行縄文。77には口縁内面にも施文される。78は薄手で内湾する器形を持つもの。L R斜行縄文が施文され、口唇はやや尖る。79、80は厚手で口縁が丸みを帯びる鉢。地文はR L斜行縄文。81は浅鉢。地文はR L斜行縄文で口唇にも施文され、口縁直下は擦り消されている。82～84は小型の鉢とみられるもの。82は無文。83は口縁部が擦り消されるもの。R Lとみられる縄文が施文された後、擦り消されている。85～89は鉢の胴部片である。85は段を有している。89は無文の鉢。口縁直下で割れているとみられる。

90～93は底部片。V群に相当するものすべて一括した。

90は地文のR L斜行縄文が底部付近まで施文されている。91は凸底を呈するもの。R L斜行縄文が底部にも施文される。92は平底。L R斜行縄文が施文される。93は高台のつくもの。

**VII群 (94、95)** この2点のみ出土している。94は壺の頸部とみられる。横走る沈線が施文されている。95は胴部片。刷毛目調整の後、磨かれている。



## 2 石器 (図Ⅱ-49~52・表Ⅱ-12、図版Ⅱ-65~68)

包含層から出土した石器の総点数は1,648点である。詳細は表Ⅱ-1のとおりであるが、フレイク、礫片を除いた石器の中ではスクレイパーが29点、石鏃が21点など、定形的な石器が多く出土している。フレイクが1,311点出土に対し、定形的な石器が多く出土する傾向は柏木川流域の遺跡において一般的な傾向である。

## 石鏃 (図Ⅱ-49-1~11)

15点出土している。1、2は三角形を呈するものである。この2点のみの出土である。1は側縁がやや張り出し、基部がえぐれている。茶色の縞の混じる黒曜石を用い、入念な細部調整がなされている。2は先端が欠損するもの。側縁が直線的に整形され、基部は浅分えぐれている。腹面は素材剥片の剥離面を残している。3は基部が円形を呈するもの。先端を欠損している。球果の混じる黒曜石を用い、入念な細部調整がなされる。4は菱形を呈するもの。この1点のみの出土している。半透明の黒曜石を用い、入念な細部調整がなされるが、腹面には素材となった剥片の剥離面が残っている。5は細身で柳葉形を呈するもの。粗い細部調整がなされ、やや厚手である。6~10は茎のあるもの。全部で7点出土している。6はかえしが不明瞭で、器体のやや長いものである。やや粗い細部調整がなされ、背面にヒンジによる段差があり、素材剥片の曲線が側面に現れている。7はかえしが不明瞭で小型のもの。半透明の黒曜石を用い、粗く細部調整される。腹面には素材剥片の剥離面が残っている。8は先端を欠損する。9、10は加工途中のものともみられ、いずれも先端が作出されていない。11は未製品である。大きさから石鏃の加工途中と判断した。

## 石槍 (図Ⅱ-49-12、13)

3点出土している。12はかえしの明瞭なもの。球果の多い黒曜石を用い、入念に細部調整される。13は厚手で先端が作出されていない。未製品とみられる。

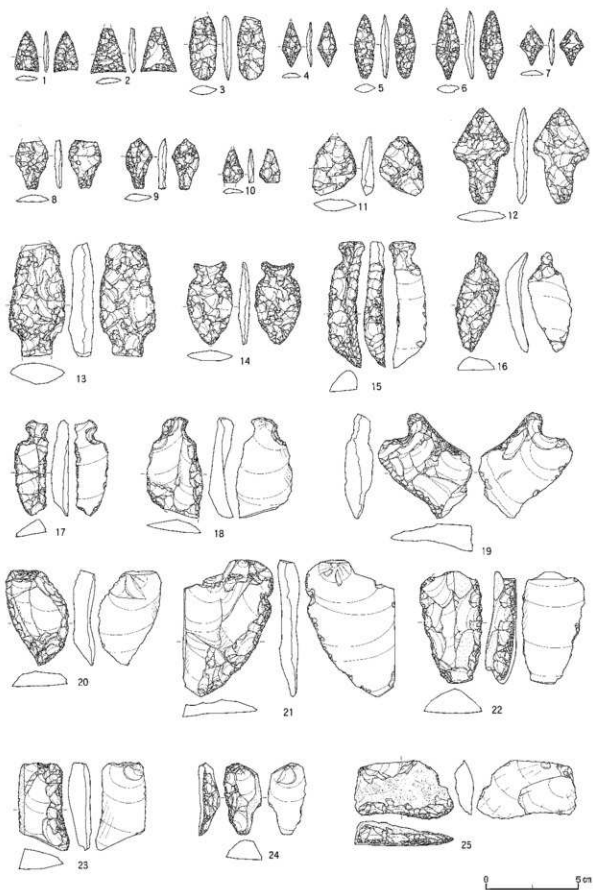
## つまみ付きナイフ (図Ⅱ-49-14~19)

11点出土している。うち6点を実測した。14は唯一の黒曜石製である。両面にわたり入念な細部調整がなされている。つまみ部も丁寧に作出され、Y字状をなしている。15~18までは頁岩製である。15、16はつまみ部のみ両面調整されるもの。15はやや厚手の刃部をもつ、先端は屈曲しやや尖る。16は器体がややねじれ、つまみ部が小さい。細部調整は入念かつ丁寧になされている。17、18はやや簡易な加工がなされるもの。19は馬瑙製。つまみ部が明瞭ではないが、えぐれる部分がつまみに相当するものとし、ここに含めた。

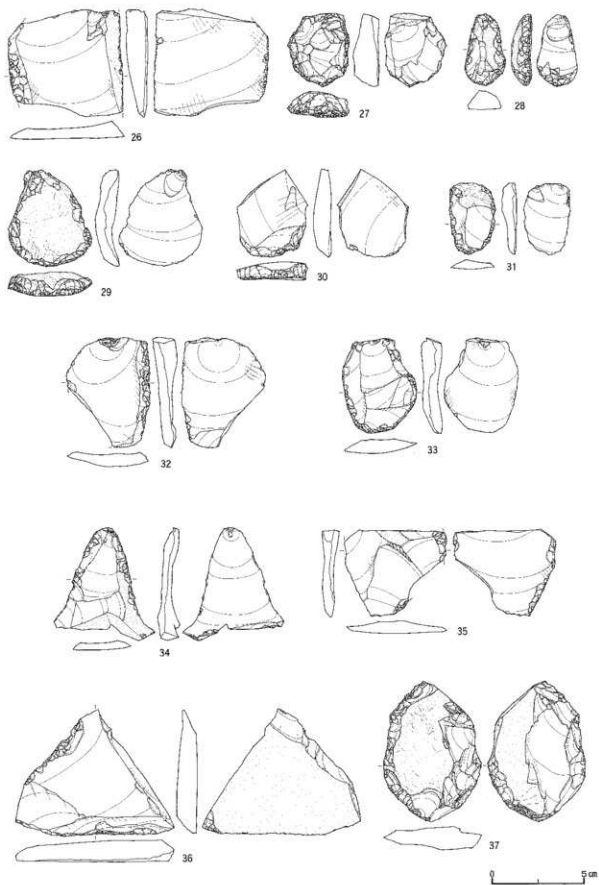
## スクレイパー (図Ⅱ-49、50-20~36)

24点出土している。うち17点を実測した。20は頁岩製、縦長剥片の両側縁を外湾した刃部とする。21~30は黒曜石製である。21は縦長剥片の一边を刃部とする。22は縦長剥片の両側縁を刃部とするもの。やや厚手である。23~26は素材剥片の原石面が残っているもの。23は刃部が内湾するもの。24はやや反する厚手の刃部をもつもの。被熱し表面が白濁している。25、26はほぼ直線状の刃部がつくものである。27~30は半円形で厚手の刃部をもつもの。27は打点部以外に粗い片面細部調整が施される。28は縦長気味の剥片を用い、片面の周縁に細部調整される。29は原石面の残る剥片の端部のみ細部調整されるもの。30は折れた剥片を用い、一端を加工したものである。

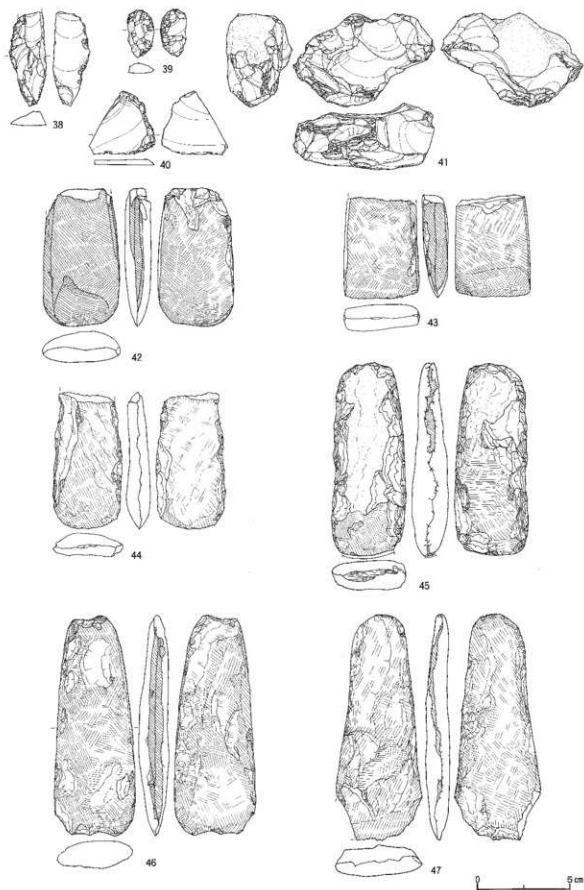
31~36は頁岩製で、素材剥片の形状をほとんど変えていないとみられるもの。31は縦長剥片の周縁を細部調整したもの。32は縦長気味の剥片の右側縁にほぼ直線状の刃部が作出されるもの。33は剥片の端部に外湾する刃部がつくもの。34~36は不定形な剥片の一边を刃部とするもの。34はやや外湾する刃部がつく。35は腹面側に刃部がつく。36は節理面で割れた剥片を素材とするものである。



図II-49 包含層出土の石器(1)



図II-50 包含層出土の石器(2)



図II-51 包含層出土の石器(3)

#### 両面調整石器 (図II-50-37)

実測した1点のみ出土している。37はいわゆる縞状頁岩を素材とし、両面を粗く調整し、亀甲状に整形したものである。

#### Rフレイク (図II-51-38~40)

31点出土している。石材の内訳は黒曜石製が23点、頁岩、安山岩製がそれぞれ3点、玄武岩が1点、不明が1点である。38~40は黒曜石製。38は縦長剥片の左側縁に調整されるもの。39は一部両面に加工されるもの。40は先端を作出する途中とみられるものである。

#### 石核 (図II-51-41)

実測した1点のみ出土した。41は頁岩製。図の正面において不定な打点で剥片剥離を行っているが、原石面を大きく残し、ヒンジやつぶれもみられることから目的剥片を得ることができたかどうかは疑わしい。

#### 磨製石斧 (図II-51-42~47)

9点出土している。内6点を実測した。42、43は緑色泥岩製。42は全面が研磨され、断面は楕円形を呈する。43は上半を欠損する。側片には明瞭な角があり、断面は長方形を呈する。鏡も比較的明瞭である。44は片岩製、上半を欠損する。45~47は整形途中とみられるもの。45、46は泥岩製。47は片岩製である。

#### たき石 (図II-52-48~50)

4点出土している。内3点を図化した。48は上端を欠損するが、礫の端部を使用面とするもの。泥岩製。49は棒状礫の両端に顕著な使用痕があるもの。珪岩製。50は砂岩の破片を転用したもの。

#### すり石 (図II-52-51、52)

2点出土している。すべて実測した。51は隅丸正方形の扁平礫の表面、また4辺の中央に顕著な使用痕がみられるもの。四辺の使用痕がくぼんでいるため、石錘として利用したものかもしれない。52は扁平な礫の一边に使用痕がみられるものである。ともに安山岩製。

#### 石皿 (図II-52-53)

3点出土している。図示した以外は破片である。53は砂岩の細長い礫を用い、表面を使用しているもの。使用痕は顕著で、明瞭にくぼみかつ平滑である。

#### 北海道式石冠 (図II-52-54~56)

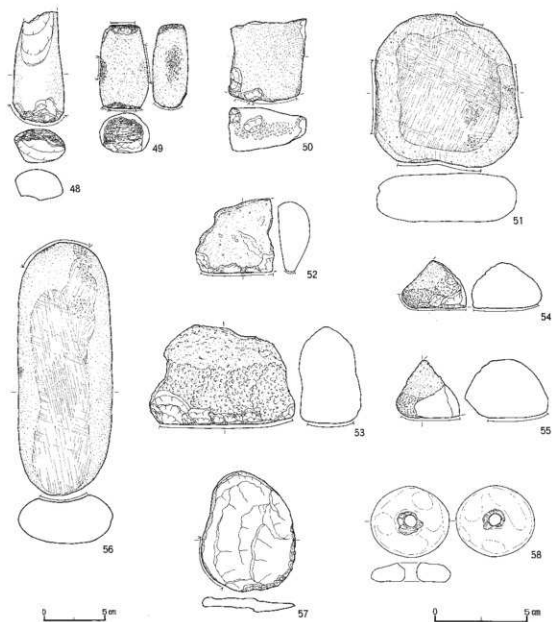
8点出土している。内3点を図示した。54は唯一の完形品である。閃緑岩を用い、打ち欠きと敲打により整形される。55、56は破片である。両者とも安山岩製とみられる。

#### 加工痕のある礫 (図II-52-57)

1点出土している。内1点を図示した。57は被熱し、割れた扁平礫を用い、スクレイパー状の細部調整を端部に行うもの。加工の意図は不明である。

#### 土製品 (図II-52-58)

58は土玉である。胎土から、V群土器に伴うものとみられる。



図II-52 包含層出土の石器(4)

表II-6 遺構一覽

遺構名	グリッド	遺構(長軸×短軸/長軸×短軸/深さ)	時期	遺構名	グリッド	遺構(長軸×短軸/長軸×短軸/深さ)	時期
KH-1	G, H-37, 38	3.46×2.50/0.10×1.80/0.18	縄文前期後半	KP-52	H-38	0.50×0.44/0.31×0.26/0.08	縄文晩期
KP-1	N-15	0.62×0.52/0.40×0.26/0.15	縄文中期?	KP-53	H-39	0.66×0.52/0.42×0.36/0.08	縄文晩期
KP-2	N, O-11	1.46×0.97/1.24×0.78/0.13	縄文晩期	KP-54	H-39	0.58×0.54/0.32×0.32/0.12	縄文晩期
KP-3	M-19	0.76×0.66/0.59×0.38/0.12	縄文晩期	KP-55	H-39	0.71×0.66/0.40×0.41/0.13	縄文晩期
KP-4	K-20	0.56×0.51/0.28×0.28/0.18	縄文晩期	KP-56	G-42	1.08×1.06/0.74×0.70/0.50	縄文晩期
KP-5	N-15	0.68×0.59/0.58×0.36/0.23	縄文中期	KP-57	M-38	1.14×0.94/1.00×0.78/0.12	縄文中期
KP-6	O-23	0.90×0.78/0.52×0.35/0.25	縄文中期?	KP-58	G-42	0.83×0.78/0.50×0.48/0.48	縄文晩期
KP-7	P-24	0.26×1.83/1.18×1.04/0.29	縄文中期?	KP-59	G-42	1.00×0.90/0.52×0.52/0.53	縄文晩期
KP-8	L-24	1.12×1.10/0.63×0.68/0.22	縄文晩期以降	KP-60	M-40	1.26×0.94/0.85×0.54/0.22	縄文中期
KP-9	N-25	1.86×1.25×0.14×0.93/0.12	縄文前～中期	KP-61	M-40	1.26×0.98/0.68×0.60/0.20	縄文中期
KP-10	M-25	1.08×0.88/0.74×0.46/0.24	縄文中期?	KP-62	I-37	0.72×0.72/0.46×0.44/0.20	縄文晩期
KP-11	K-29	0.50×0.39/0.33×0.27/0.08	縄文	KP-63	G-41	0.60×0.49/0.26×0.21/0.14	縄文晩期
KP-12	G-26	0.46×0.44/0.22×0.22/0.14	縄文晩期?	KP-64	N, O-28	1.22×(0.86)/0.90×(0.70)/0.16	縄文中期
KP-13	N-28	1.62×0.14/0.96×0.88/0.23	縄文中期	KP-65	G-41	(0.47)×0.44/0.24×0.24/0.15	縄文晩期
KP-14	P-23	2.12×1.63/1.13×0.76/0.88	縄文中～後期	KP-66	M, N-35	0.86×0.75/0.44×0.42/0.18	縄文中期
KP-15	G-37	0.34×0.28/0.15×0.13/0.10	縄文晩期?	KP-67	H, I-41	0.84×0.76/0.55×0.50/0.22	縄文晩期
KP-16	N-28, 29	1.52×1.23/0.88×0.54/0.16	縄文中期	KP-68	H-40	0.48×0.42/0.24×0.24/0.07	縄文晩期
KP-17	K-26	0.60×0.56/0.26×0.24/0.20	縄文	KP-69	G-42	0.70×(0.22)/0.40×(0.12)/0.16	縄文晩期
KP-18	J-30	0.84×0.52/0.57×0.22/0.20	縄文晩期?	KP-70	G-42	1.06×0.88/0.63×0.40/0.34	縄文晩期
KP-19	F-32, 33	3.54×0.60/0.30×0.20/0.67	縄文中～後期	KP-71	F-41, 42	0.79×0.68/0.48×0.52/0.36	縄文晩期
KP-20	J-20	0.72×0.52/0.42×0.22/0.18	縄文晩期?	KP-72	G-41	0.44×0.42/0.46×0.24/0.18	縄文晩期
KP-21	G-34	0.46×0.44/0.18×0.22/0.17	縄文晩期?	KP-73	44ライン	1.36×1.24/1.14×0.77/0.20	縄文中期
KP-22	G-33	0.38×0.38/0.18×0.15/0.09	縄文晩期?	KP-74	48ライン	0.94×0.89/0.57×0.58/0.37	縄文晩期
KP-23	N-32	0.27×0.25/0.18×0.16/0.12	縄文	KP-75	K-40	0.63×0.60/0.32×0.32/0.23	縄文
KP-24	L-23	0.54×0.46/0.30×0.20/0.30	縄文中～後期	KP-76	K-40	0.84×0.77/0.54×0.42/0.28	縄文
KP-25	O-30, 31	2.10×(1.20)/1.24×(0.98)/0.18	縄文中～後期	KP-77	G-35	0.82×0.66/0.78×0.05/0.22	縄文中～後期
KP-26	O-29, 30	1.34×(1.03)/1.12×(0.77)/0.57	縄文中～後期	KP-78	G, H-34	0.90×0.68/0.87×0.02/0.16	縄文中～後期
KP-27	H-27	0.73×0.14/0.62×0.10/0.73	縄文中～後期	KF-1	P-24	0.40×0.20/0.08	縄文中期
KP-28	I-26	0.73×0.19/0.66×0.06/0.34	縄文中～後期	KF-2	G-28	0.28×0.22/0.42	縄文前期後半
KP-29	H-27	0.67×0.10/0.62×0.07/0.05	縄文中～後期	KF-3	G-28	0.48×0.40/0.32	縄文前期後半
KP-30	M-24	0.66×0.47/0.40×0.29/0.32	縄文晩期?	KF-4	G-28	0.60×0.50/0.38	縄文前期後半
KP-31	D-28	0.53×0.50/0.30×0.29/0.16	不明	KF-5	G-28	0.26×0.23/0.21	縄文前期後半
KP-32	H-36, 37	0.57×0.52/0.38×0.45/0.10	縄文晩期	KF-6	G-28	0.52×0.18/0.43	縄文前期後半
KP-33	J-36, 37	1.76×0.16/1.26×1.35/0.18	縄文中期	KF-7	I-24	0.15×0.11/0.32	縄文晩期?
KP-34	I-37	0.94×0.80/0.49×0.43/0.40	縄文中期	KF-8	J-24	0.13×0.16/0.34	縄文晩期?
KP-35	H-37	0.56×0.52/0.28×0.26/0.14	縄文晩期?	KF-9	G-29	0.30×0.16	縄文前期後半
KP-36	H-37	0.66×0.56/0.28×0.27/0.14	縄文晩期?	KF-10	K-41	0.34×0.32/0.06	縄文中期
KP-37	H-37	0.44×0.44/0.22×0.23/0.14	縄文晩期?	KF-11	C-38	0.25×0.15/0.06	縄文前期後半
KP-38	H-37	0.36×0.32/0.15×0.14/0.09	縄文晩期?	KF-12	D-38	0.22×0.20/0.07	縄文晩期
KP-39	G-40	1.03×0.90/0.73×0.68/0.30	縄文晩期	KF-13	K-42	0.34×0.24/0.20	縄文中期
KP-40	G-41	0.88×0.83/0.42×0.45/0.49	縄文晩期	KF-14	K-42	0.38×0.36/0.13	縄文中期
KP-41	K-41	1.14×0.91/0.68×0.54/0.17	縄文中期?	KF-15	J-42	0.40×0.32/0.04	縄文中期
KP-42	G-42	0.62×0.48/0.20×0.21/0.42	縄文晩期?	KF-16	J, K-42	0.60×0.50/0.14	縄文中期
KP-43	M-24, 25	0.69×0.60/0.51×0.38/0.24	縄文晩期	KF-17	L-41, 42	0.50×0.46/0.10	縄文中期
KP-44	H-42	0.92×0.92/0.54×0.52/0.47	縄文晩期	KF-18	M-41	0.59×0.46/0.60	縄文中期
KP-45	G-41	0.90×0.53/0.54×0.52/0.39	縄文晩期	KF-19	G-41	0.38×0.32/0.10	縄文晩期
KP-46	H-39	0.82×0.60/0.44×0.46/0.10	縄文晩期	土器集1	G-28	—	縄文前期後半
KP-47	H-39	0.58×0.54/0.36×0.44/0.18	縄文晩期	土器集2	G-28	—	縄文前期後半
KP-48	H-39	0.62×0.60/0.38×0.38/0.14	縄文晩期	土器集3	G-28	—	縄文前期後半
KP-49	G-39	0.56×0.56/0.39×0.39/0.10	縄文晩期	土器集4	C-38	—	縄文前期前半
KP-50	G, H-39	1.00×0.96/0.60×0.60/0.36	縄文晩期	集石1	G-29	—	縄文同期後半?
KP-51	I-38	0.62×0.66/0.40×0.36/0.12	縄文晩期	集石2	C-38	—	縄文前期前半

表Ⅱ-7 遺構出土土器一覧

分類	Ⅱ 群	Ⅱ 群 b 群	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	不明	合計
KP-11						4		4
KH-1	1	27						28
KP-3						8		8
KP-4					3			3
KP-5			1					1
KP-13			2					2
KP-14			2					2
KP-16			3					3
KP-33			33	5				38
KP-34						1	1	2
KP-39			9					9
KP-40			3					3
KP-44				3				3
KP-45				17				17
KP-47						1	1	2
KP-49				1				1
KP-56				2				2
KP-57			19					19
KP-58				22				22
KP-59				4				4
KP-64			2					2
KP-65			2					2
KP-70				2				2
KP-72			1	28	10			39
KP-74				50				50
土器集1		547						547
土器集2		36						36
土器集3		22						22
土器集4	154							154
	154	1 27	405	0 46	2 137	49	10	2104

表Ⅱ-8 遺構出土石器等一覧

分類	石 槌	石 つまみ付き ナイフ	石 スクレイパー	石 フレイタ	石 斧	石 たき	石 り	石 皿	石 台	焼 成 粘 土 塊	北 海 道 式 石 冠	石 製 品	種 ・ 種 片	合 計			
															器位	Ⅱ 土	Ⅲ 土
KH-1				1							1			7			
KP-3					3								1	4			
KP-8				2										2			
KP-9		1												1			
KP-11									1			3		4			
KP-13				3										3			
KP-14				1										1			
KP-16										2		3		5			
KP-19										3				3			
KP-24								1	1					2			
KP-25												2		2			
KP-26	1											2		3			
KP-33				2		1						3		6			
KP-35												1		1			
KP-39												1		1			
KP-40						3								3			
KP-50												1		1			
KP-71												1		1			
KP-72				1		1								2			
KP-74				1	3	1						2		7			
KP-80				1						1				2			
KP-1							1							1			
KP-3												2		2			
KP-4												1		1			
KP-9												2		2			
集石1				1	1	1	2	2	1	4	3	3	3	20			
集石2												2		2			
	1	1	1	3	4	3	1	3	1	1	2	1	4	3	3	40	112





表Ⅱ-11 包含層出土掲載土器一覧

図番号	出土地点	層位	点数	分類名
図Ⅱ-45-1	F-29	Ⅲ	1	Ⅱ
図Ⅱ-45-2	C-37	Ⅲ-3	4	Ⅱ
図Ⅱ-45-3	D-36	Ⅲ-3	2	Ⅱ
図Ⅱ-45-4	N-25	Ⅲ	1	Ⅱa
図Ⅱ-45-5	C-24	Ⅲ-3	1	Ⅱa
図Ⅱ-45-6	L-43	I	3	Ⅱa
	K-42	IV	5	Ⅱa
図Ⅱ-45-7	N-14	Ⅲ	1	Ⅱa
図Ⅱ-45-8	D-37	Ⅲ-3	1	Ⅱa
図Ⅱ-45-9	C-37	Ⅲ-3	1	Ⅱa
図Ⅱ-45-10	N-13	Ⅲ	1	Ⅱa
図Ⅱ-45-11	E-30	Ⅲ	2	Ⅱa
図Ⅱ-45-12	O-29	Ⅲ	3	Ⅱa
図Ⅱ-45-13	D-38	Ⅲ	1	Ⅱa
図Ⅱ-45-14	O-14	Ⅲ	1	Ⅱa
図Ⅱ-45-15	Q-22	Ⅲ	1	Ⅱa
図Ⅱ-45-16	D-35	Ⅲ-3	1	Ⅱb
図Ⅱ-45-17	O-14	Ⅲ	1	Ⅱb
図Ⅱ-45-18	E-29	Ⅲ	1	Ⅱb
図Ⅱ-45-19	M-13	Ⅲ	2	Ⅱb
図Ⅱ-45-20	N-15	Ⅲ	1	Ⅱb
図Ⅱ-45-21	O-13	Ⅲ	2	Ⅱb
図Ⅱ-45-22	O-15	カクラン	1	Ⅲ
図Ⅱ-45-23	N-14	Ⅲ	2	Ⅲ
図Ⅱ-45-24	G-40	Ⅲ	1	Ⅲ
図Ⅱ-45-25	D-36	Ⅲ-4	2	Ⅲ
図Ⅱ-45-26	P-14	I	1	Ⅲ
図Ⅱ-45-27	C-38	Ⅲ	1	Ⅲ
図Ⅱ-45-28	G-41	Ⅳ	2	Ⅲ
図Ⅱ-45-29	G-41	Ⅲ下	2	Ⅲ
	G-41	Ⅳ	1	Ⅲ
図Ⅱ-45-30	O-29	Ⅲ	1	Ⅲ
図Ⅱ-45-31	M-36	カクラン	1	Ⅱb-2
図Ⅱ-45-32	K-29	カクラン	1	Ⅱb-2
図Ⅱ-45-33	K-21	カクラン	1	Ⅱb-2
図Ⅱ-45-34	N-31	カクラン	1	Ⅱb-2
図Ⅱ-45-35	K-25	カクラン	1	Ⅲ
図Ⅱ-45-36	H-44	Ⅲ	1	Ⅲ
図Ⅱ-45-37	N-14	Ⅲ	2	Va
図Ⅱ-46-38	C-38	Ⅲ	2	V
図Ⅱ-46-39	E-48	Ⅲ	4	V
	G-48	Ⅲ下	1	V
図Ⅱ-46-40	G-41	Ⅲ上	1	V
図Ⅱ-46-41	F-41	Ⅲ上	1	V
図Ⅱ-46-42	N-14	Ⅲ	1	V
図Ⅱ-46-43	E-37	Ⅲ-3	1	V
図Ⅱ-46-44	C-38	Ⅲ-3	1	V
図Ⅱ-46-45	G-48	Ⅲ	1	V
図Ⅱ-46-46	B-37	Ⅲ-1	3	V
図Ⅱ-46-47	F-41	Ⅲ上	1	V
	G-41	Ⅲ上	1	V
図Ⅱ-46-48	E-48	Ⅲ	2	V
図Ⅱ-46-49	G-48	Ⅲ	1	Vb
図Ⅱ-46-50	M-13	カクラン	1	Vb

図番号	出土地点	層位	点数	分類名
図Ⅱ-46-51	E-48	Ⅲ	1	Vb
図Ⅱ-46-52	E-48	Ⅲ	1	V
図Ⅱ-46-53	D-38	Ⅲ	1	V
図Ⅱ-46-54	G-44	Ⅲ	1	V
図Ⅱ-46-55	B-38	Ⅲ	7	V
図Ⅱ-46-56	D-36	Ⅲ-3	1	V
	D-37	Ⅲ	1	V
図Ⅱ-46-57	F-42	Ⅲ	1	V
図Ⅱ-46-58	B-38	Ⅲ	2	V
図Ⅱ-46-59	G-48	I	1	V
図Ⅱ-46-60	G-42	Ⅲ上	1	V
図Ⅱ-46-61	G-48	Ⅲ下	1	V
図Ⅱ-46-62	G-48	Ⅲ下	1	V
図Ⅱ-46-63	G-42	Ⅲ上	1	V
図Ⅱ-46-64	G-44	Ⅲ	2	V
	H-44	Ⅲ	9	V
図Ⅱ-46-65	F-48	Ⅲ	3	V
図Ⅱ-46-66	F-42	Ⅲ	6	V
図Ⅱ-46-67	G-44	Ⅲ	1	V
図Ⅱ-47-68	G-41	Ⅲ上	1	V
図Ⅱ-47-69	C-38	Ⅲ-3	1	V
図Ⅱ-47-70	O-17	Ⅲ	9	V
図Ⅱ-47-71	G-48	Ⅲ	1	V
図Ⅱ-47-72	C-38	Ⅲ-3	1	V
図Ⅱ-47-73	B-38	Ⅲ	1	V
	C-30	Ⅲ-3	1	V
	C-38	Ⅲ-3	31	V
図Ⅱ-47-74	C-38	Ⅲ	1	V
	C-38	Ⅲ-3	3	V
図Ⅱ-47-75	O-17	Ⅲ	1	V
図Ⅱ-47-76	C-38	Ⅲ-3	2	V
図Ⅱ-47-77	C-38	Ⅲ-3	2	V
図Ⅱ-47-78	C-38	Ⅲ	1	V
	C-38	検出面	2	V
	C-38	Ⅲ-3	2	V
図Ⅱ-47-79	C-38	カクラン	3	V
	C-38	Ⅲ	1	V
図Ⅱ-47-80	G-44	Ⅲ	2	V
図Ⅱ-47-81	C-38	Ⅲ-3	5	V
図Ⅱ-47-82	H-44	Ⅲ	3	V
図Ⅱ-47-83	E-38	Ⅲ	1	V
図Ⅱ-47-84	D-38	Ⅲ	1	V
図Ⅱ-47-85	G-48	Ⅲ	5	V
図Ⅱ-47-86	G-48	Ⅲ	7	V
図Ⅱ-47-87	C-38	Ⅲ-3	2	V
図Ⅱ-47-88	N-13	Ⅲ	5	V
図Ⅱ-47-89	O-17	Ⅲ	9	V
図Ⅱ-47-90	G-41	Ⅲ上	2	V
	G-41	Ⅲ中	1	V
図Ⅱ-48-91	金部瓦片フラグメント		4	V
図Ⅱ-48-92	G-48	Ⅲ	1	V
図Ⅱ-48-93	O-13	Ⅲ	1	V
図Ⅱ-48-94	表探		1	Ⅷ
図Ⅱ-48-95	O-17	Ⅲ	1	Ⅷ

表II-12 包含層出土掲載石器一覧

図版番号	器種名	発掘区 ・ 遺構	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備 考
図II-49-1	石鏃	G-24	Ⅲ	2.2	1.3	0.3	0.7	obs	57ライトレシナ
図II-49-2	石鏃	N-13	地割れ(Ⅲ)	(2.4)	1.9	0.3	1.1	obs	
図II-49-3	石鏃	M-34	攪乱	(3.4)	1.5	0.5	2.2	obs	
図II-49-4	石鏃	G-48	Ⅲ	2.4	1.0	0.3	0.5	obs	2点(75-2)
図II-49-5	石鏃	F-25	Ⅲ	3.4	1.1	0.4	1.3	obs	
図II-49-6	石鏃	G-48	Ⅲ下	(3.6)	1.3	0.5	1.6	obs	
図II-49-7	石鏃	H-44	Ⅲ	(2.0)	1.3	0.3	0.5	obs	
図II-49-8	石鏃	C-38	Ⅲ-3層	(2.6)	1.8	0.4	1.5	obs	
図II-49-9	石鏃	C-38	Ⅲ-3層	2.7	1.5	0.5	1.3	obs	
図II-49-10	石鏃	G-48	Ⅲ	(1.8)	1.1	0.3	0.4	obs	2点(75-1)
図II-49-11	石鏃	G-48	Ⅲ	(3.2)	2.4	0.7	4.0	obs	
図II-49-12	石槍	O-30	攪乱	5.2	3.0	0.7	7.2	obs	木の根
図II-49-13	石槍	P-14	攪乱	(6.1)	3.0	1.4	23.1	obs	
図II-49-14	つまみ付ナイフ	-	-	(4.4)	2.5	0.6	5.3	obs	金谷氏コレクション
図II-49-15	つまみ付ナイフ	F-29	Ⅲ	6.8	2.0	1.2	11.6	頁岩	
図II-49-16	つまみ付ナイフ	G-28	Ⅲ	5.3	2.3	1.2	8.7	頁岩	点取番号1
図II-49-17	つまみ付ナイフ	K-30	I	5.1	1.8	0.9	6.4	頁岩	
図II-49-18	つまみ付ナイフ	G-28	Ⅲ	(5.4)	3.0	1.3	12.5	頁岩	点取番号2
図II-49-19	つまみ付ナイフ	-	-	5.6	5.0	1.5	24.7	メノウ	金谷氏コレクション
図II-49-20	スクレイパー	R-19	I	5.1	3.4	1.2	17.2	頁岩	
図II-49-21	スクレイパー	表採		6.3	4.8	1.1	32.1	obs	
図II-49-22	スクレイパー	C-38	Ⅲ-3層	6.0	3.3	1.7	29.6	obs	
図II-49-23	スクレイパー	G-48	Ⅲ	4.7	2.7	1.2	13.8	obs	2点(76-1)
図II-49-24	スクレイパー	E-48	Ⅲ	3.8	2.0	1.1	7.2	obs	流れ込み
図II-49-25	スクレイパー	表採		3.1	5.3	1.3	18.4	obs	
図II-50-26	スクレイパー	-	-	5.8	6.2	1.2	18.2	obs	金谷氏コレクション
図II-50-27	スクレイパー	G-48	I	3.9	3.3	1.4	35.8	obs	
図II-50-28	スクレイパー	G-41	Ⅲ層中	3.8	2.1	1.1	22.2	obs	
図II-50-29	スクレイパー	D-37	Ⅲ-3層	5.2	4.5	1.3	22.2	obs	
図II-50-30	スクレイパー	G-48	Ⅲ	4.7	3.8	1.0	18.5	obs	2点(76-2)
図II-50-31	スクレイパー	O-14	Ⅲ	3.8	2.5	0.8	7.1	頁岩	
図II-50-32	スクレイパー	-	-	5.9	4.5	1.3	23.0	頁岩	金谷氏コレクション
図II-50-33	スクレイパー	N-30	攪乱	5.1	4.0	1.1	19.9	頁岩	木の根
図II-50-34	スクレイパー	O-24	Ⅲ	6.0	5.4	1.2	15.8	頁岩	
図II-50-35	スクレイパー	Q-22	Ⅳ	4.7	5.5	0.9	16.8	頁岩	
図II-50-36	スクレイパー	C-35	Ⅲ-2層	6.8	8.5	1.7	74.5	頁岩	36ライトレシナ
図II-50-37	両面調整石器	F-29	Ⅲ	7.5	5.3	1.2	53.2	頁岩	
図II-51-38	Rフレイク	D-38	Ⅲ	5.0	2.0	7.5	6.7	obs	
図II-51-39	Rフレイク	P-20	攪乱	2.5	1.4	0.6	2.1	obs	
図II-51-40	Rフレイク	E-48	I	3.4	3.6	0.6	4.8	obs	
図II-51-41	石核	F-29	Ⅲ	5.0	7.6	3.6	131.4	頁岩	
図II-51-42	石斧	-	-	(7.4)	4.1	1.4	74.4	泥岩	金谷氏コレクション2点(389)
図II-51-43	石斧	Q-28	攪乱	(5.4)	4.1	1.3	56.8	泥岩	
図II-51-44	石斧	K-39	攪乱	10.4	4.0	1.9	104.6	泥岩	
図II-51-45	石斧	C-36	Ⅲ-3層	7.3	3.7	1.2	47.3	片岩	
図II-51-46	石斧	-	-	11.8	4.3	1.6	110.1	泥岩	金谷氏コレクション2点(389)
図II-51-47	石斧	D-36	Ⅲ-4層	12.1	4.6	1.3	100.5	片岩	
図II-52-48	たたき石	O-21	Ⅲ	(9.1)	4.1	2.5	107.6	泥岩	
図II-52-49	たたき石	-	-	6.7	4.0	2.8	122.5	珪岩?	金谷氏コレクション
図II-52-50	たたき石	N-28	攪乱	6.6	6.2	3.4	176.9	砂岩	
図II-52-51	すり石	D-37	Ⅲ-3層	12.2	11.5	3.8	981.9	安山岩	
図II-52-52	すり石片	G-40	Ⅲ	(5.9)	6.3	2.5	131.9	安山岩	
図II-52-53	北海道式石冠	H-41	Ⅳ	7.9	11.8	4.8	685.2	安山岩	
図II-52-54	北海道式石冠	D-36	Ⅲ-4層	(3.8)	(5.2)	(6.3)	147.2	閃緑岩	
図II-52-55	北海道式石冠片	L-35	攪乱	(4.6)	(5.1)	(6.7)	148.1	安山岩	(4点) 黒銅木
図II-52-56	石皿	表採		20.2	7.6	4.1	920.1	安山岩	
図II-52-57	加工痕のある礫	E-35	Ⅲ-3層	9.6	7.6	1.0	101.4	泥岩	
図II-52-58	土玉	-	-	3.8	4.3	1.1	15.7	-	金谷氏コレクション

## 6 成果と問題点

柏木川4遺跡の調査は継続される予定であるが、今年度の調査で得られた成果と問題点について、本節にて整理を試みておきたいと思う。

遺構に関しては、1) Tピット様の遺構について、遺物については、2) II群b-2類土器について、3) V群土器について詳細に触れておく。

### 1) Tピット様の遺構について

柏木川4遺跡で検出した78基の土坑のうち、KP-27~29、KP-77、78の5基は、平面形が細い溝状を呈し、長軸は65~90cm、断面はV字状を呈する共通した特徴を持つものであった。

このような特徴のある遺構について類例を検索した。検索にあたって遺央部においても多数確認されているTピットの中で、規模の区分を設ける必要があったことから、調査事例の多い苫小牧市埋蔵文化財調査センターの区分を参考にした。恵庭市の事例もすべて含まれる基準を選び、D型とされる、「長さ1m、幅0.2m前後の小規模なタイプで、深さ0.5m以下のもの」を条件とした。この遺構について恵庭市内をはじめ千歳市、苫小牧市の遺央部において探した。その結果以下の11遺跡74例が確認できた。今回、これらの遺構を仮に「小Tピット」と呼んでおく。

表Ⅱ-13 小Tピット一覧

番号	市町村	遺跡名	検出数	集合の形状	報告書名
1	恵庭市	ユカボンシE7遺跡	4	扇型	北海道埋蔵文化財センター 1999 『ユカボンシE7遺跡』 北理調報 132
2	恵庭市	ユカボンシE9遺跡	5	扇型	恵庭市教育委員会 1993 『ユカボンシE9遺跡 ユカボンシE3遺跡』
3	恵庭市	ユカボンシE11遺跡	4	扇型	恵庭市教育委員会 2002 『ユカボンシE11遺跡』
4	恵庭市	西島松5遺跡	7	L字	北海道埋蔵文化財センター 2002 『西島松5遺跡』 北理調報 178
5	恵庭市	西島松18遺跡	4	直列	恵庭市教育委員会 1992 『西島松17遺跡 西島松18遺跡』
6	恵庭市	柏木川4遺跡	5	扇型	本報告
7	千歳市	オルカ2遺跡	8	U字	北海道埋蔵文化財センター 2003 『オルカ2遺跡』 北理調報 189
8	苫小牧市	厚真7遺跡	21	扇+直列	苫小牧市教育委員会 1987 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』
9	苫小牧市	静川8遺跡	13	扇型	苫小牧市教育委員会 1990 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅲ』
10	苫小牧市	静川29遺跡	1	単独	苫小牧市埋蔵文化財調査センター 2001 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅳ』
11	苫小牧市	柏原18遺跡	2	単独	苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1995 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅴ』
		計	74		

この小Tピットの恵庭市内の事例について、恵庭市ユカボンシE11遺跡において松谷純一により検討がなされている(恵庭市教育委員会 1992)。当時の調査例4遺跡をあげ、普通サイズのTピットとの関係、配列の方向、規模、遺跡の立地の点から検討を加えている。その結果このような小さな規模のものが存在する理由として、対象動物の捕獲そのものを目的とするのではなく、転倒などの軽度の損傷を目的としたものか、具体的には思いあたらないとしながらも、捕獲対象の違いが背景にあるのではないかと推論している。

検索した11遺跡の中で、3基以上のピットを検出し、配列が推察できるものは9遺跡である。

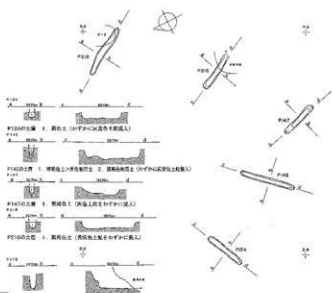
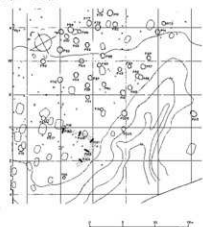
以下に二遺跡について説明する。

恵庭市西島松5遺跡では、平成12年度の調査において、5基の小Tピットが検出されている。5基は約2m程度の距離をおき、沢の傾斜に直行するL字状に配されている。長軸方向は放射状で、L字の開いている方向に向かっている。

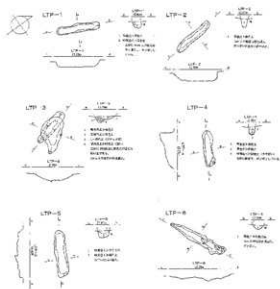
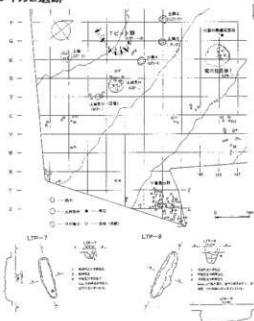
厚真町厚真7遺跡では、Tピット79基のうち、21基がD型とされる小型のものである。

21基の小Tピットは6ヶ所に別れており、それぞれ1~5基程度のまとまりとなって検出されている。この遺跡においては、比較的平坦な部分に3~4基の集中があり、北東に先端のある扇型をなす

西島松5遺跡



オルイカ2遺跡



図II-53 各遺跡の小Tビット

形の集中が2ヶ所、普通サイズのTビットにもみられるが、沢頭から等高線に沿う形で、長軸方向をそろえて並列されるものが1ヶ所、それ以外は単独か2基の集合という形をとっている。

これらの二遺跡の配列状況において共通している点は、放射状もしくはL字状を呈し、それぞれの間隔は1~2mの間隔を保って配置されることである。これを一方が開く形と解釈するならば、直列を呈する西島松18遺跡の例を除きU字状や扇型など配列のみられるほぼすべての遺跡について確認できる。

集成した中で、苫小牧市の類型には詳細に関して不明な点があるが、恵庭市、千歳市の例についてはもうひとつの類似点がある。西島松5遺跡、オルイカ2遺跡、本遺跡の例に顕著であるが、主に断面の形状に各小Tビットの個性があるという点が挙げられる。具体的には激しく凹凸があるもの。片側が傾斜しているものなどが混在し、形状が一定ではない点である。

これらのことを勘案したとしても、松谷氏の検討以上には進めることはできないが、近くに位置しているにもかかわらず、断面形が著しく異なっていることは捕獲を対象とする実用に支障をきたした

可能性はないだろうか。理由はわからないが、特徴のひとつとしてあげておきたい。

また、本遺跡では調査終了に伴う精査を行っていた際検出したものである。オルイカ2遺跡においても調査者が自然攪乱の可能性を捨て切れていないことから考えても、同様な遺構は調査の中で見落とされている可能性もある。

※ 砂川市焼山2遺跡（北埋調報 29）深川市納内6丁目遺跡（北埋調報 55）においても比較的小規模なTピットが検出されている。確かに小さなものではあったが、長軸はすべて1mを若干超えており、今回の類別からは除外した。しかし、当地域ではこのような規模のTピットが存在しているのは確かなようである。

## 2) II群b-2類土器について

第二章4節でも述べたように、本遺跡ではII群b-2類土器に相当するとみられる土器の一群を検出した。特徴を以下に述べる。

- 胎土=砂粒が全く混じらず、角閃石とみられる微細な粒子が少量混じる程度である。また茶褐色を呈するマンガン粒子かとみられる1mm程度の粒子が若干混じっている。破片の断面には繊維が挟まれて入っている。
- 縄文=判別できるものの中では、LRが5例、RLが1例で、結束や結節の例はない。内面にも縄文が施文されるものがあり、口縁から胴部上半まで施文されたとみられる。縄文はやや条の間隔が開き、施文後に器壁が磨かれている例もある。口縁部には縄線が付けられるものがある。
- 器形=器形全体がうかがい知れるものは1個体のみであるが、口縁部にかけてすぼまる器形を呈する。口唇は肥厚し、なでつけられ、平坦面を形成しているものが多い。縄文は底部まで施文されるが、外底面は平底無文である。

これらの土器に相当するものとして、当初はIII群b類に相当する柏木川式かもしくはII群b類に相当する植苗式、あるいは大麻V式との可能性を考えていた。以下にそれぞれの型式について、類似点と相違点を明示しておく。

### 柏木川式について

口縁近くにすぼまる器形、内面の縄文、平坦で無文の底部であることからすると、柏木川式に属するものの可能性も考慮した。しかし柏木川式の胎土は砂粒や岩片が混じるものが一般的であり、標式資料や近隣の遺跡の例では本遺跡例のような胎土を持つものは見つけることができなかった。また隆帯がつくものが出土していないことも異なる点とすることができる。

### 植苗式について

植苗式である植苗貝塚の出土資料には器形、口縁の形状、胎土などの点においてかなりの種類がある。そのため本遺跡で列挙した特徴はすべて要素として保持しているが、基準となる資料と比較すると、口縁に向かって開き気味となる器形や、内面に施文される縄文が底部にまで至っている点、また隆帯がつくことなどかなり異なった印象を受ける。

### 大麻V式について

この時期は近年柏木川流域の柏木川7遺跡において良好な資料が得られている（恵庭市教育委員会 2004）。胎土に繊維を含む点、また口縁に縄線が付けられるものがある点も類似点といえるが、筒型を呈する器形全体の様子、また口唇断面の形状などは標式資料とは異なるものである。

このことから本遺跡のII群b-2類の資料は植苗式に相当するものと結論した。柏木川流域の遺跡の中では柏木川11遺跡においてきわめてよく似た資料がえられている。（恵庭市教育委員会 1990 図51）

本遺跡のII群b-2類土器は基準資料より文様、器形の点で斉一性が強いものである。本資料は時

期幅があるいは、地域的に分布の狭いものであるのかもしれない。

土器集中1



土器集中3



KH-1



包含層



0 10m

図Ⅱ-54 本遺跡出土のⅡ群b-2類土器

### 3) V群土器について

本遺跡から出土したV群土器の詳細については第三章に記述したが、その際土器の分布状況については言及できなかった。そのためここで縄文時代晩期のV群a～c類までの各時期の出土状況とそこから推測できることについて、また大洞・類大洞系土器群の分布、V群に後続する統縄文時代初頭の土器についても若干説明しておきたい。

包含層から出土したV群土器の総点数は2,716点である。グリッドごとの点数を図Ⅱ-55上段に示した。谷部分、試掘調査区近辺に集中する傾向が見て取れる。このうち詳細な時期の内訳を示したものが図Ⅱ-55下である。各時期の傾向について説明する。

**V群a類**（流路出土・図Ⅱ-9-11～13、包含層出土・Ⅱ-45-37）

流路から3点出土している。N-14区から1点出土している。流路から出土したものは流水により摩滅しており、包含層から出土したのも谷に向かう傾斜地点で出土している。この状況からすると、この時期の主な生活域は調査範囲外であったものとみられる。

**V群b類**（遺構出土・図Ⅱ-36、包含層出土・Ⅱ-46-49～51）

包含層から3点、遺構KP-3から1点が出土している。包含層から出土したものはM-13区で1点、E・F-48区から1点ずつ出土している。KP-3はM-19区に位置している。微高地に接した48ライトレンチに今後出土する可能性があるが、調査区内ではこの時期にあってはわずかながら遺構は作られている可能性があるものの点数が少なく、本格的な生活域とはされていないものとみられる。

**V群c類**（遺構・図Ⅱ-36、38、包含層・Ⅱ-46-56～66）

第二章中では明言を避けたが、沈線为主体として文様が描かれるものはこの時期に限定してもよいかと思われる。遺構出土遺物の中ではKP-45、KP-49、KP-56またKF-11から出土しているものがそれに当たる。包含層出土遺物の中では図Ⅱ-46-56～66はこの時期に属する可能性の高いものである。これらの土器はほぼ試掘調査区を囲むように出土している。上記の土坑、焼土も同様な分布を見せており、この地区に分布を同じくする直径1m内外の円形を呈する土坑の多くがこの時期に属しているものとみられる。

**大洞系・類大洞系土器群**（包含層出土・図Ⅱ-46-38～47）

谷に面するN-13区において離れて1点出土しているほかは、V群c類とほぼ同じ分布をみせてい

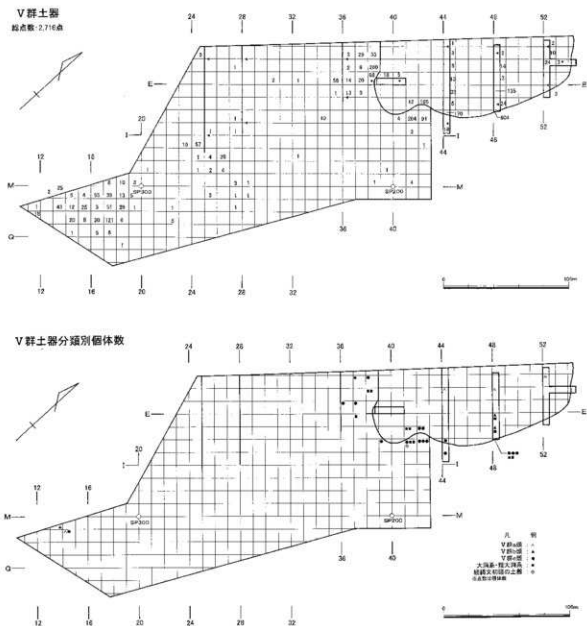


図 II-55 V群土器の分布

る。

#### 縄文初頭の土器 (遺構出土・図 II-38)

G-41に位置するKP-72の覆土中から出土した土器(図 II-38)は縄文初頭の土器である。この時期に属するとみられるのはこれのみの出土である。

これらのことを総合すると、V群a類の時期には調査区内には生活域はなかったが、V群b類からc類の時期にかけて、調査区北部に遺構がつくられたものと考えられる。大洞系・類大洞系土器群も典型的にもその時期のものともみられ、その後の断絶があるかどうかはまだ判断できないが、縄文初頭にも一部遺構が継続して作られているとすることができる。今後調査区が北西側に伸びるに従い、これらのV群b～c類～縄文初頭にかけての遺構・遺物が継続して検出されると考えられる。



II章 引用文献

- 恵庭市教育委員会 1988 「柏木川8遺跡・柏木川13遺跡」
- 恵庭市教育委員会 1990 「柏木川11遺跡」
- 恵庭市教育委員会 1992 「西島松17遺跡・西島松18遺跡」
- 恵庭市教育委員会 1992 「中島松1遺跡・南島松4遺跡・南島松3遺跡・南島松2遺跡」
- 恵庭市教育委員会 1993 「ユカンボシE3遺跡・ユカンボシE9遺跡」
- 恵庭市教育委員会 1995 「柏木川11遺跡(II)」
- 恵庭市教育委員会 2003 「柏木川13遺跡II」
- 恵庭市教育委員会 2004 「柏木川7遺跡」
- 財北海道埋蔵文化財センター 1985 「砂川市 焼山2遺跡 奈井江町 宮村2遺跡・茶志内4遺跡」  
北埋調報29
- 財北海道埋蔵文化財センター 1988 「深川市 納内6丁目付近遺跡」 北埋調報55
- 財北海道埋蔵文化財センター 2002 「恵庭市 西島松5遺跡」 北埋調報178
- 財北海道埋蔵文化財センター 2003 「千歳市 オルイカ2遺跡」 北埋調報189
- 財北海道埋蔵文化財センター 2004 「恵庭市 柏木川13遺跡」 北埋調報203
- 苫小牧市教育委員会 1987 「苫小牧東部工業地帯の遺跡群II」
- 苫小牧市教育委員会 1990 「苫小牧東部工業地帯の遺跡群III」
- 苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1995 「苫小牧東部工業地帯の遺跡群V」
- 苫小牧市埋蔵文化財調査センター 2001 「苫小牧東部工業地帯の遺跡群VII」
- 森田知忠・遠藤香澄 1984 「Tピット論」『北海道の研究I』 北海道出版企画センター

### Ⅲ 柏木川13遺跡の調査

#### 1 調査結果の概要

今年度の発掘調査の結果、検出された遺構は住居跡1軒。土坑4基である。このうち住居跡は擦文文化前期のもの、土坑のうち時期の明確なものは縄文時代晩期のものが1基である。出土した遺物の総点数は229点、そのうち土器は149点、中ではV群土器が最も多く、ついでⅢ群となっている。石器等は80点出土し、定型的なものは石鏃、スクレイパーなどが出土している。出土遺物のこうした傾向はこれまでの柏木川13遺跡の調査と同じものである。

#### 2 調査の方法

##### (1) 発掘区の設定

現地を調査するにあたり、北海道土木現業所の柏木川改修工事河道実施設計計画一般平面図、図面番号1/15を使用し、グリッドの設定を行った。昨年度の調査区内に基準とした杭が残存していたため、当初これらの成果を利用する予定であったが、障害物が多く北橋を越えて測量することができなかった。このため新たに基準杭を設定することにした。新たな基準には改修工事後の柏木川のセンターラインを示す線を利用した。これらのうち調査区内に最も近いものとして、5800と5820という直線距離で20m離れた2点があった。この2点を結んだ直線を基準線とし、5800の点においてこの直線に直交する線を設けたこれを副基準線とした。この直線は延長すると用地幅杭L11に到達するものであり、調査区内に杭を置くため5800から西北西に向かい15mの距離に杭を設け、これをB-5とした。このB-5を調査区内の基準とし、B-5をとおり、副基準線に直行し、基準線に平行な線を設けた。この線をBラインとした。これらの各ラインを調査区全体にかかるように5m間隔の平行線を設定し、調査区内に5m方眼を設定した。基準線に平行な線にアルファベットを、副基準線に平行な線に数字を付し、北東方向に向かうに従い若くなるよう設定した(図Ⅲ-1)。

グリッドの呼称方法は昨年度の方向を踏襲し、柏木川に向かって左上にあたる杭を基準とした。さらに2.5mごとに4分割し、左上から時計周りに、ABCDの小グリッドを設けた(図Ⅲ-1右)。

図Ⅲ-1右のようにA-3グリッドの場合、西端からA-3-A、A-3-B、A-3-C、A-3-Dとなる。

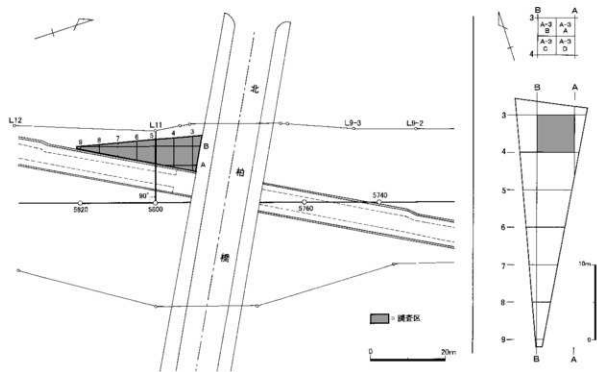
##### (2) 調査の方法

発掘調査に先んじた現地調査、また試掘調査の結果の検討から、次のような留意すべき点があった。1、調査区内には北橋の橋脚工事に伴う攪乱とみられる傾斜、また看板などがあり、大規模な攪乱が予想される。2、調査区が細く長い地区のため、また恵庭市道柏木戸磯線沿いの市有地を通過しなければ、調査区に進入できない。また調査中の廃土も置き場も不足している。ことであった。これらの点について、上記市有地を借地し、廃土置き場、作業員休憩、作業道具置き場とすることにした。また耕作土、また工事攪乱を除去するバックフォアを調査区にあわせて小さなものを使用することにした。表土除去以前、恵庭市教育委員会が行った市有地部分の調査の結果から、調査区内に包含層が残存している部分がある可能性があった。表土除去に際しては、攪乱は包含層の有無を確認できるまで除去し、包含層残存域の把握に努めた。

表Ⅲ-1 柏木川13遺跡出土遺物点数  
土器

分類	土器					計
	Ⅱ群	Ⅲ群	Ⅳ群	V群	Ⅶ群	
器種	1	60	1	52	5	119
遺構	0	3	0	16	11	30
計	1	63	1	69	16	149

石器等							
分類	石	バ	ス	フ	石	石	重
	鏃	ス	ク	レ	斧	礫	
器種	1	6	42	1	1	2	54
遺構	1	1	7	0	0	17	26
計	2	7	49	1	1	19	80



図Ⅲ-1 調査区・調査区設定図

表土除去の結果、柏木川に接した部分では、護岸ブロックにより、橋脚に近い部分では、工事により大きく地山まで削平されていた。しかし、それ以外の部分では、耕作および工事攪乱はIV層もしくはV層付近までであり、遺構が残存している可能性があるものであった。また包含層はB-4グリッドを中心とした、住居跡周辺に残存していることがわかった。

調査はIV層もしくはV層が露出している部分に関しては遺構確認を包含層が残存し、弥文文化期とみられる住居跡がある部分については住居跡の調査の後、包含層の掘削を行うこととした。またこの包含層は用地幅まで広がっており、部分的に拡張して調査したが、遺構は調査区外には検出することはできなかった。

調査期間は5月20日に表土除去を開始し、翌週24日から6月9日まで人力による調査を行った。調査機材を引き上げ、すべての撤収を完了したのは、6月11日のことであった。

(3) 整理の方法

- (ア) 図面・台帳、(イ) 写真、(ウ) 出土品
- (4) 測量と記録
- (5) 収納・保管
- (6) 遺物の分類

上記の点については、柏木川4遺跡と同様であるので、第Ⅱ章を参照されたい。ただし注記に関しては以下のようにした。

遺構出土遺物

遺跡名	遺構名	層位	点取り番号
カ13	P35	フク2	No1

包含層出土遺物

遺跡名	グリッド	層位
カ13	B-3-C	Ⅲ

### 3 遺構とその遺物

#### (1) 概要 (図Ⅲ-2 表Ⅲ-2)

柏木川13遺跡の今年度の調査において、検出された遺構は住居跡が1軒(H6)、土坑が4基である。住居跡は縄文文化期のもので、柱穴が方形を呈する住居の四隅外側に内傾して検出される、いわゆる「カリンバ型」の住居跡である。土坑は時期の明確なものは縄文時代晩期中葉のものP35、そのほかは晩期の可能性があるものにP38がある。そのほかの2基の時期は不明であるが、覆土の黒色土の混じり具合から、縄文時代中期以前の土坑墓と考えられる。なおそれぞれの遺構に付した番号は昨年度の調査からの通し番号となっている。

#### (2) 竪穴住居跡

H6 (図Ⅲ-3、4、6 表Ⅱ-2、3 図版Ⅲ-8)

位置 A・B-3・4 規模 3.46×(2.65) / 3.38×(2.60) / 0.31

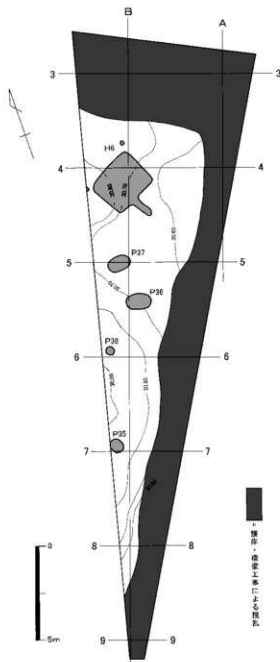
調査 重機により表土剥ぎ中、黒褐色土の落ち込みと焼土を検出した。遺構であることは明白であったため、周囲を鋤鎌にて精査した。その結果、白色粘土をブロック状に混じる住居床面の堆積を確認したため、約半分を覆乱に破壊されている住居跡であることがわかった。

大きく破壊されていた住居の南西側を精査すると、竈の煙道とみられる帯状の堆積を確認した。

このため、これを中心軸とし、良好に残存している北東側に向かってトレンチを設定した。さらに中心を通り直交するトレンチを追加してV層まで掘り下げた。その結果、明瞭な床、構築面に加え、焼土を検出し炭化材、Ⅶ群土器が出土したため、縄文文化期の焼失住居であることがわかった。

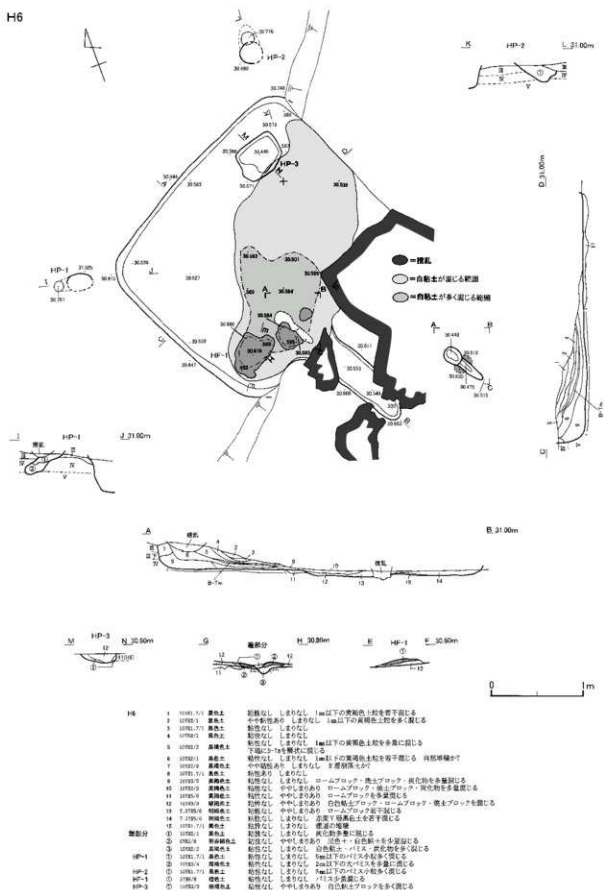
住居跡の写真撮影のため精査を行っていたところ、住居外側にパミスの混じる黒褐色土の範囲を検出した。黒褐色土は北側と西側の2ヶ所であった。住居内部の調査終了後、2ヶ所に対しトレンチを設定してV層まで掘り下げた。その結果住居中心に向かって傾斜する堆積を確認したため、これらを柱穴とした。

堆積土 15層に分層した。1～6層は自然堆積とみられる黒褐色土を基調とした堆積である。5層と6層の間には、B-Tmとみられる火山灰が薄く堆積している。7層は壁面崩落土。8層は自然堆積の可能性がある。9層は屋根土とみられる。10層が生活面。11層は構築層である。12層は竈の構



図Ⅲ-2 遺構配置図

H6



図III-3 住居跡H6(1)

築材を含む土。14、15は煙道部分の堆積である。

**形態** 東北東、西南西方向に長い隅丸長方形を呈する。竈の方向は南東である。

**付属遺構** 柱穴3ヶ所を確認した。調査の項で述べた2ヶ所に加え、住居北隅において、床面を掘り込んだ部分が検出された。掘り込みは浅く、歪な方形を呈している。意図は不明であるが、構築時のものとみられる。このほか、同様な構築時のくぼみとみられるものが、住居のくぼみ内の東、南の部分において検出されている。

**遺物出土状況** 図Ⅲ-4上段は床面の遺物出土状況である。遺物量は少ない。図Ⅲ-4は炭化材の出土状況である。壁際に多い傾向がある。第IV章で詳細を述べるが、炭化材のいくつかについて、樹種同定を行った。図Ⅳ-1に結果を示した。コナラ属コナラ亜種が住居西側に、クルミ属が住居中央から北東端にかけて集中している傾向が指摘できる。

**遺物** 覆土から出土した遺物のうち、土器はⅢ群土器が3点、Ⅴ群土器が6点、Ⅶ群土器が1点。石器等は石鎌1点、フレイク3点、礫・礫片7点である。床面からはⅦ群土器が5点、礫が7点、フレイクが1点出土している。火床からは礫・礫片が2点、煙道からはⅦ群土器が1点出土している。1は覆土から出土したⅤ群c類土器の底部である。凸平底を呈するとみられる。剥落が多く不明瞭ではあるが、RL斜行縄文が底面にも施文されている。2、3はⅦ群土器、2は煙道から出土した頸部付近の破片、段状沈線が施文されている。3は覆土9層から出土した底部。底面に木葉状の文様がつけられている。

**時期** 煙道から出土した土器、またカリンバ型の住居跡であることを考え合わせると、8世紀中葉から9世紀中葉までの據文文化前期のものと思われる。

### (3) 土坑

#### P35 (図Ⅲ-5、6 表Ⅲ-2~4 図版Ⅲ-7、8)

**位置** B-6・7 **規模** (0.70)×0.62/0.44×0.41/0.14

**調査** Ⅴ層上面を精査中、暗褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みの長軸に合わせ南西側を半載すると、明瞭な壁、坑底を検出するとともに、Ⅴ群土器片が出土したため、遺構であることがわかった。土層の記録を作成し、遺物を取り上げた後、完掘して調査を終了した。

**堆積土** 4層に分層した。すべての層に炭化物が混じり、埋め戻されているものとみられる。

**遺物** 覆土からⅤ群土器が12点、スクレイパーが1点、フレイクが3点、礫が1点出土している。覆土4層からの出土が多く、床面の出土遺物はない。1~4は覆土から出土したⅤ群b類土器である。壁際に並ぶように、すべて内面を表にした状態であった(図Ⅲ-5最上段右側)。1~3は同一個体とみられるが、接合しない。浅鉢とみられ、口唇は内傾する平坦面があり、地文が施文された後、棒状工具による刻みが施されている。地文はRL斜行縄文である。3は鉢の底部付近とみられる破片。RL斜行縄文が施文される。5も壁際から出土したスクレイパーである。腹面を表にして出土した。やや厚手の縦長剥片を用い、両側縁に直線状の刃部が作出されるものである。

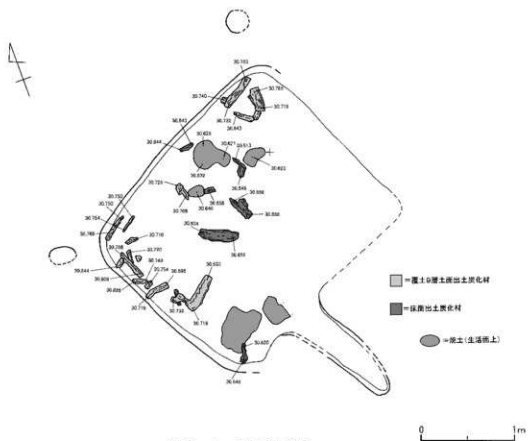
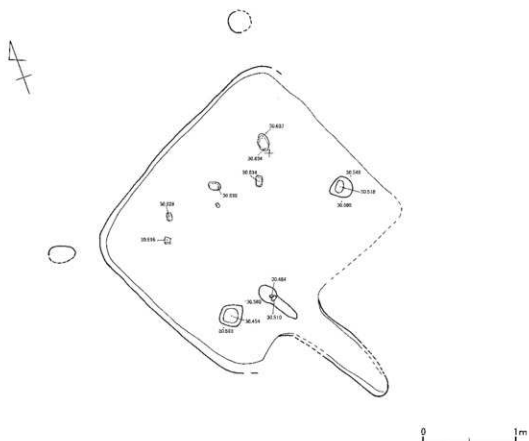
**時期** 出土している遺物から、縄文時代晩期中葉のものと思われる。

#### P36 (図Ⅲ-5 表Ⅲ-2 図版Ⅲ-7)

**位置** A・B-5 **規模** 1.27×0.81/0.92×0.53/0.13

**調査** 攪乱を除去していたところ、黄褐色土ブロックが混じる暗褐色土の広がりを出した。付近を精査すると広がりも楕円形を呈していることがわかった。東側を半載すると、明瞭な壁、坑底を検出し、坑底付近から赤色顔料の集中を検出した。これらのことから、墓の可能性の高い土坑であることがわかった。記録を作成した後、完掘し、赤色顔料の範囲を記録し、調査を終了した。

H6



図III-4 住居跡H6(2)

**堆積土** 3層に分層した。2、3層は赤色顔料、炭化物が多く混じる堆積である。

**遺物** 出土していない。

**時期** 縄文時代のもともみられる。詳細は不明であるが、覆土の色調、周囲の遺物出土状況から、縄文時代中期以前のものである可能性が高い。

**P37 (図Ⅲ-5 表Ⅲ-2 図版Ⅲ-7)**

**位置** A・B-4・5 **規模** 0.69×(0.64)／0.48×(0.58)／0.10

**調査** P36の調査終了後、周囲を精査中、P36と同様な黄褐色土が混じる暗褐色土の堆積を検出した。しかしすでに大幅に削平しており、覆土がわずかに残るのみであった。そのため土層の記録をあきらめ、完掘して記録を作成し、調査を終了した。

**遺物** 出土していない。

**時期** 縄文時代のもともみられる。詳細は不明であるが、覆土の色調、周囲の遺物出土状況から、縄文時代中期以前のものである可能性が高い。

**P38 (図Ⅲ-5 表Ⅲ-2 図版Ⅲ-7)**

**位置** B-5 **規模** 0.44×(0.38)／0.28×0.31／0.13

**調査** V層を精査中、黒褐色土の落ち込みを検出した。東側を半截したところ、明瞭な壁、坑底を検出したため、遺構であることがわかった。

**堆積土** 黄褐色、黒色土ブロックが多く混じる黒褐色土の堆積1層である。

**遺物** 出土していない。

**時期** 不明であるが、覆土の色調、土坑の形態から縄文時代晩期のものである可能性が高い。

(4) 平成15年度 遺構出土の遺物 (未報告分)

**H3 出土遺物 (図Ⅲ-6 図版Ⅲ-8)**

1は土玉である。H3のイ区、覆土2層から出土したもの。ほぼ球形を呈し、中心に焼成前穿孔される。表面はやや磨かれており、部分的に光沢がある。

**F2 出土遺物 (図Ⅲ-6 図版Ⅲ-8)**

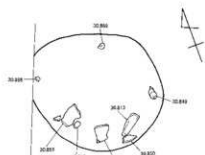
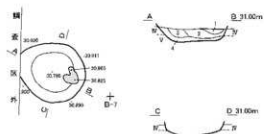
1はガラス玉である。フローテーションから得られた。螺旋状のつばがつく、算盤球状の形状をしている。

色調は透明な緑青色である(巻頭図版参照)蛍光X線による材質分析を行い、結果を第四章3節に掲載した。



III 柏木川13遺跡の調査

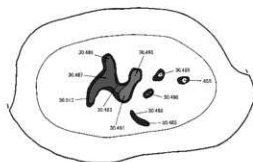
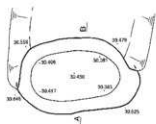
P35



遺土遺物出土状況(1/20)

- 1 3076-3 褐色赤土 粘分あり しまりなし 炭化物・ハリス灰不混じる
- 2 3076-7 褐色赤土 粘分なし 中しまりあり 炭化物・ハリス灰不混じる
- 3 3076-7 赤褐色土 粘分あり しまりなし 炭化物・ハリス灰不混じる
- 4 3076-11 赤褐色土 粘分あり しまりなし 炭化物・ハリス灰不混じる

P36

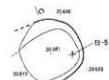


- 1 3074-2 褐色赤土 粘分あり しまりなし ローム状プロック多量混じる
- 2 3074-4 褐色赤土 粘分あり しまりなし 3層に区分し上部は粘分多量混じる
- 3 3074-2 褐色赤土 粘分あり しまりなし V層をプロック状粘分多量混じる

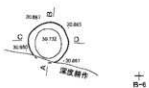
- → 75YR1.3/1黄 炭化緑褐色土
- → 骨片が散在
- → 10Y3.0緑赤 塊状の赤色顔料
- → 75Y3.4暗赤 層状の赤色顔料

赤色顔料出土状況(1/20)

P37



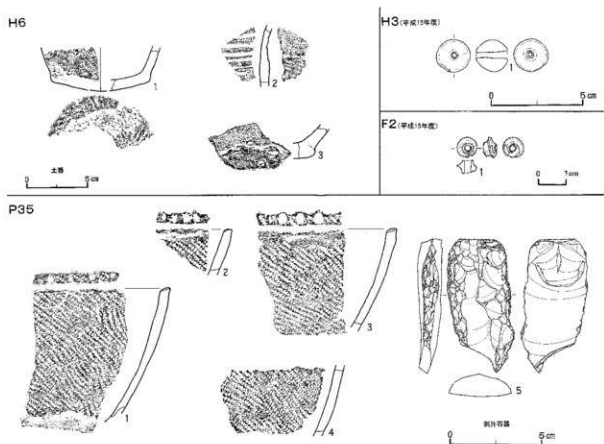
P38



- 1 3076-2 黒褐色土 粘分なし しまりなし 黄褐色土、立色ヤブグロクを多量に混じる

図III-5 土坑





図Ⅲ-6 遺構出土の遺物・平成15年度調査の遺物（未報告分）

## 2 包含層出土の遺物

## (1) 土器 (図Ⅲ-7 表Ⅲ-5 図版Ⅲ-13)

今年度の柏木川13遺跡の調査において、包含層から出土した遺物の総点数は173点である。そのうち土器の点数は119点で、内訳はⅢ群土器が60点と最も多く、ついでⅤ群、Ⅶ群の順になっている。

## Ⅱ群 a類 (1)

1は底部近くとみられる破片である。粗いLR斜行縄文が施文される。胎土に繊維が多量に混じっている。

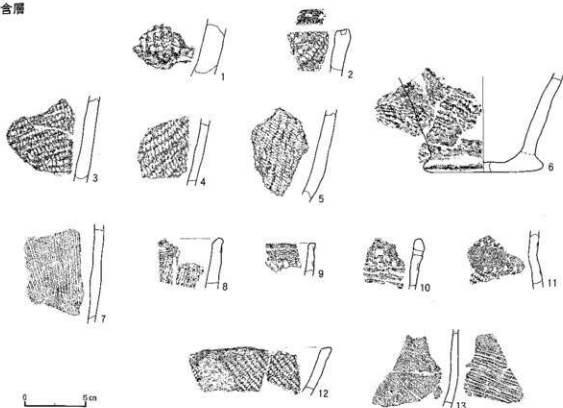
## Ⅲ群 (2~6)

2~6はⅢ群土器である。2は口縁部。口縁端部には半截竹管状工具による押し引き状の刺突文が施文されている。地文はRL斜行縄文である。3~5は胴部片。3はRL、4、5はRL斜行縄文が施文されている。6はやや外に張り出す底部。器壁は外傾して立ち上がる。地文は不明瞭ではあるが、複節の結束第1種斜行縄文が施文されているとみられる。2から6の詳細な時期は検討する材料にかけられるが、いずれも裏面が磨かれていること、また底部の形態から、Ⅲ群 a類に相当するものとみられる。

## Ⅳ群 (7)

7は楕円状の沈線が縦位に施文される底部付近の破片である。Ⅶ群土器の可能性もある。胎土は緻密で石英粒子を多く混じっている。

包含層



図Ⅲ-7 包含層出土の土器

V群 (8~12)

8は楡菌状の沈線が施文されたのち、棒状工具によるやや太い沈線が施文されている。9は折り返して角型に整形される口縁部。10は突起部分。突起下に穿孔され、横走沈線が3条めぐらされている。沈線の上に接して棒状工具による刺突文が下方から施されている。地文のRL斜行縄文の上に下方からの刺突文が施文されている。11は頸部の破片。頸部はナデ調整され無文帯となっている。無文帯の境にはc字状の刺突文が連続して施文されている。12は縄文のみ施文される浅鉢である。すべてV群c類に相当するとみられる。

VII群 (13)

13はI層から出土した胴部片。内面には明瞭な刷毛目調整がなされる。二次焼成を受けやや赤変している。

(2) 石器 (図Ⅲ-8 表Ⅲ-6 図版Ⅲ-13、14)

包含層から出土した石器の点数は54点である。そのうち定型的なものは石鏃が1点、スクレイパーが6点出土している。包含層から出土している、Ⅲ群もしくはV群に伴うものとみられる。

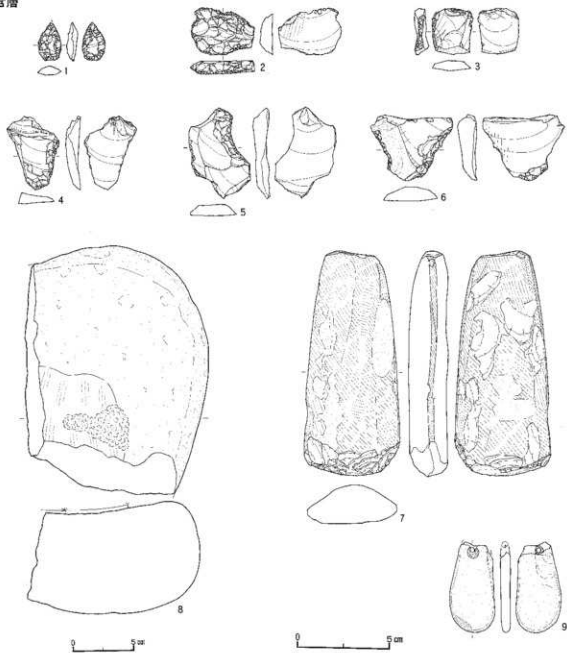
石鏃 (1)

1は1点のみ出土した石鏃である。柳葉形を呈し、やや粗い細部調整が両面に施されている。腹面には素材剥片の面を残している。黒曜石製である。

スクレイパー (2~6)

2~6はスクレイパー。すべて黒曜石製である。2は素材剥片の上下に刃部が作出されるもの。3は左側縁にやや角度の急な刃部がつくもの。4は右側縁に直線状の刃部がつくもの。5は内湾する刃部がつくもの。焼成したとみられ、表面は白濁している。5は両側縁を刃部とする。素材剥片の原石

## 包含層



図Ⅲ-8 包含層出土の石器

面が残っている。

## 石斧原材(7)

7は泥岩製。全面にわたり研磨され、刃部は打ち欠きと敲打により、平坦となっている。再生か製作途中のものと思われる。

## 石皿(8)

8は安山岩製である。作業面は明瞭でくぼんでいる。

## 垂飾(9)

9は泥岩製の垂飾。扁平で楕円形を呈する礫の先端に穿孔される。下端は石斧のように一部研磨される部分がある。

表III-2 遺構一覧

遺構名	グリッド	規模(長軸×短軸/長軸×短軸/深さ)	出土遺物		時期
			土器	石器	
H6	B-5	3.46×(2.65)/3.38×(2.60)/0.31	覆土:Ⅲ=3、V=6、Ⅶ=1 床:Ⅶ=8	覆土:石鏝=1、フレイク=3、鏃・鏃片=6 床:フレイク=1、鏃・鏃片=10	縄文文化期
P35	B-6	(0.70)×0.62/0.44×0.41/0.14	覆土:V=10、Ⅶ=2	覆土:スクレイパー=1、フレイク=3、 鏃・鏃片=1	縄文晩期
P36	A、B-5	1.27×0.81/0.92×0.53/0.13	—	—	縄文
P37	A、B-4、5	0.69×(0.64)/0.48×(0.58)/0.10	—	—	縄文
P38	B-5	0.44×(0.38)/0.28×0.31/0.13	—	—	縄文晩期?

表III-3 遺構出土掲載土器一覧

図番号	出土地点	層位	遺物No.	点数	分類名
1	H6	イ覆土6		3	V
2	H6	燗道		1	Ⅶ
3	H6	ウ覆土9		1	Ⅶ
1	P35	覆土4		1	V b
2	P35	覆土4		1	V b
3	P35	覆土4		2	V b
4	P35	覆土4		1	V b

表III-4 遺構出土掲載石器一覧

図番号	器種名	発掘区・遺構	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備考
H3-1	土玉	H3-イ	フクド2	1.7	1.7	1.7	4.8	—	
F2-1	ガラス玉	F2	1層	1.1	0.7	0.7	0.2	—	フローテーション残渣
P35-5	スクレイパー	P35	フクド4	7.2	3.6	1.3	32.2	obs	点取番号8

表III-5 包含層出土掲載土器一覧

図番号	出土地点	層位	点数	分類名
図III-7-1	B-4	I	1	Ⅱ
図III-7-2	B-3-D	Ⅲ	1	Ⅲ
図III-7-3	A-3-C	Ⅲ	2	Ⅲ
図III-7-4	B-3-D	Ⅲ	1	Ⅲ
図III-7-5	B-3-D	Ⅲ	1	Ⅲ
図III-7-6	B-4-A	Ⅲ	6	Ⅲa
図III-7-7	A-6	I	1	IV
図III-7-8	B-6	I	2	Vc
図III-7-9	B-6	I	1	Vc
図III-7-10	B-7	I	1	Vc
図III-7-11	B-3	I	1	Vc
図III-7-12	A-5	I	1	V
	B-7	I	1	V
図III-7-13	A-4	I	3	Ⅶ

表III-6 包含層出土掲載石器一覧

図番号	器種名	発掘区・遺構	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備考
図III-8-1	石鏝	B-6	I	(2.0)	1.3	0.6	1.1	obs	先端欠損?
図III-8-2	スクレイパー	A-6	I	2.5	3.4	0.7	6.2	obs	
図III-8-3	スクレイパー	B-6	I	2.5	2.2	0.8	4.1	obs	
図III-8-4	スクレイパー	B-6	I	3.9	2.8	0.8	5.1	obs	
図III-8-5	スクレイパー	B-6	I	3.5	4.4	1.1	12.2	obs	
図III-8-6	スクレイパー	B-6	I	4.9	3.3	1.0	9.4	obs	被熱
図III-8-7	石斧原材	A-3	I	12.1	5.2	2.1	208.4	泥岩	
図III-8-8	石皿	A-3~C	Ⅲ	(20.0)	(14.6)	9.7	4000.0	安山岩	
図III-8-9	垂飾	B-6	I	4.9	2.5	0.5	9.5	片岩	

## 5 いわゆる「カリンバ型住居址」の上屋構造について

## (1) 問題の所在

撥文文化期における竪穴住居の支柱穴配置は、竪穴外に4本柱穴・竪穴内に4本柱穴の2種があり、瀬川拓郎によって竪穴内に4本柱穴は竪穴中央側に寄る・竪穴四隅に寄るの2種に細分された。但し、客観的な基準の説明はない(瀬川 1996)。

竪穴外に4本柱穴の住居は、宮 宏明によって「カリンバ型住居址」と仮称された(宮1988)。そして、豊田宏良が、撥文文化期の竪穴住居を竈・地床炉・柱配置から14種類に分類し、そのうち6種類が「カリンバ型住居址」に該当する。そして、この形態が撥文期を通じて全道に分布することにも論及した(豊田 1992)。

本論では、撥文文化通有の住居型式であることから「カリンバ型住居址」ではなく、豊田分類の「竪穴外4本柱穴」を用い略称として「外4本柱穴」と呼称する。

「外4本柱穴」の上屋構造は、宮が柱穴の柱配置・傾斜角度(宮1988)、上屋真一が傾斜角度・屋根構造(上屋 1991)、瀬川拓郎が屋根構造(瀬川 1996)について言及している。上屋・瀬川は支柱穴の軸方向に基づく推定、瀬川はさらに焼失住居の炭化材の位置を加えて検討した。上屋は棟木を持つ構造、瀬川は持たない構造と推定している。結論の相違は、瀬川が内4本柱穴だけが棟木を持つと考えたからである。私は外柱穴軸方向の復元・設置角度の数値比較に基づいて、短い棟木を持つ構造と考えるに至った。

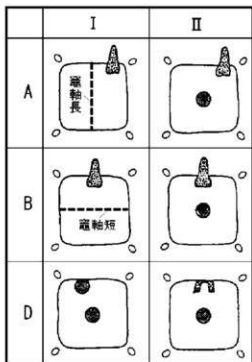
## (2) 分析方法・分類について -表Ⅲ-7についての説明-

長辺・短辺は、竪穴下端の隅を結んだ線分とし、そのうち最長辺とそれに接する最短辺を計測した。竪穴形態は、長短比1.1より大きい値を長方形、1.1以下を「方形」とする。そして、長方形は竈軸に平行する辺が長辺の場合「竈軸長」、竈軸に直交する辺が長辺の場合「竈軸短」と呼ぶ。

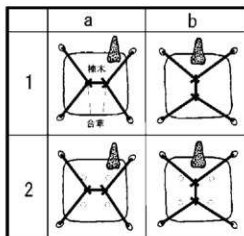
豊田分類(図Ⅲ-9)は、竈位置・地床炉の有無・支柱穴位置を組み合わせた分類である。Aは竈が片方に寄る、Bは竈が真中にある、Dは煙道が屋外に伸びない。I・IIは外4本柱穴でIは地床炉を伴わない、IIは地床炉を伴う。

加えた鈴木分類(図Ⅲ-10)は、棟木方向・支柱穴位置を組み合わせた分類である。aは棟木軸と竈軸が直交する、bは棟木軸と竈軸が平行する。また、1は外4本柱穴、2は外4本柱穴と内4本柱穴が備わる。

外柱穴設置角度は、報告断面図における柱穴下側縁(下側縁の遺存状態が悪い場合は上側縁)と水系ライン



図Ⅲ-9 豊田分類



図Ⅲ-10 鈴木分類

表Ⅲ-7 外4本柱穴住居の検討属性

遺跡名	遺跡番号	遺跡の時期	長辺 (m)	短辺 (m)	面積 (㎡)	長短 比	壁の 形態	竪田 分類	跡木 分類	外柱穴 設置角度	外柱穴 先端 断面形	外柱穴 先端 断面形 面積	外柱穴深 度 (cm)	平均	報告 発行 年度					
丸木山	1日-6	8世紀前期	3.0	2.4	7.20	1.25	竪軸短	竪なし	a 1	62	64	60	30	30.0	1994					
丸木山	1日-4	8世紀前期	3.7	3.0	11.10	1.23	竪軸短	D-I・左	a 1	—	—	—	—	—	1994					
丸木山	1日-5	8世紀前期	3.7	3.1	11.47	1.19	竪軸短	D-II	a 1	35	30	45	40	30.0	1994					
長瀬C	11C付居	8世紀前期	4.3	3.5	14.19	1.30	竪軸短	A-I・右	a 1	25	41	32	—	45.0	1997					
長瀬C	19A付居	8世紀中期	6.0	5.7	34.20	1.05	方形	B-I	b 2	—	—	—	—	—	1997					
カサツバ	第1号住居	8世紀後半	4.7	3.9	18.30	1.21	竪軸長	A-I・右	b 1	39	34	30	—	66.0	1985					
			面積の平均: 16.08㎡			面積の平均: 16.08㎡			外柱穴設置角度の平均: 30.0度											
柏木川13	H1	9世紀前期	6.5	6.2	40.30	1.05	方形	B-I	a 1	—	60	—	30	—	23	38.5	2004			
柏木川13	H2	9世紀前期	7.3	6.1	46.72	1.14	竪軸長	B-I	b 1	40	45	36	42	40.0	34	38.5	2004			
カサツバ	SH-3	9世紀前期	5.7	5.0	28.50	1.14	竪軸長	A-I・右	a 2	28	21	29	19	40.0	45	50.0	43.8	2003		
カサツバ	SH-4	9世紀前期	5.9	5.0	32.45	1.07	方形	A-I・右	a 2	—	30	—	23	—	55	—	86.0	67.5	2003	
カサツバ	H6	9世紀前期	4.8	3.8	18.24	1.30	竪軸短	A-I・右	b 1	—	—	—	36	—	44	68	57.0	2003		
カサツバ	SH-2	9世紀前期	3.7	3.0	11.10	1.25	竪軸短	A-II・右	b 1	27	32	30	35	30.0	40	44	40.0	2003		
柏木川13	SH-1	9世紀中期	3.5	3.0	10.50	1.17	竪軸短	B-I	b 1	24	26	40	28	30.0	40	40	36	78	49.5	1988
南島館4	第2号住居	9世紀中期	3.6	3.4	12.24	1.06	方形	A-I・右	b 1	43	35	32	32	—	46	60	36	56	53.5	1991
オマツ	1日-38	9世紀後半	4.6	4.0	20.24	1.05	方形	B-I	b 1	38	33	23	19	—	49	40	36	50	60.0	2002
			面積の平均: 21.94㎡			面積の平均: 21.94㎡			外柱穴設置角度の平均: 33.7°			外柱穴設置角度の平均: 33.7°								
茂島5	H-3	10世紀前半	4.7	4.2	19.74	1.12	竪軸短	B-I	a 2	21	—	47	—	40	—	30	—	25.0	1997	
オマツC	H27	11世紀後半	3.2	3.1	9.90	1.04	方形	B-I	a 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1988	

がなす角度で、組み合う柱の二つの数値を破線の両側にそれぞれ示した。

外柱穴・内柱穴先端断面形は、報告断面図の形で「平：平担、切出し：切り出し形、丸：丸みを帯びる」である。

外柱穴深度は、報告断面図における上端両側を結ぶ線分の中点から柱穴先端を結んだ距離が最大となる深さとした。平均は各住居跡の深度の平均である。

表中の破線に挟まれた7行目が8世紀代における住居面積・外柱穴設置角・度外柱穴深度の平均、17行目が9世紀代における住居面積・外柱穴設置角・度外柱穴深度の平均である。

(3) 分析項目の検討

「外4本柱穴」住居の面積は平均20.1㎡であり、瀬川の指摘どおり30㎡以下に収まった。一方、30㎡以上が4例あり、これらは「内4本柱穴」住居と較べても大型である。據文晩期の根室市徳香窪穴群にも44.9㎡：H-26があることより、「外4本柱穴」は大型住居の建築において主要な方法ではないものの、それによる建築が可能であり続けたことを示す。

各住居例では外柱穴設置角度の最大値と最小値が組み合う柱はない。これは4本の外柱穴において異なる角度の組み合わせが2組あることを示す。従って方錐形屋根は組めない。

竪穴形態と棟木方向の関係(表Ⅲ-8)

は、「竪軸短・a」が最多の5例、「竪軸長・a」が最少の1例であるので、竪穴長軸と同じ方向に棟木が渡され、異なる角度の組み合わせが2組あることから、棟木は傾斜していた。そして、外柱穴設置角度が小さいので棟木の長さは短いと考えられる。

竪の位置と棟木方向の関係(表Ⅲ-9)は、各組み合わせの例数に差がないので、竪の位置と棟木方向には相関関係がないといえる。

表Ⅲ-8 竪穴形態・跡木分類

竪穴形態-跡木分類	例数
竪軸短-a	5
竪軸短-b	3
方形-a	3
方形-b	3
竪軸長-a	1
竪軸長-b	2

表Ⅲ-9 竪田・跡木分類

竪田分類-跡木分類	例数
A-a	4
A-b	4
B-a	4
B-b	4
竪なし-a	1

表Ⅲ-10 跡木分類・外柱穴設置角度

a 1	外柱穴設置角度の平均	45.2°
	外柱穴設置角度の最大	64.0°
	外柱穴設置角度の最小	25.0°
b 1	外柱穴設置角度の平均	33.3°
	外柱穴設置角度の最大	45.0°
	外柱穴設置角度の最小	18.0°
a 2	外柱穴設置角度の平均	25.8°
	外柱穴設置角度の最大	47.0°
	外柱穴設置角度の最小	19.0°

棟木方向・主柱穴位置の類型別における外柱穴設置角度を比較する(表Ⅲ-10)。平均角度はa1→b1→a2の順で小さい。「角度が小さい」とは合掌にかかる荷重が大きいということであり、屋根組み構造が丈夫であったことを示す。

a1はb1に比べて、より多くの荷重を外柱で受ける。b1は屋根組み構造自体の強化によって荷重を受ける。a1・b1は「内4本柱」がないので、a2・b2よりは屋根構造に剛性を必要とする。

a2・b2は「内4本柱穴」によって荷重を分散させたと推定される。

a2のうち「内4本柱」と「外4本柱」が全て遺存する例を検討する。若手県二戸市長瀬C遺跡・19A住居址は外柱が内4本柱にのるので、梁桁を介して直接外柱を支持する構造である。カリンバ3遺跡・SH-3は外柱が内4本柱にのらない。つまり、内4本柱が外柱を直接支持しない構造である。

SH-3の内4本柱はなにを支持するのか、次の2案が考えられる。①: 高さが違う2組の柱によって屋根組み中にある上下2段の枠構造を支持する。この場合、2組の柱が個別に2つ枠構造を介して屋根を支持する。②: 高さの等しい柱によって屋根組みの中にある1段の枠構造の支持する。この場合、柱に掛かる荷重が2組ごとに異なるが1つの枠構造を介して屋根全体を支持する(図Ⅲ-11)。

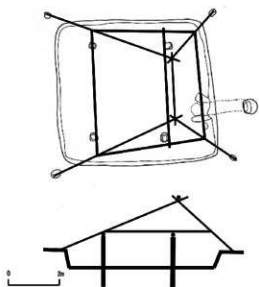
①の想定は②に比べて複雑であり再考の余地がある。いずれにしても、カリンバ3遺跡・SH-3の屋根構造は長瀬C遺跡・19A住居址よりも剛性を必要とする。

つぎにデータは少ないが柱穴の深度について検討する。柏木川13遺跡・H1、2、6は外柱穴の先端が基礎層を掘り抜いて、柱穴を掘削し柱を差し込んでいる。一方、オサツ2遺跡・IH-26は外柱穴の先端が基礎層まで到達せず、ある程度柱穴を掘削して据え置いた可能性がある。外柱は差し込んだのか、据え置いたのか、2通りの状況が考えられる。

表Ⅲ-11より、外柱穴設置角度の平均はa1→b1→a2の順に緩くなる。合掌に掛かる荷重が大きく(外柱穴設置角度が緩くなる)なれば深度が増すかと予想したが、外柱穴平均深度はa1→a2→b1の順に深くなり、そうはならない。

代わりに荷重を受け止める「内4本柱」が備わっていることによるのだろうか。

a2の3例において、「外4本柱」と「内4本柱」の深度はほぼ等しいか、「内4本柱」が



図Ⅲ-11 カリンバ3・SH-3屋根組み2案

表Ⅲ-11 柱穴深土

跡木分類	外柱穴設置角度(°)		外柱穴深度(cm)				平均	内柱穴平均深度(cm)	内柱穴幅(mm)	内柱穴形状	柱構造		
	a1	a2	25	35	30	30.0							
a1	IH-6	62	64	60	63	25	35	30	30.0				
	IH-4	—	—	—	—	—	—	—	—				
	IH-5	35	30	45	40	20	10	10	20	15.0			
	HC住居	25	41	32	—	45	60	30	—	45.0			
	H1	—	40	—	50	—	32	—	25	38.5			
	H27	—	—	—	—	—	—	—	—				
	a1の平均: 45.1°		a1の平均: 32.1cm										
b1	第1号住居	39	34	34	30	26	32	26	66	67.5			
	H2	40	45	36	42	19	42	24	32	67.5			
	H6	—	—	35	36	—	—	46	68	57.0			
	SH-2	27	32	30	35	46	36	46	44	46.5			
	SH-1	24	26	40	28	48	46	28	26	49.5			
	第2号住居	43	35	32	32	48	40	50	56	53.5			
	IH-26	38	33	21	18	65	55	70	50	60.0			
	b1の平均: 33.2°		b1の平均: 56.6cm										
a2	19A住居	—	—	—	—	—	—	—	—	74	平	円柱	
	SH-3	28	21	28	19	40	45	50	40	43.8	75	平	角柱
	SH-4	—	30	—	22	—	55	—	80	67.5	64	平	角柱
	H-3	21	—	47	—	20	—	30	—	25.0	25	平	丸
	a2の平均: 25.1°		a2の平均: 45.4cm										



かなり深い（内4本柱穴平均深度は、床面から柱穴底までの深さの平均）。荷重が「内4本柱」と「外4本柱」に分散されていると考えられる。よって、「外柱穴設置角度の平均は $a \rightarrow b$ 」と「外柱穴の平均深度は $a \rightarrow b$ 」には相関関係があり、「外4本柱」のみの $a \cdot b$ は深度を増すことによって合掌に掛かる荷重を支えていたと解釈してよい。

次に時系に沿って各項目を見てゆく。8世紀代から9世紀代への変化は、面積の平均が $16.08\text{m}^2 \rightarrow 21.94\text{m}^2$ 、竪穴形態が長方形（竪軸短）→方形、竪穴の位置がA-I右→A-I右・B-I、鈴木分類が $a \rightarrow b$ 、外柱穴設置角度の平均が $42.3 \rightarrow 33.7^\circ$ 、外柱穴深度の平均が $39.4 \rightarrow 49.9\text{cm}$ である。傾向をまとめると、床面積が広くなり、竪軸と同じ方向に短い棟木が渡されるようになり、屋根勾配が緩くなり、柱穴は深くなる。

「外4本柱穴」住居は方錐形屋根ではなく、傾斜した短い棟木を持つ寄棟の伏屋である。また、擦文文化期には東北地方にも「外4本柱穴」住居が存在するので上記の屋根構造が北海道～東北に分布していた可能性が高い。「外4本柱」のみの住居は「内4本柱」+「外4本柱」住居に比べて合掌に掛かる荷重がより大きいので、屋根構造に剛性を必要とする。そして、9世紀代の「外4本柱穴」住居は屋根勾配が緩いので合掌に掛かる荷重はより大きくなった。

外柱・合掌に加わる荷重の対処は、柱穴深度の増加以外に外柱径の増大が考えられる。柏木川13遺跡・カリンバ3遺跡の場合、「内4本柱」の柱径は $20\text{cm} \sim 25\text{cm}$ 位あるのに対して「外4本柱穴」の柱径は $20\text{cm}$ 以下がほとんどである。数値裏付けは弱い「内4本柱」の柱径に比べて「外4本柱穴」の柱径が格段に太いという印象はない。

外柱径の増大がないのは屋根を支持するのは外柱のみではないことを示す。外柱は主柱ではなく屋根構造の一部であり、立体骨格の強化（屋根組みの複雑化による剛性の向上）をもって荷重に対処したと考えられる。その場合、遺構として残らない置き柱なども考慮しなければならない。

#### (4) 今後の課題

ところで、瀬川は内柱の位置と屋根土の有無を関連付け、壁側に寄る内4本柱（いわゆる壁立ちの住居）には屋根土がないと断定している（瀬川 1996）。穂香堅穴群の住居は「外柱穴」のH-10を除く全てに屋根土がない。その内訳は、「内4本柱」は6軒・「外柱穴」は15軒・「壁際周溝、壁際柱穴」は2軒であった。「外柱穴」は屋根だけで自立する構造であり伏屋の外観を呈する住居である。擦文晩期には伏屋であっても屋根土を被覆しない形態が通有であったことが解かる。瀬川の考察は、垂木尻の位置・竪穴内の覆土・周堤帯（掘り揚げ土）の状況の検証がないことから再考が必要である。「壁際周溝、壁際柱穴」2軒は、トピニタイ文化の系譜を引く構造である。これらについてはオホーツク文化～トピニタイ文化にかけての上屋構造と屋根土の有無についての検討も必要である。

「チセ」には「アイヌ屋根の構造原体=ケツンニキタイオマニ：2個の三脚とそれに渡す棟木の屋根構造」（鷹部屋福平1939）が備わる。これは屋根だけで自立する構造で剛性が高い。小林孝二（2000）に拠れば、「チセ」の面積は $30\text{m}^2$ 以下に収まり、「外4本柱穴」住居と「チセ」の大きさが近似する。チセの構造によって「外4本柱」や「内4本柱」+「外4本柱」住居が建築可能なことを示唆する。

縄文後半には浅い竪穴に「外柱」構造がある可能性が高いことから、どのような変遷を経て、いつアイヌの建築技術となったか、どれくらい普及したのかを考察することがまず必要である。よって、この構造がアイヌ固有の技術か否かの議論は副次的である。

最後に、これまでの検討を通じて予想される問題は、周囲の削平を受けた「内4本柱」+「外4本柱」住居が「内4本柱」住居と誤認されることである。（鈴木 信）

## IV 自然科学的分析

### 1 柏木川13遺跡出土動植物遺体について

バリノ・サーヴェイ株式会社

#### (1) はじめに

柏木川13遺跡は、柏木川左岸の河岸段丘上（標高31～32m）に立地し、対岸に柏木川8遺跡が隣接する。岡村（1988）によれば、本遺跡は支笏カルデラが形成した火砕流台地に接し、また本遺跡の南側を流れる漁川により形成された扇状地の北方縁辺部に当たる。本遺跡では、これまでの発掘調査により縄文時代や擦文期の遺構や遺物が検出されている。当社では、これまで、堆積年代、堆積環境、古植生、植物利用等の検証を目的として、自然科学分析を実施してきた。今回は、擦文文化期の住居覆土から、フローテーション法で抽出された種実や骨の種類を知り、これらの利用状況に関する情報を得る。試料は、H1、H2、H3、H4、H6の各住居跡の覆土から抽出されたものである。いずれも擦文文化期の住居で、H1、H2、H6は8世紀後葉～9世紀前葉、H3、H4は9世紀後葉のものとみられる。

#### (2) 試料

試料は、H1、H2、H3、H4、H6の各住居跡の覆土からフローテーションによって抽出された試料である。試料は、各遺構の竈、煙道、竈の構築材等の土壌を用いている。また、H-4については、骨片が集中する部分があり、ここからも土壌を採取している。各遺構から採取された土壌試料の詳細は、分析結果と併せて表中に記す。処理は、土壌をフローテーション装置（Project seeds m oel type 1）を用い処理してある。分析後の残渣は、浮遊物は2.00と0.425mm、沈殿物は1.41mmの篩によって回収される。これらを双眼実体顕微鏡を用いて、同定可能と思われる炭化物や骨片を採取し、それぞれ袋に収納してある。各袋に入っている炭化物ならびに骨について、それぞれ同定を実施する。試料の詳細は、種実・骨それぞれの結果を表IV-1～3に示す。

#### (3) 分析方法

##### a) 種実同定

双眼実体顕微鏡下で観察し、その中に含まれる種実遺体や炭化材などの微細遺物を抽出し、同定する。試料は同一試料を粒径別に分けて袋詰めされているが、結果に関しては各粒径を一括して示す。

##### b) 骨同定

試料を肉眼およびルーペで観察し、その形態的特徴から、種と部位の同定を行う。なお、同定および解析には金子浩昌先生に協力をお願いし、署名原稿として結果を掲載した。

#### (4) 結果

##### a) 種実同定

結果を表IV-1に示す。検出されたものの大部分は菌核であり、部位・種類不明の炭化物も多い。炭化した種実は、アワーヒエ、キビ近似種、イネ科、キハダの4種類である。その他、タデ科、アカザ科、ナデシコ科、シソ科の未炭化種実が検出されている。以下に検出された種実の形態的特徴を示す。

##### 〈炭化種実〉

・キハダ (*Phellodendron* cf. *ammense* Ruprecht) ミカン科キハダ属

核（内果皮）の破片が検出された。黒色、半横広卵形で全体の1/2が欠損する。長さ3mm、程度。種皮は厚く硬い。表面には浅く細かい網目模様がある。キハダと思われるが、完形ではなく、表面の

模様も炭化等により不明瞭である。

・アワーヒエ (*Setaria itarica* Beauv. - *Echinochloa crus-galli* Beauv.) イネ科  
炭化した胚乳が検出された。黒色、広楕円体でやや偏平。長さ1.5mm、幅1mm程度。背面は丸みがあり、腹面は平ら。基部に胚の凹みがある。表面は内外穎が失われている。

・キビ近似種 (*Panicum cf. miliaceum* L.) イネ科キビ属  
胚乳が検出された。炭化しており黒色を呈す。広楕円体でやや偏平。径2mm程度。背面は丸みがあり、腹面は平ら。基部には胚の凹みがある。上述のアワーヒエよりも大型でキビに似る。

・イネ科 (Gramineae)  
果実が検出された。炭化しており、半挾卵体でやや偏平。長さ1.5mm程度。表面には微細な網目模様縦列する。

〈非炭化種実〉

・タデ科 (Polygonaceae)  
果実が検出された。形態上差異のある複数の種を一括した。黒色で丸みのある三稜状卵体で大きさは3mm程度。ハナタデ (*Polygonum caespitosum* Blume subsp. *yokusaijanum* (Makino) Danser) またはイヌタデ (*Polygonum longisetum* De Bruyn) と思われる個体が多い。

・アカザ科 (Chenopodiaceae)  
種子が検出された。黒色、円盤状でやや偏平。径1.2mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が同心円状に配列し、光沢が強い。

・ナデシコ科 (Caryophyllaceae)  
種子が検出された。茶褐色、腎状円形でやや偏平。径1.3mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には、臍を取り囲むように瘤状突起が同心円状に配列する。

・シソ科 (Labiaceae)  
果実が検出された。淡褐色、広倒卵三角状三稜形。大きさは2mm程度。基部は切形で長楕円形の臍がある。背面は平らで、面の正中線は鈍稜をなす。シロネ属 (*Lycopus*) に似る。

##### (5) 考察

分析の結果、H1とH4からはアワーヒエが、H3からはキビ近似種が検出されている。検出された種類のうち、アワーヒエとキビは共に栽培植物である。北海道では撥文文化期にこれらの雑穀類が多く検出されており、当時栽培・利用されていたと考えられている(吉崎、1992; 松谷, 2001)。吉崎(1992)は、アワ、ヒエ、キビの道内での出土状況に関して詳細な検討を行っているが、今回の個体はいずれも保存状態が悪く、穎が失われていることから、種を同定することが難しく、詳細な検討はできない。一方、随伴するイネ科やキハダの種実に関しては、燃料材に伴うものと考えられる。

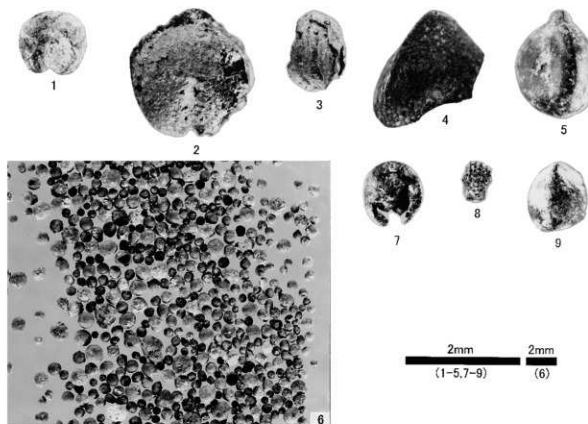
菌核は、土壌に見られる外生菌根菌の休眠胞子である。加戸ほか(2000)によれば、土壌中の菌核の大きさは0.2-7mmとばらつきが大きく、土壌1gあたり10個程度含まれており、根系密度が濃いところほど多いとされる。また、内部は多孔質壁構造と中空構造からなり、多孔質構造には細菌様粒子の存在が確認されている(渡邊ほか, 2001)。このように、菌核は土壌に普通に含まれおり、形成された時代も不明なため、環境などの指標にはならない。

このほか種実では、炭化していないものが検出されているが、遺存状態が比較的良好ことから、遺構廃絶後に混入した後代のものである可能性が高い。この点について、吉崎(1992)は、低湿地遺跡以外から出土する炭化していない種実は、後代からの混入の可能性があると、炭化種実と同様に扱わないように警告している。このため、これらについての考察は差し控える。

表Ⅳ-1 種実同定結果

				炭化種実			非炭化種実	菌核	その他
				ア ワ ー ヒ エ	キ ビ 近 紅 種	イ ネ 科			
1	15-15	H1	床土サンプル					1	不明(+)
2	15-16	H1	埋出充填粘土					34+	
3	15-17	H1	カマド・火床	3				12+	炭化材(+)
4	15-18	H1	カマド・火床		1		アカザ科(1), ナデシコ科(1)	100+	不明(+)
5	15-19	H1	カマド・火床	1				67+	炭化材(+)
6	15-20	H1	カマド・火床				アカザ科(1), シソ科(1)	62+	不明(+)
7	15-21	H1	袖・カマド					8	
8	15-22	H1	袖・カマド	2			アカザ科(1), シソ科(7)	82+	不明(+)
9	15-23	H1	袖・カマド				シソ科(1)	45+	
10	15-24	H1	粘土集積					多	不明(+)
11	15-25	H1	煙道内					多	不明(+)
12	15-26	H2	覆土6層下部				アカザ科(1)	多	
13	15-27	H2	粘土集積					多	不明(+)
14	15-28	H2	ウ壁					6	
15	15-29	H2	白粘土集積					多	
16	15-30	H2	煙道					42+	不明(+)
17	15-31	H2	煙道内					多	不明(+)
18	15-32	H2	火床					多	
19	15-33	H2	カマドソデ					多	
20	15-34	H2	N o.16床・骨				ナデシコ科(1)	90+	
21	15-35	H3	カマド工火床					多	炭化材(+)
22	15-36	H3	N o.16	1			アカザ科(1), タデ科(1)	多	不明(+)
23	15-37	H3	煙道			1		多	不明(+)
24	15-38	H3	カマド・火床					多	
25	15-39	H3	白粘土					多	炭化材(+)
26	15-40	H3	白粘土				アカザ科(1)	多	
27	15-41	H3	白粘土					75+	
28	15-42	H3	白粘土				タデ科(1)	多	
29	15-43	H3	白粘土					多	不明(+)
30	15-44	H3	白粘土					15	
31	15-45	H3	カマド・火床					多	不明(+)
32	15-46	H3	カマド・火床					多	不明(+)
33	15-47	H4	骨片集中					35+	
34	15-48	H4	骨片集中					24+	
35	15-49	H4	骨片集中					25+	
36	15-50	H4	骨片集中					多	
37	15-51	H4	カマド手前/骨					12+	
38	15-52	H4	カマド手前/骨					14+	
39	15-53	H4	火床	1				70+	不明(+)
40	15-54	H4	火床					27+	不明(+)
41	15-55	H4	煙道	2			タデ科(1)	多	不明(+)
42	1	H6	床面白粘土					34+	炭化材(+)
43	2	H6	火床(HF-1)					38+	不明(+)
44	3	H6	煙道				アカザ科(1)	25+	
45	4	H6	火床					22+	不明(+)
46	5	H6	白粘土集中					多	不明(+)

多は、100個体以上の検出 +は断片等を含み、正確な個数が不明のもの



- |                   |                    |
|-------------------|--------------------|
| 1. アワヒエ(H1 15-22) | 2. キビ?(H3 15-36)   |
| 3. イネ科(H1 15-18)  | 4. キハダ(H3 15-37)   |
| 5. タデ科(H3 15-36)  | 6. 菌核(H3 15-36)    |
| 7. アカザ科(H1 15-18) | 8. ナデシコ科(H1 15-18) |
| 9. シソ科(H1 15-22)  |                    |

図IV-1 種実

## 2 柏木川13遺跡の出土焼骨

金子 浩昌

今回の試料では、魚類1種類（サケ・マス類）、鳥類1種類（科属種不明）、哺乳類1種類（ニホンジカ?）が確認される（表IV-2、3）。いずれも白色を呈し、細かな破片となっており、焼骨の特徴がみられる。

魚類では、サケ・マス類の顎骨と遊離した歯、および椎骨の破片が確認される。魚類の破片も多くみられるが、サケ・マス類以外の種類は、確認できない。おそらくは、本遺跡の面する旧漁川を湖上するサケ・マス類が多獲されていたと推定される。

鳥類は、骨の厚さが1mm程度の硬質骨が僅かに認められる程度であり、おそらくは主要四肢骨の破片と思われるが、種類や部位を特定するに至らない。どのような種類が食糧資源とされていたのか、今回の試料で明らかにすることができない。

獣類は、多数が検出されたが、大半は大型獣の四肢骨片であった。その中でもニホンジカの可能性がある左脛骨、中手骨/中足骨、種子骨、基節骨、第II/V指の末節骨が確認される。この部分は小さく、かつ硬質であるために保存されたと思われる。これらの標本が数多く検出されれば、大型獣骨片がニホンジカの可能性がさらに高まるが、残念ながら確認された量が少ないため、詳細が不明である。この他に確認された獣類の骨片も、ほぼ同程度の厚さを持つ骨片であることから、ニホンジカの可能性がある。なお、縄文時代後期には、本州からイノシシが運ばれている。イノシシの骨は、骨質面でみるとニホンジカに変わらない。イノシシの骨の混入があった場合、形態で識別し得る部分が残されないかぎり確認できないが、これまでの焼骨の事例のみ限り、縄文時代晩期以降にイノシシの混入がなくなると思われる。よって、本試料中にも、イノシシの遺骸は含まれないと思われる。

表IV-2 検出分類群一覧

脊椎動物門	Phylum Vertebrata
硬骨魚綱	Class Osteichthyes
条鰭亜綱	Subclass Actinopterygii
サケ目	Order Salmoniformes
サケ科	Family Salmonidae
サケ・マス類	<i>Oncorhynchus</i> sp.
鳥綱	Class Aves
鳥類	Aves
哺乳綱	Class Mammalia
ウシ目（偶蹄目）	Order Artiodactyla
シカ科	Family Cervidae
ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>

表IV-3 骨同定結果

通し番号	収得番号	遺構	遺構	種類	分類群	部位	左右	部分	数量
3	15-17	H1	カマド・火床	鳥綱	鳥類	不明		破片	1
				哺乳綱	獣類	四肢骨		破片	5
				脊椎動物門	不明	不明		破片	1.4g
4	15-18	H1	カマド・火床	硬骨魚綱	魚類	不明		破片	1
				哺乳綱	ニホンジカ?	第II/V末趾骨		破片	1
						種子骨		ほぼ完存	1
								破片	1
						基節骨		近位端片	1
				獣類	不明	不明		破片	2.4g
				その他	植物片+土壌等	破片			*
5	15-19	H1	カマド・火床	硬骨魚綱	サケ・マス類	歯		破片	1
						椎骨		破片	11
				哺乳綱	ニホンジカ?	種子骨		破片	1
				獣類	不明	不明		破片	5
				脊椎動物門	不明	不明		破片	0.5g
				その他	植物片+土壌等	破片			*
6	15-20	H1	カマド・火床	硬骨魚綱	サケ・マス類	歯		破片	1
						椎骨		破片	1
				魚類	不明	不明		破片	1
				脊椎動物門	不明	不明		破片	*
8	15-22	H1	袖・カマド	その他	植物片+土壌等	破片			*
9	15-23	H1	袖・カマド	硬骨魚綱	サケ・マス類	椎骨		破片	1
10	15-24	H1	粘土集積	その他	植物片+土壌等	破片			*
11	15-25	H1	標道内・フロアーションサンプル	その他	植物片+土壌等	破片			*
12	15-26	H2	覆土6層下部 フロアーションサンプル	硬骨魚綱	サケ・マス類	歯		破片	2
						椎骨		破片	42
				魚類	不明	不明		破片	4
				哺乳綱	ニホンジカ?	四肢骨		破片	3
				獣類	不明	不明		破片	1
				脊椎動物門	不明	不明		破片	0.2g
13	15-27	H2	粘土集積	その他	植物片+土壌等	破片			*
16	15-30	H2	標道	その他	植物片+土壌等	破片			*
17	15-31	H2	標道内	その他	植物片+土壌等	破片			*
18	15-32	H2	火床	硬骨魚綱	サケ・マス類	椎骨		破片	8
						椎骨		破片	1+
				魚類	不明	不明		破片	13
				鳥綱	鳥類	不明		破片	1
				哺乳綱	獣類	不明		破片	13
				脊椎動物門	不明	不明		破片	1.4g
				その他	雑				1
19	15-33	H2	カマド・袖	硬骨魚綱	サケ・マス類	歯		破片	2
						椎骨		破片	21
				魚類	不明	不明		破片	4
				脊椎動物門	不明	不明		破片	0.1g
20	15-34	H2	No.16床・骨	硬骨魚綱	サケ・マス類	椎骨		破片	17
				哺乳綱	獣類	不明		破片	23
				脊椎動物門	不明	不明		破片	1.1g
				その他	植物片+土壌等	破片			*
21	15-35	H3	カマド工火床	硬骨魚綱	サケ・マス類	歯		破片	6
						椎骨		破片	0.7g
				魚類	不明	不明		破片	0.4g
				哺乳綱	ニホンジカ?	基節骨		近位端片	1
				獣類	不明	不明		破片	31
				脊椎動物門	不明	不明		破片	3.0g
				その他	植物片+土壌等	破片			*
22	15-36	H3	No.16床	硬骨魚綱	サケ・マス類	歯		破片	1
						椎骨		破片	27
				魚類	不明	不明		破片	1
				哺乳綱	獣類	不明		破片	17
				脊椎動物門	不明	不明		破片	3.3g
				その他	植物片+土壌等	破片			*
23	15-37	H3	標道	その他	植物片+土壌等	破片			*
24	15-38	H3	カマド・火床	硬骨魚綱	サケ・マス類	椎骨		破片	1

通し 番号	処理番号	遺構	遺 構	種 類	分 類 群	部 位	左右	部 分	数 量
				哺乳綱	獣類	四肢骨		破片	19
25	15-39	H 3	白粘土	その他	植物片+土壌等	破片		*	
26	15-40	H 3	白粘土	その他	植物片+土壌等	破片		*	
28	15-42	H 3	白粘土	その他	植物片+土壌等	破片		*	
29	15-43	H 3	白粘土	その他	植物片+土壌等	破片		*	
31	15-45	H 3	カマド・火床	硬骨魚綱	サケ・マス類	椎骨		破片	1
				哺乳綱	獣類	不明		破片	16
				脊椎動物門	不明	不明		破片	0.4g
				その他	植物片+土壌等	破片		*	
32	15-46	H 3	カマド・火床	硬骨魚綱	サケ・マス類	歯			4
						椎骨		破片	0.4g
				魚類	鯉科			破片	23
				鳥綱	鳥類	不明		破片	7
				哺乳綱	獣類	不明		破片	32
				脊椎動物門	不明	不明		破片	3.9g
				その他	植物片+土壌等	破片		*	
33	15-47	H 4	骨片集中	哺乳綱	ニホンジカ?	第Ⅱ/V末肋骨		破片	1
						中手骨/中足骨		破片	1
						不明		破片	58
				脊椎動物門	不明	不明		破片	6.9g
34	15-48	H 4	骨片集中	哺乳綱	獣類	不明		破片	16
				脊椎動物門	不明	不明		破片	1.2g
35	15-49	H 4	骨片集中	硬骨魚綱	サケ・マス類	椎骨		破片	1
				哺乳綱	獣類	不明		破片	25
				脊椎動物門	不明	不明		破片	0.8g
				その他	植物片+土壌等	破片		*	
36	15-50	H 4	骨片集中	硬骨魚綱	サケ・マス類	歯			1
						椎骨		破片	0.3g
				魚類	椎骨			破片	1
						鯉科		破片	6
37	15-51	H 4	カマド手前/骨	哺乳綱	獣類	不明		破片	137+
				鳥綱	鳥類	四肢骨		破片	7
				哺乳綱	獣類	不明		破片	0.3g
38	15-52	H 4	カマド手前/骨	硬骨魚綱	サケ・マス類	椎骨		破片	23
				魚類	鯉科			破片	17
				鳥綱	鳥類	不明		破片	5
				哺乳綱	ニホンジカ?	脛骨	左	遠位端	1
						不明		破片	20
				脊椎動物門	不明	不明		破片	0.6g
39	15-53	H 4	火床	硬骨魚綱	サケ・マス類	椎骨		破片	3
				脊椎動物門	不明	不明		破片	20
				その他	植物片+土壌等	破片		*	
40	15-54	H 4	火床	硬骨魚綱	サケ・マス類	顎骨		破片	1
						歯		破片	4
						椎骨		破片	0.7g
				魚類	鯉科			破片	84
				哺乳綱	ニホンジカ?	基節骨		遠位端	1
					ニホンジカ?	桡骨		破片	1
						不明		破片	31
				脊椎動物門	不明	不明		破片	4.6g
				その他	植物片+土壌等	破片		*	
41	15-55	H 4	煙道	硬骨魚綱	サケ・マス類	歯		破片	1
						椎骨		破片	4+
				魚類	鯉科			破片	17
						不明		破片	1
				哺乳綱	ニホンジカ?	不明		破片	1
						不明		破片	56
				脊椎動物門	不明	不明		破片	6.0g
43	2	H 6	火床 (HF-1)	その他	植物片+土壌等	破片		*	
44	3	H 6	煙道	その他	植物片+土壌等	破片		*	
45	4	H 6	火床 5 L	哺乳綱	獣類	不明		破片	1
				硬骨魚綱	魚類	鯉科		破片	1
46	5	H 6	白粘土集中	哺乳綱	獣類	不明		破片	2

凡例:数量の\*表示は0.1g以下を、数字の後に「+」は他に微細片が含まれることを、それぞれ示す。



### 3 柏木川13遺跡の住居址から出土した炭化材

三野 紀雄（北海道浅井学園大学）

#### (1) はじめに

恵庭市柏木川13遺跡から出土した竪穴住居の炭化した建築材料について、当時の遺跡周辺の植生環境を知るために樹種同定を行った。

#### (2) 試料

樹種同定を行った試料12点は、8世紀後葉期から9世紀前葉期のH6号竪穴住居の建築材料12点である。同遺跡の平成15年度の発掘調査においても樹種同定を行ったが、そのうちのH1及びH2号竪穴住居の試料と同時期の竪穴住居と考えられる。平成15年度の発掘調査では、この2棟の住居に加えて9世紀後葉期のH3及びH4号住居からも炭化材が出土し、樹種同定を行っている。

#### (3) 方法

試料を調整し、走査電子顕微鏡で木材組織を観察し樹種同定を行った。

#### (4) 結果と若干の考察

樹種同定の結果、H6号竪穴住居の炭化木材ではコナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus* sp.、クルミ属 *Juglans* sp. ?、ハンノキ属 *Alnus* sp.の樹木が見られた。出現頻度は第2表に示したとおりコナラ節が50%と最も高く、次いでクルミ属?の約30%、ハンノキ属が僅かで、それらは主として河岸段丘及び段丘斜面に生育する樹木である。

表Ⅳ-4 柏木川13遺跡、H6号竪穴住居址から出土した炭化材の樹種同定

No.	樹種	No.	樹種
2	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.	16	コナラ属コナラ亜属コナラ節 <i>Quercus</i> sp.
4	クルミ属 <i>Juglans</i> sp. ?	18	コナラ属コナラ亜属コナラ節 <i>Quercus</i> sp.
6	コナラ属コナラ亜属コナラ節 <i>Quercus</i> sp.	20	試料微細につき検鏡不能
7	コナラ属コナラ亜属コナラ節 <i>Quercus</i> sp.	21	クルミ属 <i>Juglans</i> sp. ?
9	コナラ属コナラ亜属コナラ節 <i>Quercus</i> sp.	22	クルミ属 <i>Juglans</i> sp. ?
12	コナラ属コナラ亜属コナラ節 <i>Quercus</i> sp.	24	クルミ属 <i>Juglans</i> sp. ?

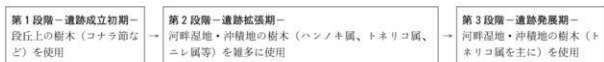
石狩低地帯の遺跡における竪穴住居の建築材料に関する調査では、千歳市と恵庭市の境界を境にして太平洋側がコナラ節の樹木を、一方日本海側ではトネリコ属の樹木を多用する傾向が見られる。日本海側で主にコナラ節の樹木を建造材料にする竪穴住居の報告例は今のところ見られない。したがって、コナラ節の樹木を多用するH6号竪穴住居の存在は人と自然（樹木）との関わりについて考える一つの課題といえる。

平成15年度の調査では、表Ⅳ-5に示すように8世紀後葉期から9世紀前後葉に至る約100年間に、竪穴住居の建築に用いられる樹木にハンノキ属材とトネリコ属材の混用から次第にトネリコ属材の単独使用に移ってゆく傾向が見られた。今回調査した竪穴住居では、昨年度とはまったく様子が異なる。昨年度の調査では、8世紀後葉期から9世紀前葉の第1、2号住居、及び9世紀後葉の第3、4号住居とも河畔の低湿地に生育する樹木が用いられている。しかし、今年度調査した第6号住居では沖積地から河岸段丘上至る地域に生育する樹木が主として用いられている。

表Ⅳ－5 柏木川13遺跡、竪穴住居址建築材の樹種構成

住居址	時期	樹木構成
平成16年度調査（今年度報告）		
H 6 号住居址（標高約31.0m）	8世紀後葉～9世紀前葉	コナラ属コナラ亜属コナラ節（50.0%）、クルミ属（33.3%）、ハンノキ属（8.3%）、樹皮など樹種不明（8.3%）
平成15年度調査（昨年度報告）		
H 1 号住居址（標高約32.8m）	8世紀後葉～9世紀前葉	ハンノキ属（20.8%）、トネリコ属（16.0%）、ニレ属（3.2%）、カエデ属（0.8%）、樹皮など樹種不明（59.2%）
H 2 号住居址（標高約30.5m）	8世紀後葉～9世紀前葉	トネリコ属（41.5%）、ハンノキ属（18.3%）、ヤナギ属（1.2%）、樹皮など樹種不明（39.0%）
H 3 号住居址（標高約30.5m）	9世紀後葉	トネリコ属（89.3%）、ハンノキ属（7.1%）、モクレン属（4.0%）、樹皮など樹種不明（0.0%）
H 4 号住居址（標高約30.3m）	9世紀後葉	トネリコ属（84.0%）、シナノキ属（8.0%）、クルミ属（4.0%）、樹皮など樹種不明（4.0%）

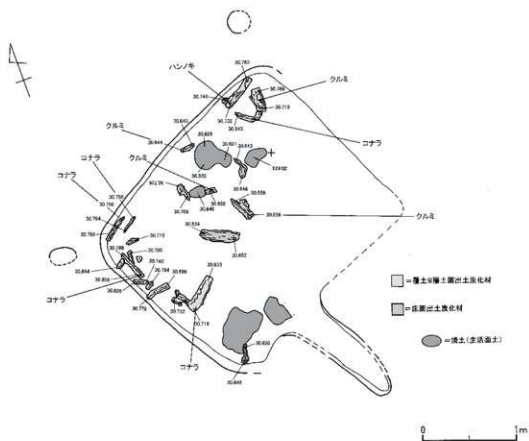
これらのことから、この遺跡が成立するにあたって、H 6 住居のようにまず最初に河岸段丘上や段丘斜面に生育する樹木（コナラ節、クルミ属など）を主に用い、次いでH 1、2、3、4住居のように河畔の湿地及び沖積地に生育する樹木（ハンノキ属、トネリコ属、ニレ属など）を順次使い、しだいにハンノキ属からトネリコ属の樹木へと使用傾向が移ったと推察することはできないだろうか。この様子を下図に示す。



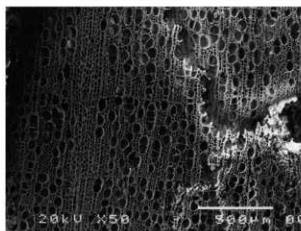
遺跡発展過程と竪穴住居建造に用いられる樹木の移り変わり

他方、本遺跡に近接する縄文文化期に成立した西島松5遺跡（平成18年報告予定）では、縄文文化中期後葉期から後期中葉期に至る間、建造時期が異なっても竪穴住居の建造材料としてトネリコ属やニレ属の樹木が多用され続けている。河岸段丘上に生育するコナラ節やサクラ属樹木の使用は僅かである。しかし、上図が示すように、この遺跡においてもコナラ節の樹木を主とした段丘上に生育する樹木が多用される時期があったのかもしれない。ただ、これまでのところこの地域では縄文文化期にコナラ節などの段丘上に生育する樹木が建築材料として多用された竪穴住居は見つかっていない。

検討材料が多いとはいえないが、以上のことからこの地域では「遺跡の成立当初は竪穴住居を建造する場所となる河岸段丘上に生育するコナラ節などの樹木を用い、次いで生活圏を河畔に拡大するに従い河畔の湿地や沖積地に生育する樹木を、さらには用材として使い勝手の良いトネリコ属樹木を多用するようになる」と結論づけてもよいのではなかろうか。とはいってももちろん、段丘上及び河畔に生育する樹木は日々、各種什器・道具類の材料としてまた燃料材として用いられ続けていたに違いない。

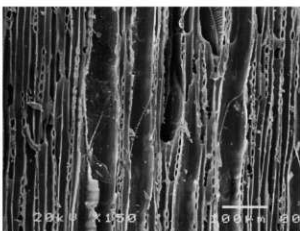


図IV-1 H6炭化材出土状況と樹種

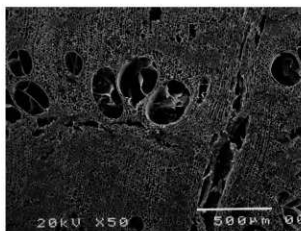


ハンノキ属 *Alnus* sp.

木口

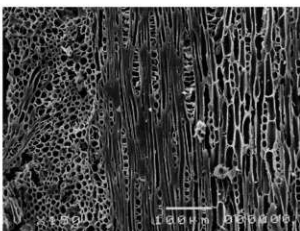


板目

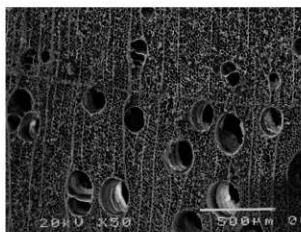


コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus* sp.

木口

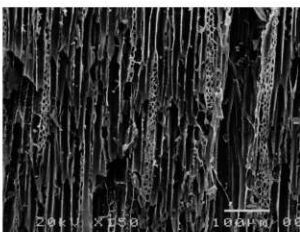


板目



クルミ属 *Juglans* sp.?

木口



板目

炭化木材の木材組織

## 4 柏木川13遺跡 F2 出土ガラス玉の蛍光X線分析

立田 理

### (1) 検出・報告の経緯

平成15年度の柏木川13遺跡の調査において、縄文文化期の住居跡、焼土に関して、フローテーション法による炭化種子及び微細遺物の回収を行った。これらの観察記録についてはすでに報告済みである（北理調報203）が、報告執筆の後残務整理を行っていた際F2の残渣の中から、形状は半円状にカーブした細い針金状、色調は鮮緑色を呈する10点の微細な破片が混じっているのを発見した。

この破片の材質はガラスとみられ、すべてが5mm程度の小片であったため、顕微鏡を用いてこれらの接合関係を把握し、パラロイドB72をアセトンで溶解したものを用以接合した。その結果7点が接合し、図IV-2右上のように螺旋状に溝が切られたものであることがわかった。このことから、ガラスの化学組成を調べるため分析を行った。

試料は7点が接合し塊状となったもの（試料1）、接合しなかった小片（試料2）の2点について行った。試料1、2は肉眼観察の限りでは同じ色調で、同一の個体であるように推察される。

### (2) F2について

前年度に報告済みの遺構ではあるが、新たに出土遺物が加わったことから、図、文章について再度掲載しておく（巻頭図版、図IV-2、図版Ⅲ-8）。

### F2

位置 D-24-D 長軸方位 N-90°-E 規模 0.64×0.42/0.18

調査 D-24Ⅲ層上面から-2cmで暗赤橙褐色の楕円形の広がりを検出した。下端確認のために広がり長軸方向に断面確認のトレンチを設定した。トレンチ調査によって暗赤橙褐色の焼土と判断した。1層の内容から屋外炉の可能性が高い。

堆積土 1層には調理の痕跡として焼魚骨片が含まれている。

形態 平面形は楕円形。Ⅲ層上部を焼成面とする。下端断面形は皿状。

遺物出土状況 遺物は焼土中から刀子、周辺から内耳鉄鍋・鎌が出土した。

時期 遺物と周囲の遺構の時期と焼成面の層準からアイヌ文化期である。

### (3) 分析手順

a) 測定前処理：表面の汚れを除去するため、アセトンを含ませた綿棒により表面をふき取り、十分乾燥させた。

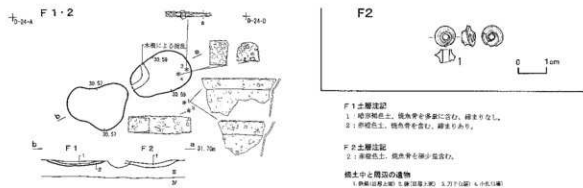
b) 試料固定の方法：XRF SAMPLE CUP（CHEMPLEX INDUSTRIES社製）にカーボン両面テープで試料を固定した。試料は微細かつ凹凸の多いものであるため、固定に当たってはX線ができるだけ平坦な面に照射されるよう固定した。

c) 測定機器：日本電子株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析装置（JEOL JSX-3220）を使用した。

d) 定量分析：使用機器付属のコンピュータ定量分析プログラム（バルクFP法）による。

### (4) 分析結果について

分析結果は表IV-6、7に示すとおりである。試料1、2とも鉛を主体として含み、カリウムを少量含む、鉛アルカリ珪酸塩ガラス系のものとみられる。



図IV-2 平成15年度柏木川13遺跡F1・2と試料(1)

表IV-6 試料1

測定条件: 電圧・30.0kv 電流・0.300mA ライブタイム・240sec バス・Vac			
定量条件			
定量法: 標準			
分析元素: Al, Si, P, K, Ca, Ti, V, Fe, Cu, As, Rh, Ir, Pb			
NUM	元素/化学式	wt (%)	at/mole (%)
1	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	2.6453	2.1919
2	SiO <sub>2</sub>	52.5199	73.8502
3	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	1.0590	0.6303
4	K <sub>2</sub> O	5.1823	4.6478
5	CaO	1.5014	2.2620
6	TiO <sub>2</sub>	1.7032	1.8010
7	V <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.0279	0.0130
8	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	4.3929	2.3241
9	CuO	0.8148	0.8654
10	As <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	nd	
11	OsO <sub>4</sub>	nd	
12	Ir <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	nd	
13	PbO	30.1535	11.4144

表IV-7 試料2

測定条件: 電圧・30.0kv 電流・0.300mA ライブタイム・240sec バス・Vac			
定量条件			
定量法: 標準			
分析元素: Al, Si, P, K, Ca, Fe, Ni, Cu, As, Ru, Rh, Ir, Pb			
NUM	元素/化学式	wt (%)	at/mole (%)
1	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	2.5930	2.0616
2	SiO <sub>2</sub>	58.4682	78.8853
3	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	1.0053	0.5741
4	K <sub>2</sub> O	3.9204	3.3737
5	CaO	1.5489	2.2390
6	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	3.7101	1.8834
7	NiO	0.1081	0.1173
8	CuO	0.7029	0.7163
9	As <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	nd	
10	RuO <sub>2</sub>	nd	
11	Ir <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	nd	
12	PbO	27.9432	10.1493

### III章 5節 参考文献

- 鷹部屋福平「アイヌ屋根の研究とその構造原体に就いて」『北方文化研究報告1』1939年
- 宮 宏明「4章2節 カリンパ型住居址の類例」『柏木川8・13遺跡』恵庭市教育委員会 1988年
- 上屋真一「IV章1節 第2号住居址について」『南島松4遺跡』恵庭市教育委員会 1991年
- 豊田宏良「縄文時代における住居構造からみた竈について」『古代の竈を考える 二分冊』埋蔵文化財研究会 1992年
- 鈴木 信「中世・近世」『北海道考古 30輯』1994年
- 瀬川拓郎「縄文時代住居の上屋について」『アイヌ民族博物館研究報告5』1996年
- 小林孝二「アイヌ民族の住居に関する研究」『北の文化交流史研究事業報告』2000年
- 北海道埋蔵文化財センター『徳香堅穴群』2002年
- 北海道埋蔵文化財センター『徳香堅穴群(2)』2003年
- 鈴木 信「II部C検討会・見解」『蝦夷からアイヌへ』北海道大学総合博物館2004年

#### (表III-7中の引用報告書)

- 岩手県埋蔵文化財センター「長瀬c遺跡」『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書』1981年
- 木村英明『いわゆる北大式土器とその文化に関する基礎的研究(予報)-文部省科学研究費による-』1985年
- 紋別市教育委員会『オムサロ台地堅穴群』1988年
- 恵庭市教育委員会『柏木川8・13遺跡』1988年
- 恵庭市教育委員会『南島松4遺跡』1991年
- 千歳市教育委員会『丸子山遺跡における考古学的調査』1994年
- 恵庭市教育委員会『茂漁5遺跡』1997年
- 千歳市教育委員会『ユカンボシC・オサツ2遺跡における考古学的調査』2002年
- 恵庭市教育委員会『カリンパ3遺跡(3)』2003年
- 北海道埋蔵文化財センター『柏木川13遺跡』2004年
- 北海道埋蔵文化財センター『柏木川4遺跡・柏木川13遺跡(2)』2005年

### IV章 1、2節 引用文献

- 加戸 卓・波邊 真紀子・藤嶽 暢英・太田 寛行、2000、妙高燕土壇断面における菌核の分布と科学組成 日本土壌肥科学会講演要旨集、46、35
- 松谷 暁子、2001、灰像と炭化像による先史時代の利用植物の探求 植生史研究、10、47-66
- 波邊 真紀子・藤嶽 暢英・太田 寛行、2001、土壌から検出される菌核様粒子の形態と化学組成の比較 日本土壌肥科学会講演要旨集、47、127
- 吉崎 昌一、1992、古代雑穀の検出。月刊考古学ジャーナル、No.355、2-14

### IV章 3節 文献

- 佐伯 浩(1982)『走査電子顕微鏡図説-木材の構造』日本林業技術協会
- 島地 謙、伊東隆夫(1992)『図説木材組織』地球社
- 三野紀雄(2002)「北海道の先史時代におけるいわゆる里山の形成」北海道浅井学園大学 生涯学習学部研究紀要第2号p. 187-201
- 三野紀雄(2004)「柏木川13遺跡の焼失住居から出土した炭化木材の樹種同定」『北理調報203 恵庭市柏木川13遺跡』北海道埋蔵文化財センター編

# 報告書抄録

ふりがな		えにわし かしわがわよん・かしわがわじゅうさんいせきに						
書名		恵庭市 柏木川4遺跡・柏木川13遺跡(2)						
副書名		柏木川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次		なし						
シリーズ名		財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号		第211集						
編著者名		立田 理・吉田裕吏洋						
編集機関		財団法人 北海道埋蔵文化財センター						
所在地		〒069-0832 江別市西野幌685-1 電話 (011)386-3231						
発行機関		財団法人 北海道埋蔵文化財センター						
発行年月日		平成17(西暦2005)年3月25日						
ふりがな 収録遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
柏木川4遺跡	恵庭市柏木町 610,612	01224	A-04-21	42度 53分 19秒	141度 33分 16秒	20040510 ～20050331	8470㎡	河川改修 に伴う記録保存
柏木川13遺跡	恵庭市北柏木 町1丁目256, 281	01224	A-04-107	42度 54分 05秒	141度 33分 55秒	20040520 ～20050331	132㎡	河川改修 に伴う記録保存
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
柏木川4遺跡	遺物包含地	縄文・中期、後期、 晩期、続 縄文・北 大期、擦 文文化期	竪穴住居 土坑 焼土 土器集中 集石	1 78 19 4 2	土器 石器等	縄文時代前期後半の 竪穴住居 縄文時代晩期土坑		
柏木川13遺跡	遺物包含地	縄文・中期、晩期、 擦文文化 期	竪穴住居 土坑	1 4	土器 石器等	擦文文化期、カリン バ型竪穴住居1		

遺跡番号は北海道埋蔵文化財包蔵地周知資料登録番号、経緯度は世界測地系による。



---

北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第211集

恵庭市 柏木川 4 遺跡・柏木川13遺跡(2)

—柏木川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行年月日 平成17年 3 月25日

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒069-0832 江別市西野幌685番地 1

T E L (011) 386-3231 (代表)

F A X (011) 386-3238

E-mail mail@domaibun.or.jp.

印刷 中西印刷 株式会社

〒007-0823 札幌市東区東雁来 3 条 1 丁目 1 番34号

TEL (011) 781-7501

---